

仙台市文化財調査報告書第375集

仙台旧城下町に所在する 民俗文化財調査報告書⑤

仙台の正月飾り

2010年3月

仙台市教育委員会

仙台の正月飾り

例 言

- 1 本書は、仙台市を補助事業者とした平成19年度国庫補助事業「仙台旧城下町に所在する民俗文化財調査」のうち、「仙台の正月飾り」に係る調査報告書である。
- 2 本調査の実施期間は平成19年6月5日～平成20年3月21日である。
- 3 調査は仙台市教育委員会文化財課（担当：伊藤優）の総括のもと、仙台民俗文化研究会が行った。
- 4 調査および執筆は次の者が共同で担当した（肩書きは当時）
 - ・鈴木岩弓（東北大学大学院教授）
 - ・加藤寛（瑞鳳殿資料館学芸員）
 - ・山崎環（宮城学院女子大学）
 - ・東北大学宗教学研究室構成員
- 5 本調査事業の目的と方法、調査体制、調査成果の概要を示すために別途「総括編」を刊行している。
- 6 調査及び報告書作成に関する諸記録、資料等は仙台市教育委員会が保管している。

仙台の正月飾り

目 次

はじめに

第1章 「正月飾り」……………1

第1節 仙台地方の正月行事……………1

第2節 さまざまな「正月飾り」……………13

第2章 「正月飾り」に関する神社調査……………15

第1節 調査の概要……………15

(1) 郵送調査

(2) 保存資料調査

(3) 現地調査

第2節 調査結果の概要……………18

第3章 仙台市内の神社における「正月飾り」……………21

第4章 まとめ……………90

文献一覧

はじめに

われわれ人間の生活は、ミクロに見た場合、その多くはアナログの時間の中で営まれている。しかしこれをマクロに見た場合、われわれは漂っている時間の流れの中に、区切りを設けてその違いを理解し生活していることが明らかになる。そのようなデジタル化した時間を設定しているのが、「人生儀礼」と「年中行事」などと呼ばれる、一連の儀礼群である。

「人生儀礼」は、いわば＜直線的な時間軸＞の中に、一生のうちで一回限りの時間の区切りが埋め込まれ、そのような区切りに対して儀礼が執り行われるものが多くを占めている。それに対して「年中行事」は、＜円環的な時間軸＞の中であって、毎年同じ月日を中心につけられた区切りに対して儀礼が執り行われることが大半である。

われわれの周りを流れている時間を、便宜的にそのように理解してみるなら、毎年、その年の初めに行われる「正月」という行事は、「年中行事」という＜円環的な時間軸＞のとりわけ新しい年を迎えて間もなくの時期を中心を設定されている、盆と並んで年中行事の中でも最大級の行事である。この機会は、年が改まるという年頭の初めの時期であり、またその時にやってくる正月の神を迎える、特別な時間と理解されている。それが故に人は、普段とは異なった形で、やって来た正月の神を歓待し正月を祝う気持ちを表明するのである。

このような気持ちの表れが、全国で行われている「正月行事」と呼ばれるものであるのだが、宮城県、とりわけ仙台周辺においては、正月に際して「お飾り」とか「きりこ」などと呼ばれる紙で作った縁起物、また時には神の依代が家の中のさまざまな場所に広く飾られることで有名である。本報告においては、そのような「正月飾り」の実態を、仙台市内の神社に対する調査を行うことで把握しようと心がけてきた。類似の調査は、宮城県神社庁が宮城県全体を対象に行った実証的研究〔宮城の正月飾り刊行会 2003〕や、その時の調査とほとんど重なる時期に行われた仙台市歴史民俗資料館による調査〔佐藤・伊藤 1997など〕の他には寡聞にして聞いたことがない。今回行った調査は、これまでの調査がいずれもサンプル調査であった点に鑑み、全ての神社を対象とした悉皆調査を目指した点に大きな特徴を持つ。

今回の調査の中からも、神職の代が変わることで奉製される「正月飾り」に変更が出る可能性があることが明らかになった。ということは今回の調査で明らかになった結果というのも、たまたま“今”という時点での「正月飾り」の姿でしか無く、今後もおいおい変化していく可能性を秘めているものである。その意味で、今回の成果はあくまでひとつの時間的限定をもった姿であるが、このような調査を繰り返すことにより、人々の信仰のダイナミズムを解き明かす手掛かりとなってこよう、今後へ向けた布石となれば幸いである。

第1章 「正月飾り」

第1節 仙台地方の正月行事

正月とは、旧年の無事終了と新年の開始を祝う行事の行われる、一年の中でも特別な時間帯である。その期間の理解には長短が見られるが、現行の「国民の祝日に関する法律」（祝日法）でいうと、元日の1月1日のみが「年の初めを祝う」祝日として法律的に規定されている。しかしわれわれの実際の生活感覚にあっては、新年を迎えた最初から松の内の七日間ほどの間のどこまでかに期間を設定することが多いが、その運用上3日までを「三が日」と称して正月の内と見なし、事実上の祝日扱いをすることが一般的である。官公庁の「御用始め」が4日に設定されていることは、その証左ともいえる。

他の多くの年中行事と同様、一年に一回しか訪れてこない正月ではあるが、他の行事と比較して、この期間にはことさら、聖性の高い非日常の時間が流れていると考えられている点は重要である。そのように高い聖性を認める大きな根拠としては、伝統的社会においてはこの期間に歳神などと呼ばれる来訪神が各戸を訪れてくると考えられている点がある。従ってその期間中には、「初詣」や「お年始」と称して神社仏閣や近しい親戚・縁者の家を訪問したり、ハレの食事としての「御節料理」を食べたりといった、非日常の行動が数多く見受けられるのである。

正月期間中、そのような非日常的時間を過ごすわれわれは、新年を迎えるにあたって、家の内外を清めて掃除すると共に、非日常的な時間を過ごしていることを示すためのくしるし>として、「正月飾り」などと呼ばれる特別の飾りを家のそこここに設置する。「正月飾り」は、日本全国それぞれの地方で地域性をもったさまざまな形態のものが飾られているが、広く全国に見られるものとしては、門松・松飾り・注連飾り・注連縄・玉飾り・輪締め・神棚飾り・床の間飾り・座敷飾り・掛け軸・生花・鏡餅などがさまざまに選択されている。これらはいずれも、新しい年を迎えるにあたって、われわれの日常空間を清め、その時・そこが聖性の高い空間となっていることを示すくしるし>を付与する意味を含んでいるのである。

本報告で取り上げていく「正月飾り」は、今挙げたものの中では多くを「神棚飾り」の中を含めることが可能な、他の「正月飾り」よりもさらに聖性の高い、正月を迎えるにあたっての信仰上の依代的な紙細工である。これらに対する呼称としては、「お飾り」「きりこ」「御幣」などがあるが、仙台地方においては原則的に俗人の手によって作られるものではなく、主に地域の神社にかかわる神職によって奉製されて頒布される点に伝統的な特色をもっている。

仙台市内の神社の中には、年の瀬も迫った12月の下旬頃になると、主に氏子を対象として、新たな年を迎えるための新しい御札や神像・切り紙・幣束などが、しばしばそれぞれの氏子の家の状況に合わせた形で、必要な種類の祭祀対象が、必要な枚数ずつセットにされて頒布されている。ある意味でその家の祭祀場所は、神職によって十分に把握されており、その情報が引き続き次年度の製作資料として伝えられているのである。以下には、そのような正月準備の事例を、仙台市青葉区大倉下大倉にある結城本家の事例を手掛かりに見ることにしよう。ここに挙げた正月準備の資料は、仙台市内の伝統的な正月行事についてまとめた佐藤雅也氏及び伊藤優氏の報告に、われわれが収集した聞きとり調査の結果を加味してまとめたものである [佐藤・伊藤 1997: 59-70] [佐藤 2003: 31-46]。

<表1>青葉区大倉の結城本家の事例を中心にした仙台の正月行事

月日	行事
11月3日	以前は12月の下旬に配布していたが、1984年以降小倉神社の秋の大祭のこの日に、氏子それぞれの家で飾る正月飾りを各地区の役員に配布するようになり、これを各家に頒布してもらっている。 結城本家の正月飾りは、ご神像画：8枚、幣束：33本、切り紙：2種、ご祈祷神符：1枚、神宮大麻：1枚である。
12月1日	「祓いの節句」仙台近郊の山間地集落で見られた行事で、祓いの朔日、水零しの朔日とも呼ぶ。
12月8日	「八日団子」八日の朝に小豆団子を神様にあげる。この日に神を送り、2月8日に天から神様を呼び戻し、晩に小豆団子をあげる。
12月9日	「大黒さんの嫁取り」耳取、嫁迎えとも呼ぶ。
12月10日	「菜の年越し」野菜の年取りとも言う。
12月12日	「山神様のお年取り」
12月13日	オセツツキ（節米搗き）：土間に白を並べ、別家の人々が餅を搗く。戦後になり廃れた行事。
12月20日頃	「煤掃き」来訪してくるお正月さまなどの神々のために家の内外の掃除を家族総出で行う。現在は台所だけに縮小している。結城本家では、一年間飾ったままにしていた正月用飾り物や注連縄をこの時に外して、屋敷裏の山神様の祠に納める。
12月23日	「延命地藏さんのお年とり」
12月25日	「納豆ねせ」自家製の納豆を作り、お年とりの日に神様にあげる。
12月28日	「餅つき」29日には搗かず。28日が都合悪い時は、30日に搗く。
12月30日	「餅つき」28日に搗かなかった時。
12月31日	・「お年とり」年男が風呂に入って身を清めた後、「正月用の注連縄（8本）」「輪年縄（90本）」「松飾り（4対）」「門松（3対）」を製作し飾り付ける。また、小倉神社から受けてきた正月飾りを、家の内外の所定の場所に飾る。 ・年男が、受けてきた正月飾りを、家の内外の所定の場所に安置。
	・「白伏せ」母屋の土間に伏せた白に注連縄を張り、その上に若水を汲む手桶と柄杓を安置。白の中には洗米を入れ、一升瓶を添える。
	・神々にお供え餅、ご飯、納豆、膾、神酒を供える。
	・正月神に対しては、「オミダマサマ」と称する簀の中にご飯と膾を入れたものを恵方に安置する。
1月1日	・早朝に年男は若水を汲み、正月神はじめ神々に餅・ご飯・納豆・膾を供物として供える。
	・若水で作った雑煮なども同じく供える。
	・年男は屋外の四つの小祠（山神・下の明神・愛宕、松尾）に元朝参り。
1月2日	・関係の深い家に挨拶回り。
	・諸行事の儀礼的開始として、謡曲や田植踊りの練習、書き初めや買い初めをする。
1月7日	・七草粥を若水と共に神々に供え、家族が共食する。
1月8日	・門松飾りを下げる。
1月11日	・朝食前に馬屋から堆肥を田まで運び、農作業の開始とする。「大正月」の終了を意味する。
1月13日	・餅で稲穂と粟穂の作り物を作る。
1月14日	・小正月の年取りの晩に、屋敷内の十一社の神々にご飯・膾・納豆・神酒、そして灯明をあげて拝む。 ・結城本家以外の地区の家では、この日の夜に正月用飾り物を撤去して小倉神社に持参し、「お柴燈」と称する火祭りでお焚き上げをする。 ・ミズの木に団子を刺して実のように成らし、前日作った稲穂と粟穂も飾り付ける。
1月15日	・早朝二時頃年男は若水を汲み、それで炊いたアカツキ粥を神々に供え、鎮守の小倉神社と結城家の氏神様などにアカツキ参りをする。 ・早朝に年男が竹の先端に御幣をはさみ、外庭でこれを振りまわしながら「ヤヘーボーイ」と言いながら鳥追いの行事をする。

<表1>にまとめられた行事の中には、現在はもう行われていないものや、結城家では行っていないものも含まれているが、これを見ることで、仙台におけるある程度典型的な正月行事の流れの把握が可能となろう。

この中で注目すべきは、「お年とり」の12月31日に行われる正月飾りの設置であろう。このことを行うことによって、初めて正月を迎える準備が完了することになるのである。結城家の鎮守にあたる小倉神社で設置される正月飾りは、現在では11月の秋の大祭の時に頒布されている。実はこの神社の秋の大祭は、1983年までは旧暦の9月29日に行っていた。しかし旧暦で祭典を行うと、祭りの日が必ずしも休日に当たらないため、人の集まりも良くないということでもっと集まりやすい日へ変更することとなり、翌年の1984年からは11月3日の文化の日に祭典を行うことになったものという。そしてこの時ならば多くの参加者があるということで、正月飾りの配布もこの時に行うことになった。各家別の正月飾りのセットを切ることは、大倉地区全体の鎮守となっている小倉神社の神職にとっては非常に大きな責任ある仕事として意識されており、現在では7月のうちからその製作準備がなされているという。

1996年時点で、正月飾りが頒布されている氏子は37軒、氏子以外の崇敬者は24軒である。今述べた崇敬者は、ダム建設で大倉地区から他地域へ移住した元の氏子や、大倉地区に実家があって他所に居住している人などである。

頒布に際しては、正月飾りは各戸別に袋に詰めて配られる。その中に入っているもののうち、まず基本的なものについては以下のようなになる

御 札：神宮大麻<写真1>・小倉神社<写真2>

御神像：大国主神・宇迦御魂神・大年神・事代主神<写真3～6>

山神宮<写真7>

奥津彦神奥津姫神<写真8>

宮城県神社庁平成25年第62回神宮式年遷宮チラシ<写真10>

神道的祭祀法の案内パンフレット<写真9>

祭事暦<写真11>



<写真1>神宮大麻



<写真2>小倉神社の御札



<写真3>大年神



<写真4>大国主命



<写真5>事代主神

<写真6>五穀豊饒



<写真7>山神宮



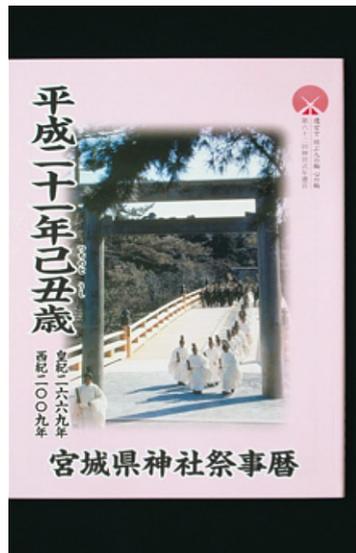
<写真8>奥津彦神奥津姫神



＜写真9＞神道の祭祀法の案内パンフレット



＜写真10＞宮城県神社庁平成25年第62回神宮式年遷宮チラシ



＜写真11＞祭事暦

これに加えて、それぞれの家の状況に応じて、以下のお飾りや幣束が頒布される。

切り透かし型お飾り：八枚飾り、六枚飾り、四枚飾り

紙注連型お飾り：口すう鮎

幣束：白幣束、祓い幣束、紙垂、ボンデン

ここに記したお飾りなどの具体像に関しては、第3章において説明する。

そこで次に、具体的な一つの家において正月を迎えるためにいかなる「正月飾り」が用いられているのかについて見ることにしよう。このような例をみていくと、そこで用いられる「正月飾り」は必ずしも神社から受けてきたもののみならず、自宅でもって自分たちが作ったものや、神社とは別のスーパーなども含めた店から買い求めて使用する場合も見られることが明らかになる。

以下に見ていくのは、仙台市若林区荒町の、いわゆる「荒町通り」に面したところにある1603年に

創業した古くからの仙台味噌の店、(株)佐藤麹味噌醤油店の事例である。



<写真12>正月準備の整った神棚

神棚には「謹賀新年」と記された藁製の「お飾り」があげられ、その回りには「幣束」と「タマガミ」があげられている。また画面左には「輪飾り」のついた「松」があげられている。

仏を祀る「仏壇」は、わが国の正月においては余り関わりをもたれないことが多いが、このお宅では、鏡餅を供えると共に「タマガミ」を飾っている。



<写真13>正月を迎える仏壇

自宅のいろいろな場所におく「幣束」を作成する。飾る場所によってそれぞれ意味があり、それに応じて幣束の材質や形態に違いが見られる。このお宅では白と五色、金と銀が見られた。



<写真14>幣束を作成



<写真15>完成した幣束

以下にこのお宅の各所に飾られた「正月飾り」を列挙しよう。



<写真16>店頭



<写真17>店の商品棚の上



<写真18>戸口



<写真19>戸口



<写真20>完成した幣束



<写真21>窓の回りに置かれた「正月飾り」



<写真22>機械に対しておかれた「正月飾り」



<写真23>敷地内の屋敷神に供えられた松

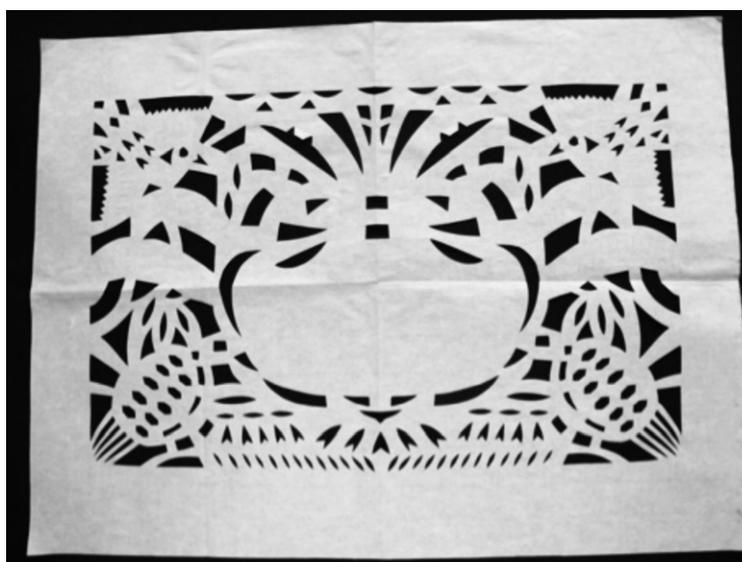
第2節 さまざまな「正月飾り」

仙台市内の「正月飾り」を見ていくにあたって、その形態を整理しよう。「正月飾り」と総称されるものは和紙や美濃紙などの紙を用いて奉製される共通点をもつが、それらを二分するポイントは、紙を切るか否かという点である。紙を切るのは「切り紙細工」とも言うべきもので、宮城県内では広く「お飾り」「お幣束」「きりこ」などの呼称で呼ばれ、一枚もしくは複数の紙をそのまま扱うのではなく、切れ目を入れることで何らかの細工を施して「正月飾り」としている。これに対して他方は、紙に切れ目を入れることなく「正月飾り」とする「垂紙」や「飾り紙」などが該当する。

本報告では、以上の中でも「切り紙細工」に分類される「正月飾り」に限定して取り上げていくこととする。この「切り紙細工」は、これまでの先学の研究の成果などを参考にしてみると、その形態の点から「切り透かし形式」「紙注連形式」「幣束形式」「人形（ひとがた）形式」の四種に分けて考えられてきたが、仙台市内からは「人形形式」は見いだせないため、ここでは前三者の説明のみをする。

(1) 切り透かし形式

一枚の紙の全体に、吉祥柄や信仰と関わる図柄などを切り透かした、厚みのない平面的な飾り物である。切り透かす前段階で紙を二つ折り、四つ折りなどにし、左右対称の図柄を表現する場合と、折らずに左右対称とはならない場合とがある。後者は仙台市内からは確認されないが、「福」「禄」「寿」の三枚で1セットとなるような正月飾りが該当する。



<写真24>切り透かし形式：左右対称のもの

(2) 紙注連形式

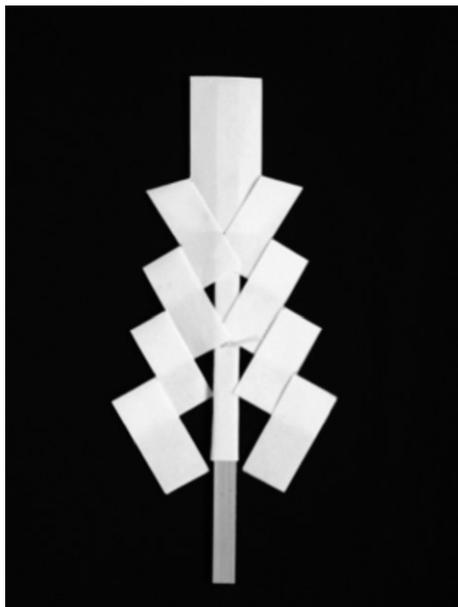
折った紙に複雑な切り込みを入れ、それをほぐすことで立体的な飾りものとする形式。この形式には、その中心部に一定の形があって、そこから左右に飾りが展開していく「おかざり型」と、そのような左右への展開が無く、一方向にのみ伸びる「しで型」とがある。ただし、今回の調査からも、仙台市内に見られるのは「しで型」が中心であることが明らかになった。



＜写真25＞紙注連形式：しで型

(3) 幣束形式

仙台市内の神社で頒布される「正月飾り」の中では、一番数多く奉製されている形式である。「幣束」とは、神々の依代と考えられているだけではなく、神々への供物、われわれ人間の罪ケガレを払うモノなど、さまざまに解釈されている。串に挟むための細工を施した切り紙細工であって、「基本型幣束」は「弊：ぬさ」などと呼ばれ、左右対称に紙が折られて両側からサガリ（紙垂）が入っている。これに対して具象的な動物などの形が刻まれていたり、左右対称ではなくアンバランスな形になっているものは「変化型幣束」と呼ばれる。



＜写真26＞幣束形式：基本型幣束



＜写真27＞幣束形式：変化型幣束

第2章 「正月飾り」に関する神社調査

第1節 調査の概要

今回実施した、神社に対する「正月飾り」に関する調査の目的は、仙台市内の正月時に飾られる「正月飾り」の実態を、それを頒布している仙台市内の神社の側から把握する点にある。これと類似した企画としては、宮城県神社庁が宮城県下全体を対象に実施した調査があり、その成果は2003年6月に『祈りのかたち』（宮城の正月飾り刊行会編：日貿出版社）として出版されている。この調査と今回の調査の大きな違いは、対象として取り上げる範囲が仙台に限定されている点、調査対象とする神社が前回は仙台市内の一部の神社であったのに対して、今回は対象を仙台市内の全ての神社にとったことの二点である。

そのため調査対象は、仙台市内にある宮城県神社庁が管轄している全神社、92社である。これらの神社は、宮城県神社庁の組織からいうと、「仙台支部」に所属する76社と、「宮城塩竈支部」に所属する16社である。

この報告にまとめられた調査を担当したのは、下記の三名である（役職は担当時）。

加藤 寛（（財）瑞放殿 学芸員）

鈴木岩弓（東北大学大学院 教授）

山崎 環（宮城学院女子大学）

この三人が「正月飾り」の収集・計測・撮影・整理・報告を行ったが、山崎氏は計測・撮影の途中から都合により不参加となった。従って、本報告は加藤と鈴木によるまとめということになる。

「収集」に関しては、二種の収集を考えた。それはまず、郵送調査において行った、「正月飾り」を三分割して整理した場合、対象神社ではこれまでそのどれを奉製してきたか、奉製したことがあるかといった情報収集である。他方の収集は、「正月飾り」自体の収集である。郵送調査に回答いただいても、実際の「正月飾り」を入手することはなかなか困難であった。そのため、以前の宮城県神社庁の調査の際に収集したものを、神社庁のご好意で見せていただいた。また年末、直接神社に出向いて、「正月飾り」を頒布してもらおうという方法も併用した。

「計測・撮影」に関しては、東北大学宗教学研究室の学生にアルバイトとして参加してもらい、採寸とデジタルカメラでの撮影を行った。皆熱心によってくれたので、大変能率良く実施できた。

「整理・検討」は加藤と鈴木で資料から読み取れる傾向性などを検討して分析を行い、その成果を本報告書にまとめた。

以下、今回実施した調査の具体像についてまとめてみる。

(1) 郵送調査

平成20年2月10日～18日にかけて、仙台市内の神社の関係神職にアンケート用紙を送付し、回答した後の用紙を、同封した返信用封筒で返送いただくというやり方の郵送調査を実施した。

調査対象となったのは仙台市内の宮城県神社庁に所属する神社92社の中で、本務社の宮司として、また宮司不在の場合は本務社の宮司代務者・権禰宜・禰宜として勤務されている総勢32名の神職で、それぞれが兼務している神社の状況も含めて回答願った。

使用した質問用紙は以下のものである。

正月飾り（「きりこ」）の作製状況調査票

■本務、兼務していらっしゃる各神社における、正月飾り（「きりこ」）の作製状況を伺いたく思います。
 ■各神社ごとに、「紙注連形式」、「切り透かし形式」「幣束形式」の各種について、

- ・現在作製していれば「○」
- ・以前作成していたが現在作製していなければ「△」
- ・わかる限り昔から作成していなければ「×」

をご記入下さい（正月飾りの種別については、右の図をご覧下さい）。

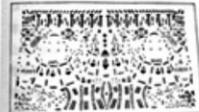
■万が一、神社に漏れがありましたら、表にお書き加え下さい。
 ■ご多用とは存じますが、ご返信は2月18日まで必着で、同封の封筒にてお願いいたします。

神社名	住所1	住所2	宮司名	紙注連形式	切り透かし形式	幣束形式

参考



紙注連形式



切り透かし形式

（上）切り透かし形式



幣束形式

＜図1＞郵送調査に使用した調査票

この郵送調査への回答は23件であった。つまり32の対象に対して23件の回答があったということであるので、回答率は71.9%であった。通常行われる郵送調査の回収率と比較すると、相当高い回収率と考えられ、神職の正月飾りに対する、あるいは今回の調査に対する関心の高さを窺わせるものである。とはいえ回答内容に関しては、ご自身の本務神社の内容のみを書かれていて、兼務神社に関する情報には一切触れていないご回答が多くあった。おそらく前述のような回答用紙に○や×を記入する方法が煩わしく思われた方もいらしたことと思う。しかし、そのような回答をされたところの多くでは、他の情報から判断するに、本務神社と同じ状況だということを書かなかった可能性が高いものと判断される。

(2) 保存資料調査

ここでいう保存資料とは、前述したように宮城県神社庁が行った宮城県下全体を対象とした「正月飾り」の調査の際に収集されたものである。この調査は1995年11月に発足し、2003年の6月の『祈りのかたち』刊行で幕を閉じた。今回の調査を担当した鈴木岩弓は、この時の調査の調査委員でもあったため、その時に収集した仙台市に関わる「正月飾り」を今回借用し、改めて計測し、写真撮影を行った。このことを通じて郵送調査から外れた返送の無かった神社に関する情報を補足すると共に、回答のあった神社でも代が代わり、現在は奉製していない「正月飾り」が神社庁に提供されている場合も確認された。時には、現神職が「×」とつけた「正月飾り」の現物が保存されていることがわかり、正確な事実の再現にも役に立ったものと思われる。

(3) 現地調査

神社の中には、郵送調査に回答いただけないところが多々あり、またアンケートに回答いただいた

内容の中には、さらに確かめなければならない問題を孕んでいるケースもそれ程珍しくはなく見られた。そこで一部の神社に対しては、実際に出向き、場合によっては「正月飾り」の頒布を受けながらデータの収集を行った。

第2節 調査結果の概要

<表2> 仙台市内の神社における「正月飾り」奉製状況

神社名	郵便番号	鎮座地	氏名	紙注連形式	切り透かし形式	幣束形式
宮城縣護國神社	980-0862	仙台市青葉区川内1	田中 光彦	×	×	×
櫻岡大神宮	980-0823	仙台市青葉区桜岡公園1-1	坂本 壽郎	×	×	△
伊勢神明社	981-0936	仙台市青葉区千代田町4-33	坂本 壽郎	×	×	×
東照宮	981-0908	仙台市青葉区東照宮1-6-1	高崎 恒晴	×	×	○
和光神社	983-0861	仙台市宮城野区鉄砲町39	高崎 恒晴	×	×	×
小田原八幡神社	983-0812	仙台市宮城野区小田原弓ノ町21-1	高崎 恒晴	×	×	×
小田原神明宮	983-0837	仙台市宮城野区栢江9-5	高崎 恒晴	×	×	×
青葉神社	981-0916	仙台市青葉区青葉町7-1	片倉 重信	/	/	○
大崎八幡宮	980-0871	仙台市青葉区八幡4-6-1	小野目博昭	/	/	○
愛宕神社	980-0871	仙台市青葉区八幡1-4-3	小野目博昭	/	/	○
春日神社	980-0871	仙台市青葉区八幡2-11-16	小野目博昭	/	/	○
仙台大神宮	980-0812	仙台市青葉区片平1-3-6	當山 春樹	×	×	△
榴岡天満宮	983-0851	仙台市宮城野区榴ヶ岡23	菅野 恵之	×	×	○
塩釜神社	983-0852	仙台市宮城野区榴岡2-2	菅野 恵之	×	×	×
為朝神社	980-0854	仙台市青葉区川内仲ノ瀬23	菅野 恵之	×	×	×
八坂神社	983-0821	仙台市宮城野区岩切字若宮前11-7	佐山 輝明	/	△	/
松尾神社	980-0004	仙台市青葉区宮町4-2-43	庄司 千春	×	×	○
堤町天神社	981-0912	仙台市青葉区堤町2-10-19	庄司 千春	×	×	○
八雲神社	981-0933	仙台市青葉区柏木3-5-16	庄司 千春	×	×	○
神明社	981-0965	仙台市青葉区荒巻神明町25-17	庄司 千春	×	×	○
磐上神社	981-0914	仙台市青葉区堤通雨宮町1	庄司 千春	×	×	○
滝沢神社	980-0014	仙台市青葉区本町2-11-7	庄司 千春	×	×	○
羽黒神社	981-0931	仙台市青葉区北山2-8-15	庄司 千春	×	×	○
朝日神社	980-0011	仙台市青葉区上杉6-5-2	庄司 千春	×	×	○
愛宕神社	982-0841	仙台市太白区向山4-17-1	郡山 宗英	△	△	○
亀岡八幡宮	980-0865	仙台市青葉区川内字亀岡町62	郡山 宗英	×	×	○
箱石神社	984-0056	仙台市若林区成田町104	郡山 宗典	/	/	/
宮城野八幡神社	983-0047	仙台市宮城野区銀杏町7-37	郡山 宗典	/	/	/
穴蔵神社	980-0814	仙台市青葉区霊屋下21-16	郡山 宗典	/	△	/
白鳥神社	980-0866	仙台市青葉区川内三十人町50	郡山 宗克	×	×	×
蠣崎神社	980-0812	仙台市青葉区片平1-2-18	郡山 宗克	×	×	×

姥神社	983-0044	仙台市宮城野区宮千代1-4-5	郡山 宗克	×	×	○
信夫神社	984-0057	仙台市若林区三百人町147-2	郡山 宗典	/	/	/
諏訪神社	982-0003	仙台市太白区郡山5-13-8	二階堂章子	/	○	○
八坂神社	982-0033	仙台市太白区富田字上野中4	二階堂章子	/	○	○
八幡神社	982-0804	仙台市太白区鉤取1-10-35	二階堂章子	/	/	○
羽黒神社	982-0817	仙台市太白区山田羽黒台1-21	二階堂章子	/	○	○
舞臺八幡神社	982-0011	仙台市太白区長町4-2-12	二階堂章子	/	/	○
白山神社	984-0047	仙台市若林区木ノ下3-9-1	二階堂章子	/	/	○
青麻神社	983-0821	仙台市宮城野区岩切字青麻沢32	鈴木 雅香	△	△	○
多賀神社	982-0032	仙台市太白区富沢3-15-1	渡邊 優	○	○	○
中田神社	981-1105	仙台市太白区西中田1-20-12	懈良 武	×	○	○
旅立稲荷神社	984-0826	仙台市若林区若林2-1-3	荒井 浩	△	△	○
四社宮	984-0051	仙台市若林区新寺1-7-38	荒井 浩	/	/	/
生出森八幡神社	982-0251	仙台市太白区茂庭字中瀬西31	高橋 一磨	×	○	○
七郷神社	984-0032	仙台市若林区荒井字押口56	荒井スミ子	/	○	○
春日神社	980-0821	仙台市青葉区春日町8-3	宮崎 拓史	×	×	○
熊野神社	981-0915	仙台市青葉区通町1-3-16	宮崎 拓史	/	/	/
鹿島神社	981-0916	仙台市青葉区青葉町3-14	宮崎 拓史	/	/	/
八幡神社	984-0831	仙台市若林区沖野3-16-35	六郷 洋一	×	×	○
八幡神社	984-0838	仙台市若林区上飯田2-9-11	六郷 洋一	○	○	○
日吉神社	984-0845	仙台市若林区二木字山王23	六郷 洋一	×	○	○
五柱神社	984-0843	仙台市若林区藤塚屋敷51	六郷 洋一	○	○	○
高砂神社	983-0002	仙台市宮城野区蒲生字町86-41	小野 修	○	×	○
神明社	983-0002	仙台市宮城野区蒲生字八郎兵衛第1の25	小野 修	/	/	/
伊達八幡神社	984-0812	仙台市若林区五十人町24	高田 雅昭	×	×	/
平田神社	983-0841	仙台市宮城野区原町2-1-37	高田 雅昭	×	×	/
福沢神社	980-0004	仙台市青葉区宮町4-9-12	高田 雅昭	×	×	○
大山祇神社	983-0036	仙台市宮城野区原町苦竹字新田26	高田 雅昭	×	×	/
豊玉神社	983-0841	仙台市宮城野区原町3-1-10	高田 雅昭	×	×	/
稲船神社	983-0842	仙台市宮城野区五輪1-14-27	高田 雅昭	×	×	/
白鳥神社	984-0055	仙台市若林区表柴田町3	石森 啓暉	/	/	/
矢先神社	983-0862	仙台市宮城野区二十人町36	石森 啓暉	/	/	/
八幡神社	982-0231	仙台市太白区坪沼館前東70	高山 晃和	×	×	○
秋保神社	982-0243	仙台市太白区秋保町長袋字清水久保北22	高山 晃和	×	△	○
二木神社	983-0021	仙台市宮城野区田子3-2-40	田村 稔	○	○	○
熊野神社	983-0024	仙台市宮城野区鶴巻1-9-6	田村 稔	○	○	○

田村神社	983-0023	仙台市宮城野区福田町2-1-19	田村 稔	○	○	○
住吉神社	983-0005	仙台市宮城野区福室平柳81	田村 稔	○	○	○
雷神社	983-0005	仙台市宮城野区福室字県道前96	田村 稔	○	○	○
深山神社	983-0005	仙台市宮城野区福室4-1-8	田村 稔	○	○	○
吉窪神社	983-0003	仙台市宮城野区岡田字浜通29	田村 稔	×	×	○
賀茂皇大神社	983-0003	仙台市宮城野区岡田字明神東1	田村 稔	×	○	○
八幡神社	984-0803	仙台市若林区新弓ノ町50	西村 強	×	×	○
古城神社	984-0816	仙台市若林区河原町2-7-10	西村 強	×	×	○
船丁松尾神社	984-0806	仙台市若林区舟丁64-9	西村 強	×	×	○
二柱神社	981-3117	仙台市泉区市名坂字西裏62	藤岡 芳之	/	/	○
八坂神社	981-3131	仙台市泉区七北田字大沢丸山38	藤岡 芳之	/	/	○
須賀神社	981-3124	仙台市泉区野村字萩塚1	藤岡 芳之	/	/	○
熊野神社	981-3111	仙台市泉区松森字下町1	藤岡 芳之	/	/	○
愛宕神社	981-3131	仙台市泉区七北田字白水沢114-2	藤岡 芳之	/	/	○
宇那禰神社	989-3212	仙台市青葉区芋沢字明神14-1	宮崎 満明	○	○	○
諏訪神社	989-3124	仙台市青葉区上愛子字宮下40	宮野 教光	×	○	○
小倉神社	989-3213	仙台市青葉区大倉字宮前1	大宮 典保	×	○	○
熊野神社	981-3217	仙台市泉区実沢字熊野山17	石川 昇	/	○	○
宇佐八幡神社	981-3221	仙台市泉区根白石館下36	石川 昇	/	○	○
八幡神社	981-3226	仙台市泉区朴沢字八幡下41	石川 昇	/	/	○
鷲倉神社	981-3225	仙台市泉区福岡字小山19-2	石川 昇	/	○	○
貴布禰神社	981-3216	仙台市泉区小角字明神2	石川 昇	/	/	○
住吉神社	981-3224	仙台市泉区西田中字下田中15	石川 昇	/	/	○
賀茂神社	981-3123	仙台市泉区古内字糺1	石川 昇	/	/	○
松尾神社	989-3121	仙台市青葉区郷六字葛岡26	高田 雅昭	/	/	/

○：現在奉製中

△：以前奉製したことがある

×

/：無回答

第3章 仙台市内の神社における「正月飾り」

本章においては、今回の調査で新しく収集した「正月飾り」のみならず、これまでの調査で既に収集してあるものも含めて、神社ごとに奉製している、あるいは過去に奉製していた「正月飾り」を個別に見ていくことにする。

ここで整理する「正月飾り」はこれまでに見ることができ、写真撮影すると共に計測できたものに限定しており、存在がわかっているが入手できなかったものについては掲載していない。ただし若干ではあるが、他の資料からその形状などが明らかになるものについては、写真は掲載しないものの、その点に関する情報のみを記載した。

仙台市内の神社は、本務神職が従事しているある程度規模の大きな神社と、そのような神職が兼務する小規模な神社に二分される。前者の場合は、その多くが神社に隣接して神職の自宅があって、例えば社務所に人がいない場合でも、神職の自宅に声をかければ祈祷の依頼や御札や御守りの頒布などは可能な状態にある。いわば、日常的に神社の業務が執り行われているといえる。これに対して後者の場合は、全くの無人である場合も多く、そこでの御札の頒布などは時期が限られていたり、あるいは氏子総代を通じて神職からまとめて頒布されるなどの方法で行われている。そのため兼務社で頒布されている「正月飾り」は、通例、本務社で頒布しているものと同じものが頒布されている。そこで本章では、兼務社において「正月飾り」を頒布している場合であっても、それが本務社で出しているのと同様のものである時には本務社のみを取り上げて写真を掲載し、それと同じお飾りが同様に頒布されている兼務社については、その旨付記するだけにする。

ここで取り上げる神社については、可能な限り以下の点に関する情報をまとめ、神社自体の基本的情報を記載する。

- (1) 鎮座地
- (2) 主祭神
- (3) 例祭日
- (4) 由 緒
- (5) 合祀社
- (6) 境内社
- (7) 社 殿
- (8) 宝 物
- (9) 境内地
- (10) 正月飾り

ただし、上記の項目のうち該当する情報が入手できなかったものに関しては、項目名を含めて抜かすこととした。それが故に、神社によって(1)から(10)の番号が全て挙がるわけではないことにご留意いただきたい。なお、本章をまとめるにあたっては、宮城県神社庁で刊行した『宮城県神社名鑑』(昭和51年10月20日)および、宮城県神社庁ホームページ<http://www.miyagi-jinjacho.or.jp/>を参考にした。

郵送調査の回答からは現在奉製していないものであっても、宮城県神社庁に現物が収蔵されている場合は、「△」とする。

次頁以降、以下の神社の「正月飾り」について説明する。

櫻岡大神宮	仙台市青葉区桜岡公園1-1
大崎八幡宮	仙台市青葉区八幡4-6-1
仙台大神宮	仙台市青葉区片平1-3-6
松尾神社	仙台市青葉区宮町4-2-43
愛宕神社	仙台市太白区向山4-17-1
諏訪神社	仙台市太白区郡山5-13-8
青麻神社	仙台市宮城野区岩切字青麻沢32
多賀神社	仙台市太白区富沢3-15-1
中田神社	仙台市太白区西田中1-20-12
旅立稲荷神社	仙台市若林区若林2-1-3
生出森八幡神社	仙台市太白区茂庭字中瀬西31
七郷神社	仙台市若林区荒井字押口56
春日神社	仙台市青葉区春日町8-3
八幡神社	仙台市若林区沖野3-16-35
高砂神社	仙台市宮城野区蒲生字町86-41
福沢神社	仙台市青葉区宮町4-9-12
稲船神社	仙台市宮城野区五輪1-14-27
八幡神社	仙台市太白区坪沼館前70
二木神社	仙台市宮城野区田子3-2-40
二柱神社	仙台市泉区市名坂字西裏62
宇那禰神社	仙台市青葉区芋沢字明神14-1
諏訪神社	仙台市青葉区上愛子字宮下40
小倉神社	仙台市青葉区大倉字宮前1
熊野神社	仙台市泉区実沢字熊野山17

櫻岡大神宮（さくらがおかだいじんぐう）

(1) 鎮座地：宮城県仙台市青葉区桜ヶ岡公園1-1

(2) 主祭神：天照皇大神・豊受大神

(3) 例祭日：10月17日

(4) 由 緒：

元和7年（1621、江戸）仙台藩祖伊達政宗公が伊勢両宮の分霊を府内荒巻村の勝地に勧請した。別当寺を祇山神宮寺（妙海法印開山、今の北山町伊勢堂山）という。天和2年4代綱村公伊勢堂山の規模を拡張、社殿を改築して社領二貫文の地（加美郡色麻村）を寄進した。累代藩主継嗣の時必ず参詣するを例とした。維新の際神宮寺を廃し、明治2年村社に列せられ荒巻神明社と改称、同5年仙台大町の商人佐藤助五郎等の協力により元柳町に遷す。同8年5月県社に列格、社号を現在名に改めた。後、社殿が甚しく腐朽したので大正15年氏子総代八木久兵衛等の主唱で社地を更え社殿を造営して10月遷座式を行う。（封内風土記、社蔵文書）。これより先、明治41年中の町の住吉神社を合祀し、同45年には榴ヶ岡の村社神明社及び洲崎神社、大正2年には花壇の住吉の各社を合せ祀る。

(6) 境内社：歳徳神社

(7) 社 殿：本殿 神明造1.3坪

幣殿3坪

拝殿24坪

社務所25坪。

(9) 境内地：770坪

(10) 正月飾り：

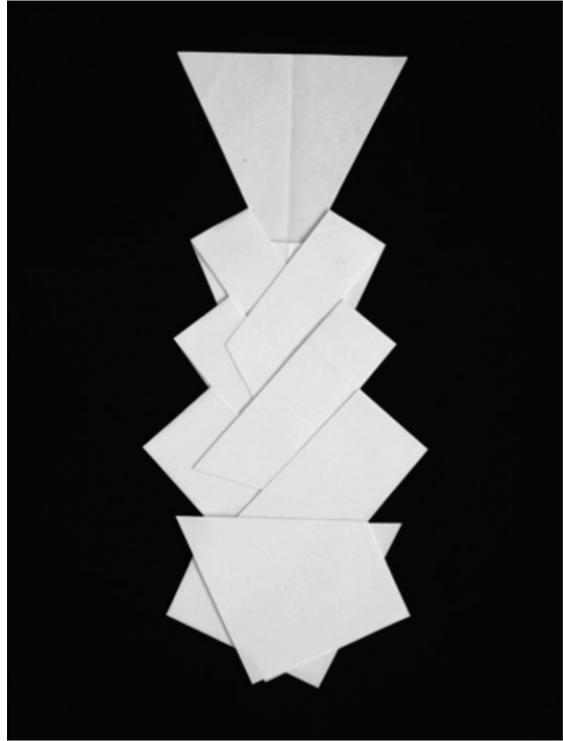
郵送調査への回答では、三種の「正月飾り」のいずれもが作られてはいなかった。しかし宮城県神社庁が実施した調査の際には、二種類の幣束が提出されている。

形態の上からは、どちらの幣束もオーソドックスな、いわゆる「基本型」に分類されるタイプである。その呼称はどちらも「おへいそく」が用いられ、差別化されてはいない。両者の相違点は紙の使用枚数と色の点にある。

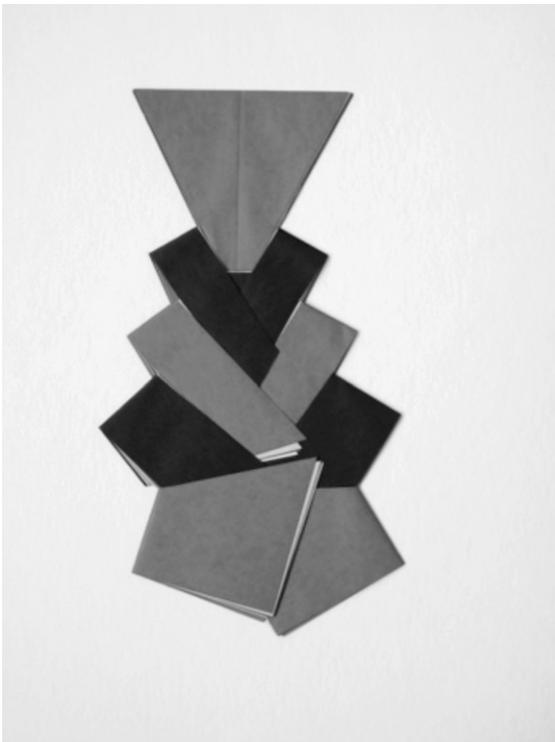
まずひとつめの白の「おへいそく」の場合、これは白の奉書紙一枚で作られている。これに対して五色の「おへいそく」の場合は、「青・黄・赤・白・紫」の五色の色紙、計五枚を重ねて奉製されている。色紙を重ねる順番は上記の通りで、「おへいそく」の表面を最も広く覆う「青」は緑青、また裏面を最も広く覆う「紫」は群青色であるため、青と緑が互い違いに入り込んだ色合いは大変印象的である。



<写真28> 「おへいそく (白)」: 表



<写真29> 「おへいそく (白)」: 裏



<写真30> 「おへいそく (五色)」: 表



<写真31> 「おへいそく (五色)」: 裏

大崎八幡宮（おおさきはちまんぐう）

(1) 鎮座地：宮城県仙台市青葉区八幡4-6-1

(2) 主祭神：応神天皇・仲哀天皇・神功皇后

(3) 例祭日：9月14、15日

(4) 由 緒：

大崎八幡宮がこの地に勧請された経緯には2つの系譜があり、1つは福島伊達時代に始まる成島八幡が米沢へ遷り、更に仙台に遷されたというものである。もう1つは葛西大崎地方で篤く崇敬されていた大崎八幡の系統で、中世以来、水沢―田尻という線で結ばれ、米沢以後の居城である岩出山に仮宮を設けたものである。現在でも、田尻・岩出山の両地に大崎八幡神社が鎮座している。こうした流れを集結させたのが大崎八幡宮であり、仙台開府後直ちに仙台城の乾（北西）にあたる現在の地に御社殿を造営、慶長12年（1607）8月12日に遷座祭が齋行された。伊達家創始以来の伝統と信仰を基盤として、新たに町を開き時代を拓くに当り、城下の人々の平穩を導く「仙台総鎮守」としての役割を加えて創建されたものである。このような仙台勧請までの様子については、5代藩主伊達吉村公の命により制作された『大崎八幡来由記』に絵巻として残されている。仙台の地はもとは「千代」と呼称されていたが、開府に当り「仙台」へと改称されている。慶長13年（1608）頃に政宗公が詠んだ「入そめて 国ゆたかなる みぎりとや 千代とかぎらじ せんだいの松」という和歌は、「千代」と「せんだい」の語が織り込まれ地名の改称を暗示するとともに、新たな町の末永い繁栄への祈念が表現されたと解されている。「仙台」の語は中国唐代の詩人、韓翃の「同題仙遊観」作中の「仙台初見五城楼」、崔曙の「九日登仙台呈劉明府」、陳子昂の「登金華觀」作中の「白玉仙台古」にみられ、各々、この世のものとは思えない理想の場の例え、仙人の住む高台、等と解されていることから、政宗公の壮大な理想が表現されていると推測される。御創建以来、藩政時代を通じ仙台藩62万石の総鎮守として重んじられ、明治以降は大崎八幡神社と称するも、平成9年6月、藩祖公御創建以来の歴史的経緯を考慮し社名を「大崎八幡宮」に復し、現在に至っている。例大祭は9月14、15日両日に行われ、14日は夕刻より長床西側の神楽殿にて能神楽が奉奏される。15日は神幸祭神輿渡御があり、氏子区域内を3行路に分けて年毎に巡幸する。還御の後、馬場にて御創建以来の由緒を持つ流鏑馬神事が齋行される。御鎮座以来、仙台総鎮守として藩祖伊達政宗公はじめ歴代藩侯はもとより、仙台北城下の人々に至るまで広く厄除・除災招福や必勝・安産の神として篤く尊崇され、また仙台における卦体神という十二支の神を信仰する習俗においては乾（戌亥）の守り神とされ、戌歳・亥歳生れの人々からは格別の崇敬を受けている。こうした歴史的背景から、現代においても仙台市民をはじめとする数多くの崇敬者より心のよりどころとして仰がれている。

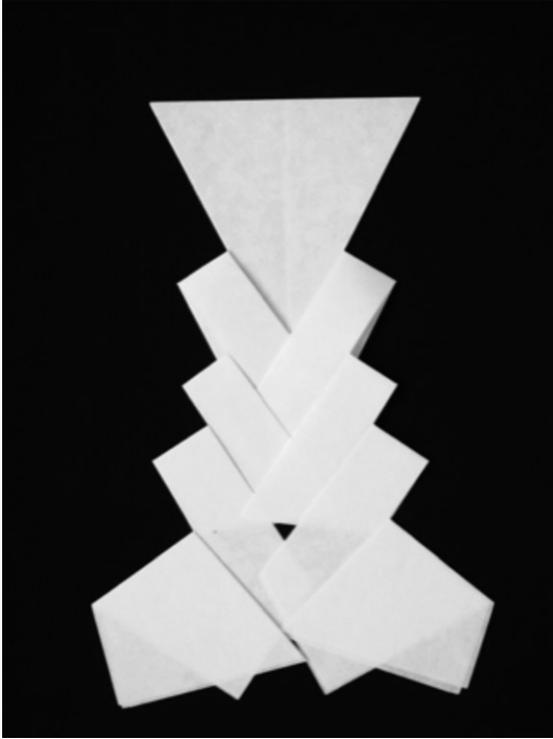
(6) 境内社：諏訪神社・鹿島神社・北辰神社

(7) 社 殿：本殿15坪 幣殿10坪 拝殿21坪（八棟造、こけら葺、桃山式） 社務所57坪

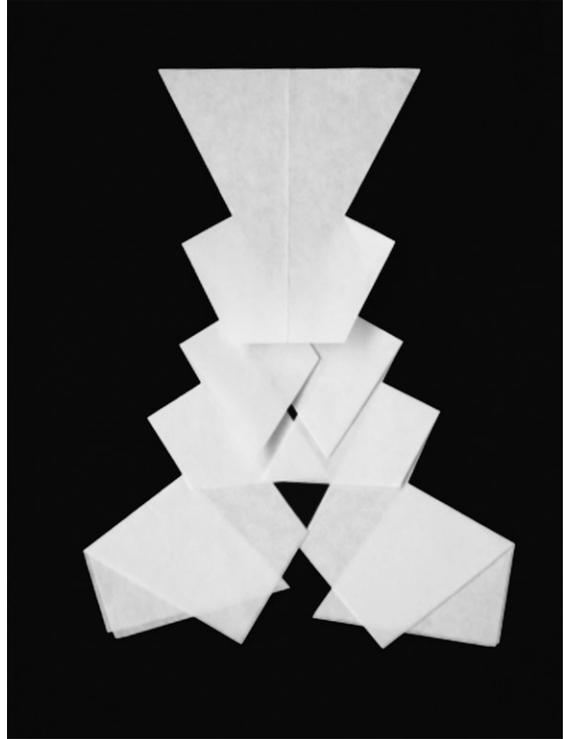
(9) 境内地：12432.78坪

(10) 正月飾り：

郵送調査からは「幣束型」のみが奉製されていることが明らかになった。この正月飾りについては、宮城県神社庁の調査時に奉製されているものが提出されている。呼称としては「へいそく」が用いられ、形態的には基本型で、障子紙で作られている。



<写真32> 「へいそく」(表)



<写真33> 「へいそく」(裏)

仙臺大神宮（せんだいだいじんぐう）

(1) 鎮座地：宮城県仙台市青葉区片平1-3-6

(2) 主祭神：天之御中主神

(3) 例祭日：10月17日

(4) 由 緒：

当大神宮は申すまでもなく伊勢神宮を本宗と仰ぎ分祀された由緒ある神宮である。伊勢神宮は、内外宮を併せ奉り神宮と申し上げ宮内におかれては代々御祖神と仰ぎ奉り我が日本国民敬神崇祖の魂の拠所として諸神社に冠絶する地位にあり全神社の最高最貴の宗祀として遍く人々の信仰を集めて居り其の神宮にては明治維新に際し大教宣布の政府方針に呼応し明治4年、伊勢に神宮教院が開設され、神宮の御神徳の発揚惟神の大道の宣布の運動が行われ全国を三十一教区に区分し、枢要の地に本部を配置した。その第4教区宮城本部設営に当たり伊勢神宮称宜国文学者久米幹文が御分霊を奉持し仙台にきたり、青葉城に対峙し広瀬川を望めるかの有名な寛文事件（伊達騒動）で功勞のありし家老茂庭周防邸であり又現在の仙台地名の起源である千体仏（千体より仙台となる）を信奉しれる伊達政宗公が築城開府の折遷せし片平丁の現在地に御遷座、神宮教奥羽教会所を設立したのに始まる。降りて明治32年神宮奉斎会が新設され、ここに神宮奉斎会宮城本部と改称される。日本全国における神前結婚式の創設は奉斎会からである。即ち宮中婚約令16条を以て時の皇太子（後の大正天皇）は九条道孝公爵御息女節子姫と明治33年5月10日御成婚の儀を執行われたのに始まる。当大神宮も県内の神前結婚式の草分けとして厳肅に多くの夫婦を結びし婚儀の宮である。昭和21年終戦を迎え米国占領軍の所神道指令に依り宮城本部の解散と名称の変更を余儀なくされ同年4月16日宗教法人令に基づき宗教法人仙台大神宮を設立し連綿として伊勢の、神々を御祭神と奉じ幾多の変遷を重ねつつ宮城のお伊勢様として宏大無辺の御神徳、尊崇を集め御光を仰ぎ、地鎮祭、竣工祭等、諸祭典執行の由緒深き神宮として現在に至る。

(6) 境内社：千座霊神社、荒牧神社、豊河神社、白尾神社、猿田彦神社

(7) 社 殿：本殿 神明造3坪、拝殿 神明造50坪

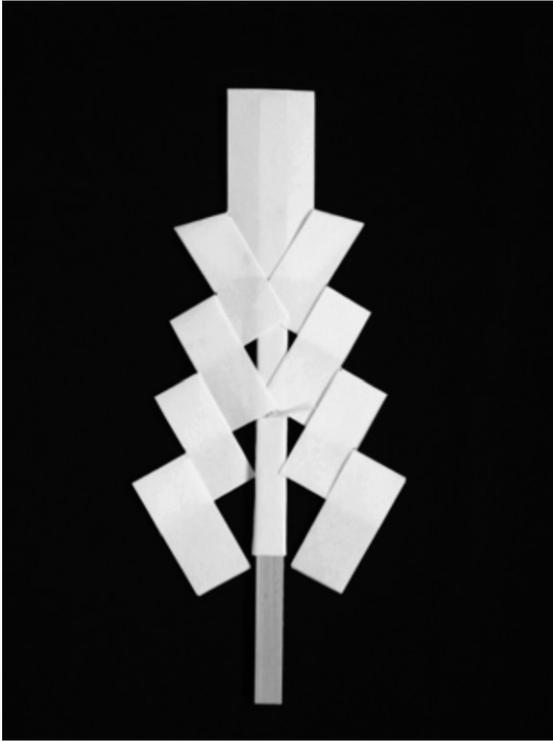
(8) 宝 物：千体仏像、蒙古碑、筆塚、仙台名称沿革碑

(9) 境内地：484坪

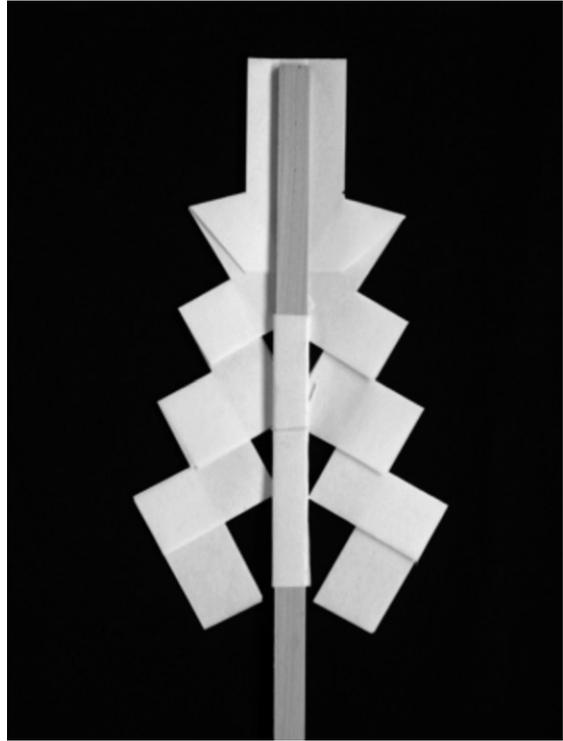
(10) 正月飾り：

今回の郵送調査では、この神社では三種の「正月飾り」のいずれも作成していないことになっているが、宮城県神社庁にはかつて頒布されていた二種の幣束が残されているので以下に挙げることにする。

まずここで奉製されている「幣束」は、白の奉書紙一枚を四つ折りにして作られている。形態としては幣束の基本型であるが、串（227mm）が組み込まれて奉製されているのが特徴的である。

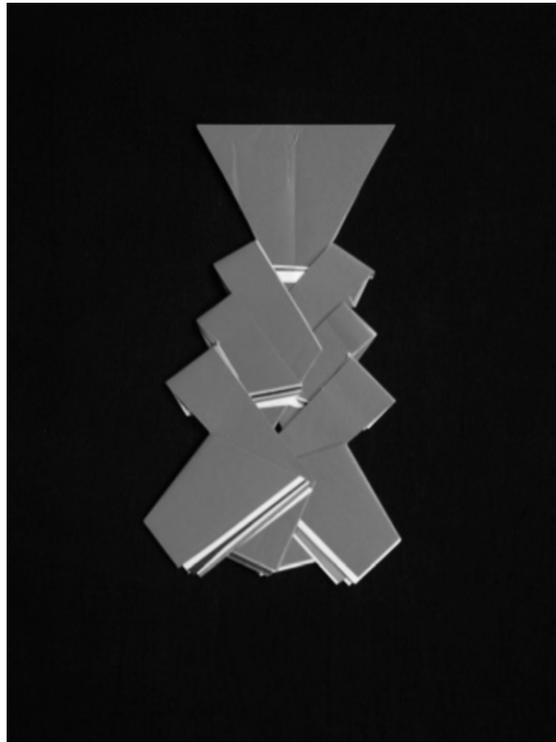


<写真34>「御幣」(表)



<写真35>「御幣」(裏)

「おへいそく」は、五色の色紙を「赤・青・黄・紫・白」の順に重ねて奉製する。天頂の「鏡」の幅は82mm、「サガリ」の最大幅は113mm、長さは192mmであった。



<写真36>五色の「おへいそく」

松尾神社（まつおじんじゃ）

- (1) 鎮座地：宮城県仙台市青葉区宮町4-2-43
- (2) 主祭神：大己貴命・少彦名命・大山咋命・中津島姫命
- (3) 例祭日：5月19日

(4) 由 緒：

松尾神社は48号線、北4番丁大通り宮町4丁目に鎮座する。社伝によれば、延享2年（1745）乙丑3月19日藩主伊達宗村公の命により藩臣庄司伝七郎が大己貴命少彦名命の二柱を祀り稲荷神社と稱した。安永年間（1770）頃から一時廃れていたが、天保12年（1841）辛丑3月19日に、伊達家が京都松尾大社の大山咋命、中津島姫命を勧請して松尾神社と改稱した。戦前は旧青葉城より移遷した奥宮を首め社殿、拝殿、長床、神楽舎、神輿舎、神饌所、末社、琴平社等結構荘麗を極め、祭事は5月18日に神社から河原町まで神輿渡御を行い、19日に祭典を行って居たが昭和20年の戦災で全焼した。昭和31年に県内外の酒造家、杜氏、地方の氏子宗教者の寄進により完全防火の荘厳な社殿を復興し、酒造神楽祖神として県内外に知られる由緒ある神社である。平成7年社殿を修復し庄司家が歴代宮司奉仕して現代に至る。

(6) 境内社：仙古城鎮座松尾神社、稲荷神社

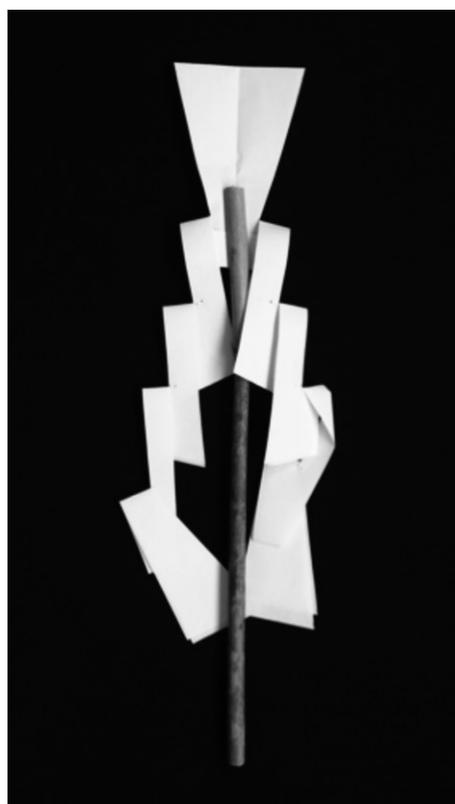
(7) 社 殿：本殿4坪、幣殿2坪、拝殿30坪

(10) 正月飾り：

神社では年の瀬になると「正月飾り」を頒布するが、ここでは正月用の飾りの入った袋の中に「御札」「神宮大麻」「御神像：大国主神・宇迦御魂神・大年神・事代主神」「奥津彦神奥津姫」「宮城県神社庁平成25年第62回神宮式年遷宮の案内チラシ」「拝み方」が納められてセットになっている。これに併せて「幣束」や「タマガミ」（大・小）を必要な数だけ購入する人々が多いようである。

この神社の神職は、兼務社の他の神社の氏子対象に、「正月飾り」として同じ形態の「幣束」の頒布を行っている。兼務社は以下の七社である。

堤町天神社、八雲神社、神明社、磐上神社、瀧澤神社、羽黒神社、朝日神社



<写真37>松尾神社で頒布する幣束

愛宕神社（あたごじんじゃ）

(1) 鎮座地：宮城県仙台市太白区向山4-17-1

(2) 主祭神：軻遇土神

(3) 例祭日：7月23日宵宮・7月24日例祭、旧正月24日鎮火祭

(4) 由 緒：

当神社は仙台駅より南へ約3.5軒、仙台城（青葉城）址より南東へ約2.5軒に位置し、東に太平洋、西に蔵王連峰、南に大年寺山（伊達家4代以降歴代靈廟）、北に栗駒山、眼下は清い流れの広瀬川を望み老杉茂る景勝の地、愛宕山に主祭神軻遇土神のほか十二神をお祀り申し上げます。現在の社殿は慶長8年、藩祖政宗公千代城に入城と同時に御造営になり御遷座申し上げております。当神社は古く羽州米澤に御鎮座になられ、天正19年（1591）藩祖伊達氏十七世政宗公が、米澤より陸奥國玉造郡岩出山に移るに際して、社も岩出山に御遷座、慶長5年（1600）千代城を青葉山に築城、名を仙臺（台）と改められ、慶長8年（1603）政宗公入府に合わせ社も一時国分荒牧村（現元寺小路）に仮遷座を行い、同年仙台城や城下を一望できるこの愛宕山（以前天狗山とも称す）に御社殿を御造営になられ、御遷座申し上げ、誓願寺を別当寺とし、合わせて五貫七百二十文を寄進されております。以後藩内の安全を祈願するなど、とくに火防の祭は城下挙げての盛大な祭りが行なわれたといわれます。この様に歴史を見てまいりますと、政宗公が知行地を移す毎に当社をお祀りしていたことがわかります。政宗公の意志を継いだ歴代の藩主特に二代藩主忠宗公慶安3年（1650）、4代藩主綱村公元禄7年（1694）に改修、修復工事を行っております。その後は歴代藩主の小規模ながら修理等が繰返され、ことに5代藩主吉村公は祭田三十石を献納するなど、この時代には仙台の代表的な神社となっております。皇室の御安泰、国家鎮護、藩内の安全を祈る歴代藩主の尊崇殊のほか篤いものがありました。ことに股肱白石城主片倉小十郎景綱の長子重綱は、家臣の兜の前立にまで「愛宕大権現」の護符を差し挟み、大坂の役の戦陣に立ち勇猛であったと伝えられております。天明元年（1781）菊池岡左衛門廣隆は石華表（鳥居）壺基を、若生儀兵衛は石段を奉納、大正12年吉田つぎ子刀自は嗣子と共に石段の補修と拝殿までの敷石二百余間（凡三六四米）を奉納するなど藩政時代から現代に至るまで、藩主・家臣・庶民の信仰頗る厚いものがあります。当神社例祭には仙台市内全域の神輿渡御が市民挙って盛大に行われ、取り分け終戦直後、戦火により廃墟となった市中の復興と、市民の心の奮起を願い、戦前にも勝る神輿の渡御が3ヵ年連続にして斎行され、杜の都仙台市の復興と発展（現青葉まつり）の基になったことは特筆されるものであります。又、御創建御遷座400年の節年を平成15年に迎えるに先達平成12年より13年にかけて仙台市指定有形文化財の本殿を改修工事し、元の御本殿に復現した。末社稲荷神社を奉斎します。

(5) 合祀社：神明社（越路々地町）、信夫神社（三百人町）、日吉神社（猿曳町）、熊野神社（越路）、金刀比羅神社（東十番丁）

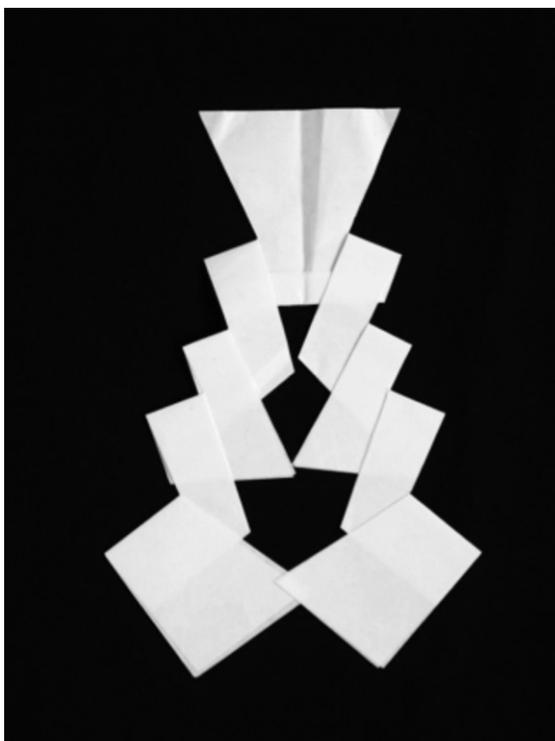
(6) 境内社：稲荷神社

(7) 社 殿：本殿4.5坪、幣殿30坪、拝殿28坪、神饌所1.5坪、隨身門8坪、社務所24坪

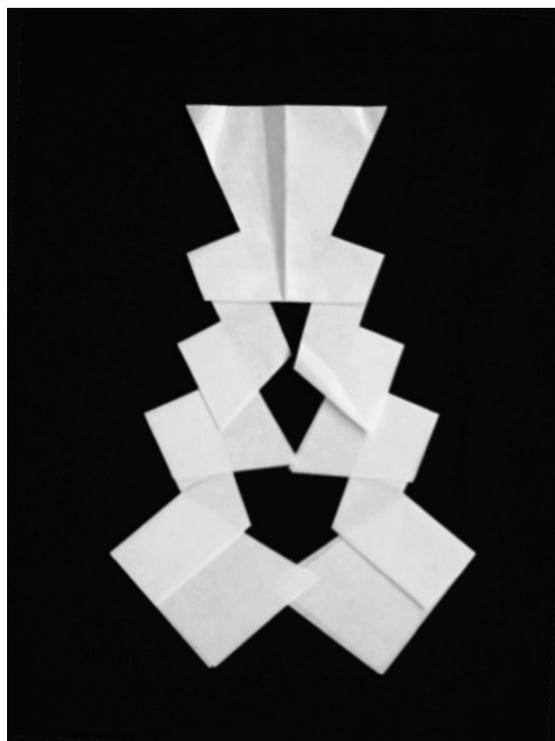
(9) 境内地：9373.25坪

(10) 正月飾り：

この神社では、現在「幣束形式」を奉製しているが、「紙注連形式」と「切り透かし形式」も以前作っていたようである。



<写真38> 「おへいそく」(表)



<写真39> 「おへいそく」(裏)

この「おへいそく」は以下の二社でも頒布している。

亀岡八幡宮：仙台市青葉区川内字亀岡町62

姥 神 社：仙台市宮城野区宮千代1-4-5

また、宮城県仙台市青葉区霊屋下21-16に鎮座している穴蔵神社（主祭神：宇迦之御魂神）に関しては、『宮城県神社きりこ写真集』には、当時の穴蔵神社宮司、久光右一氏により奉製された「正月飾り」の写真が掲載されており、「切り透かし形式」の六枚飾り、四枚飾りがそれぞれ一種、二枚飾りが二種確認される。

諏訪神社（すわじんじゃ）

(1) 鎮座地：宮城県仙台市太白区郡山5-13-8

(2) 主祭神：建御名方神

(3) 例祭日：毎年5月5日

(4) 由 緒：

第70代後冷泉天皇の天喜4年（1056年）陸奥守鎮府將軍源頼義公が安倍頼時を征し、地方人民風俗を見聞し、人民を治める為、衣食住の守護の神を信仰せしむと其の神恩に報じ奉る稲荷の大神と祀るという。当時延慶3年（1309年、鎌倉時代）旧境内社殿後方に「諏訪の碑」と称する碑あり。その後第103代後土御門天皇（1469～1486年）の文明年間に名取郡郡山村北目城主粟野助五郎大膳亮忠重の子右京之助、遠江守国定祀堂改造す。又、永禄年間第106代正親天皇（1554～1569年）北目城主粟野多門国重社殿を再建したと伝える。別当寺を光越山といったが明治のはじめに廃す。明治初年籠ノ瀬の八雲神社（祭神素盞鳴命）を合併する。



明治5年8月（1872年）村社に列し、同40年3月幣帛供進社に指定された。同45年5月2日砂押村社の深山神社（祭神大山祇神）合併する。大正11年（1922年）古来の境内地は長町駅操車場に指定せられ買収され大正13年（1924年）10月芳賀家の厚意により現在地に移築遷座す。移築に当り、芳賀家先代の遺志を継ぎ社殿屋根を銅板葺き改修と一人寄進す。以後80年という永い年月氏子、崇敬者の“幸”と“地域の発展”の為、御神威を現し常に厚い信仰で祀られて参りましたが、社殿屋根の雨漏れ、土台の沈下、老朽化が進み、地震対策をも考慮し、多くの方々より奉賛を頂き平成15年1月より実行委員会を立ち上げ、社殿改築し平成16年（2004年）12月18日正遷座を斎行す。

(5) 境内社：稲荷神社

(7) 社 殿：本殿：神明造2坪、幣殿4坪、拝殿6坪、神楽殿7坪、社務所18坪。

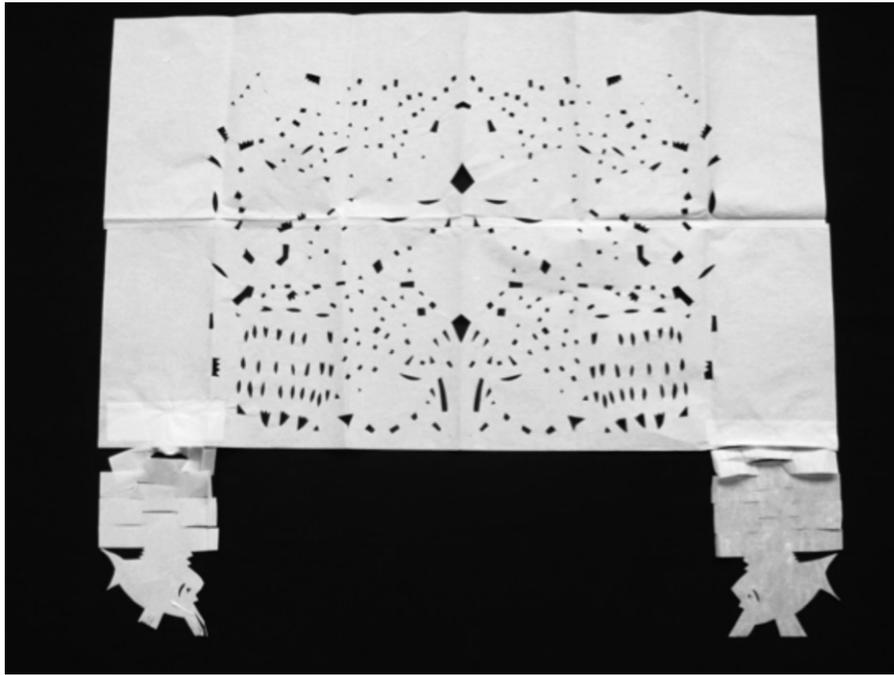
(9) 境内地：907坪

(10) 正月飾り：

現在諏訪神社で奉製している「正月飾り」には「切り透かし形式」のものと「幣束形式」のものがある。とはいえこの「切り透かし形式」には、「紙注連形式」の鯛が下部についており、完全な「切り透かし形式」とは言い難いところがある。

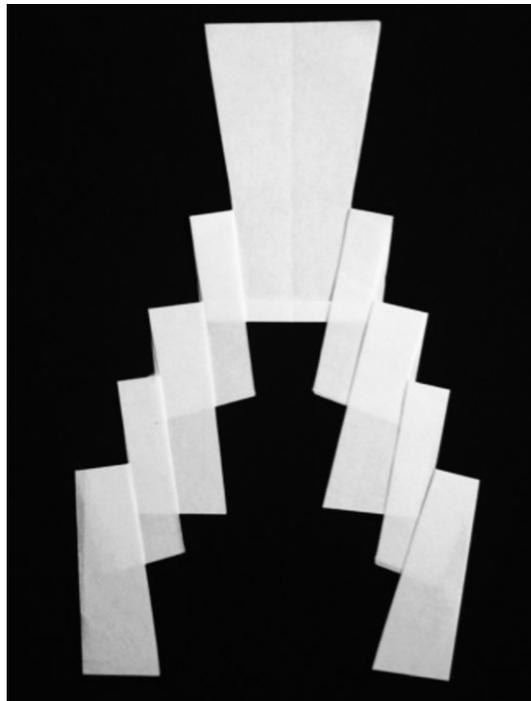
ここで頒布している「切り透かし形式」には、大小の別から二種ある。諏訪神社の神職が兼務している八坂神社（仙台市太白区富田）でも、同じ「切り透かし形式」のお飾りを頒布しているが、諏訪神社以上に多く求められるという。このような傾向性については、「正月飾り」の購買者が農家中心であることが指摘され、農家の多い富田方面が郡山地区よりも多く売れることの根拠と考えられている。

る。図柄については、「鯛」「巾着」「俵」の吉祥柄が配されている。

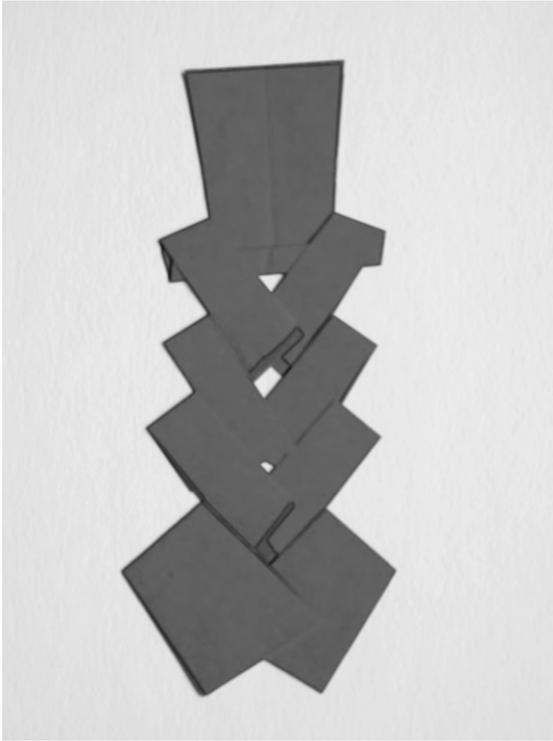


<写真40>「切り透かし形式」のお飾り

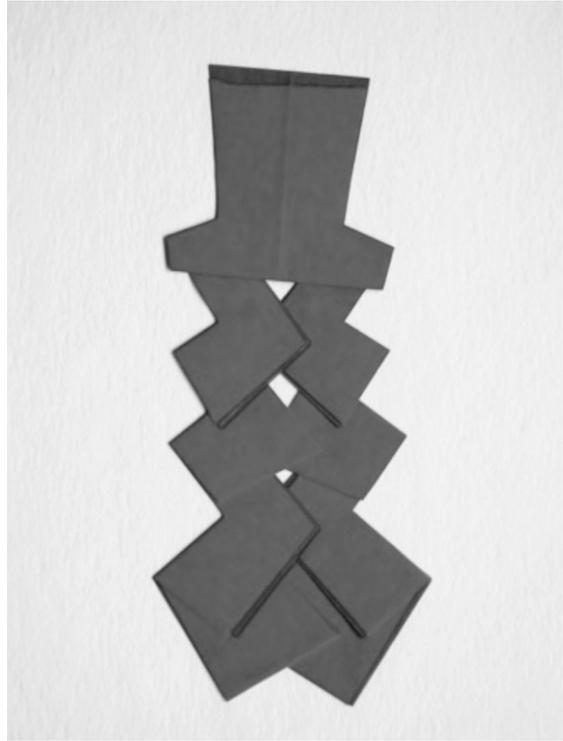
「幣束形式」のお飾りは、白のものと赤と青の二色のものとの二種見られる。



<写真41>白の「幣束」



<写真42>諏訪神社で頒布する幣束(表)



<写真43>諏訪神社で頒布する幣束(裏)

諏訪神社で奉製している「幣束形式」のお飾りは、神職が兼務している以下の神社においても頒布されている。

- 八坂神社 : 仙台市太白区富田字上野中4
- 八幡神社 : 仙台市太白区鉤取1-10-35
- 羽黒神社 : 仙台市太白区山田羽黒台1-21
- 舞臺八幡神社 : 仙台市太白区长町4-2-12
- 白山神社 : 仙台市若林区木ノ下3-9-1

同じく「切り透かし形式」のお飾りは、八坂神社でも頒布されている他、羽黒神社の氏子の中の数戸に対して頒布されている。

青麻神社（あおそじんじゃ）

(1) 鎮座地：宮城県仙台市宮城野区岩切字青麻沢32

(2) 主祭神：天之御中主神・天照大御神・月読神・常陸坊海存翁

(3) 例祭日：5月1日～3日

(4) 由 緒：

元禄11年（西暦1698年）、山火事により古記録等を焼失せるにより不詳なれども、社伝によれば、第55代文徳天皇の御世の仁寿2年（西暦852年）、現社家の遠祖穂積保昌が山城国（現京都府）よりこの地に来たり、里人に麻の栽培を教え、且、一族の尊崇せる日月星の三光神即ち天照大御神、天之御中主神、月読神の三神を清水湧く山峡の岩窟中に奉祀せしが本社の創始と伝える。社名・地名も麻の栽培より起り、神紋も又麻の葉を用いる。仙台藩封内風土記（西暦1772年成立）にも、「岩切邑 本邑山中青麻と号する地あり 往古この地麻を植う 故に以て地名と為す 岩窟あり高さ一丈余・・・」と記している。天和2年（西暦1682年）源義経家臣なりし常陸坊海尊（清悦仙人とも称する）下野国（栃木県）出流山大日窟よりこの地に至り靈験を顕し給いしにより併祀する。古来より中風病退除（常陸坊海尊の靈験による）・海上安全（穂積一族が水運に携わっていたことに因む）等の特殊信仰があり、「三度詣でれば生涯中風の難よりのがれる」と伝えられ、各地青麻神社の総本社である。古くは、青麻岩戸三光宮、青麻権現社、嵯峨神社などとも称し、中世から近世の古図や文献にも記載が見える。安永5年（西暦1776年）、現社家を遡る十代祖鈴木儀衛門は神祇伯白川家より神主許状と對馬の称号を賜る。その子対馬保義に至り、彌々青麻神社の奉斎と社地の整備さらに神徳の普及と講中の組織化と拡充をすすめ、傍ら、社入を以て青麻・入菅谷付近の山地に40万本余の植樹造林事業を起こして国用を助け、その功労は寛政13年（西暦1801年）・文化5年（西暦1808年）の二度にわたり仙台藩より褒賞に與っている。延享3年（西暦1746年）伊達宗村公を始め、宝暦8年（西暦1758年）重村公、文政元年（西暦1818年）斉村公、慶応3年（西暦1867年）慶邦公等藩主の御崇敬と御参詣もあり、崇敬者は東北全域関東信越さらには北九州にも及んでおり、今も各地に青麻信仰の石碑や御分社を見ることが出来る。享和年間に社殿を再興し、明治8年5月郷社に列格。大正5年より、大正御大典記念事業として社殿の大増改築を行い、神域荘厳を加える。昭和43年不慮の火災に遭い、社殿・随神門・神楽殿を失うも、同45年に現社殿等を完成する。昭和58年4月27日、泉市（現仙台市泉区）山林より出火の山林火災は、折からの強風に煽られ3300ヘクタールの山林を焼失する未曾有の災害にも、神威の御加護により社殿及び神楽殿は類焼をまぬがれた。現社務所は昭和59年4月、現随神門は平成12年9月の再建になる。昭和42年、県の明治百年記念事業として、付近の丘陵地一帯が「宮城県民の森」に指定整備され、大都市近郊にありながら人々の憩いの森として保護育成されるに至るは、真に御神縁の発露と畏むものである。

(6) 境内社：山神社

(7) 社 殿：本殿2.25坪、幣殿10.50坪、拝殿24坪、社務所78坪

(8) 宝 物：鉄鏡一面（御鎮座当時の御神体と思われる。三光窟神座より出土）

兵法書（常陸坊海尊の遺物という。）
隨身像二体（藤原秀衡時代のものと伝える）

(9) 境内地：500.05坪

(10) 正月飾り：

現在は「幣束形式」を出しているのみであるが、以前までは「紙注連形式」や「切り透かし形式」の「正月飾り」も頒布していた。

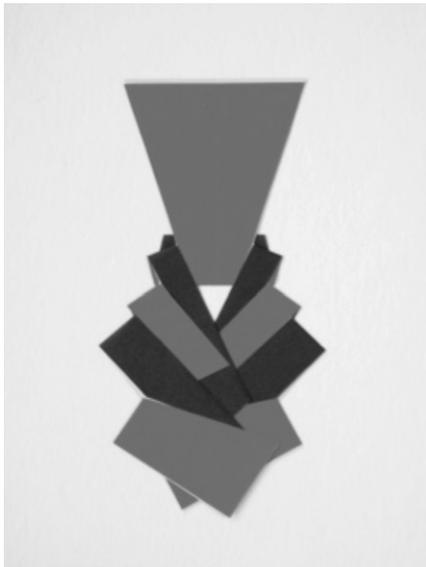
①幣束形式

「幣束」と呼ばれるのは、白色の西洋紙を二つ折りにして奉製してある。

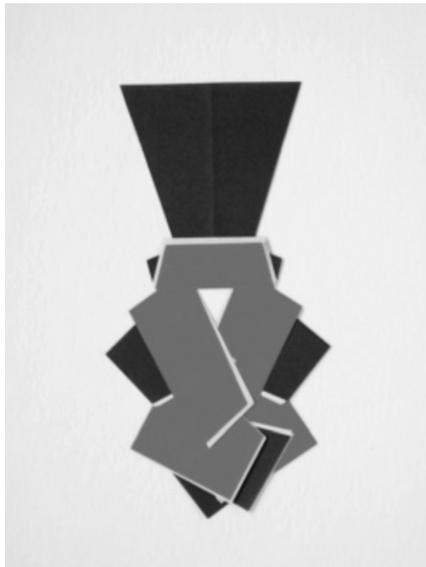


<写真44>青麻神社の「幣束」

「御幣」と呼ばれるのは三色の色紙、「赤・黄・紫」を重ね合わせて奉製される。宮城県神社庁に保存されている「御幣」は、先代の宮司が奉製したものであるが、「紫」の色は「群青色」に近い。



<写真45>「御幣」(表)



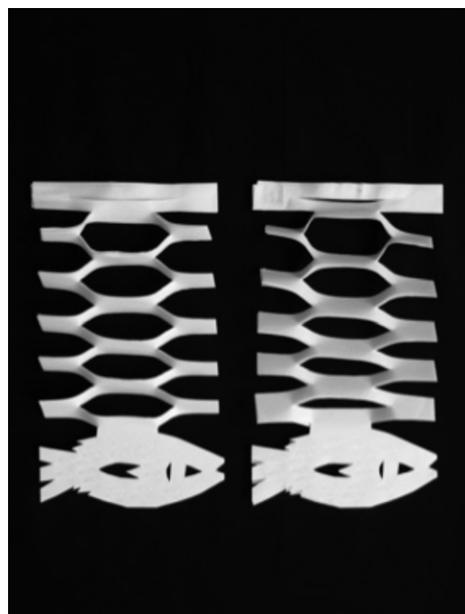
<写真46>「御幣」(裏)

②紙注連形式

青麻神社で以前まで奉製されていた紙注連形式の「正月飾り」は、白の障子紙を四つ折りにして奉製されていた。



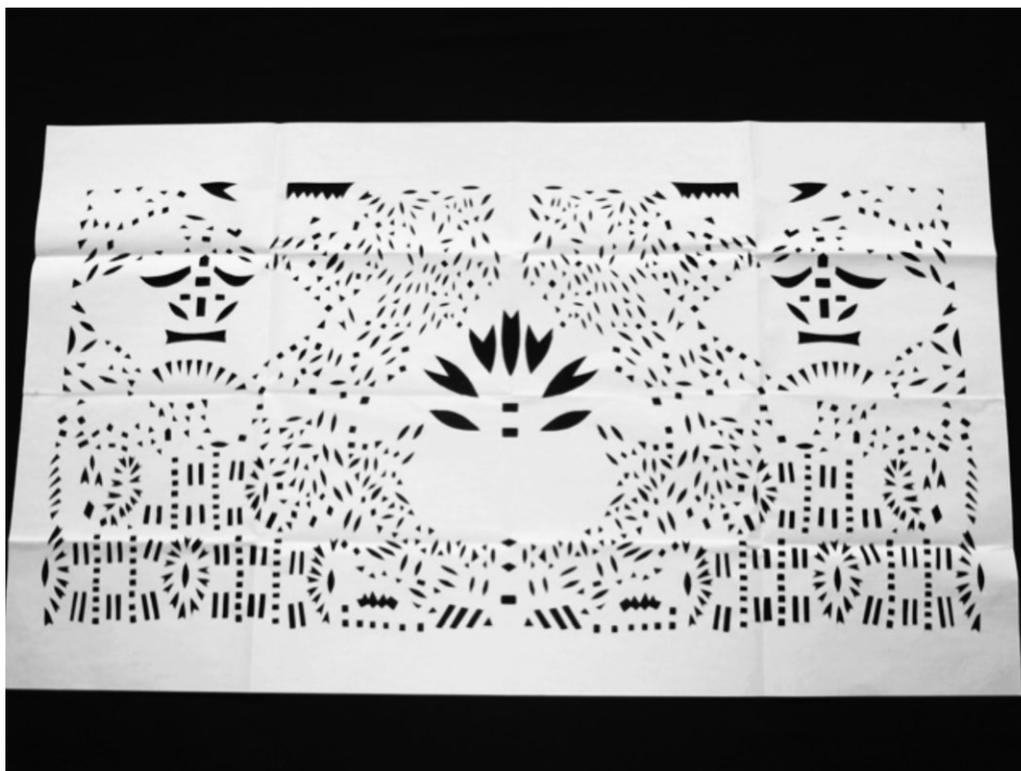
<写真47>紙注連形式（開く前）



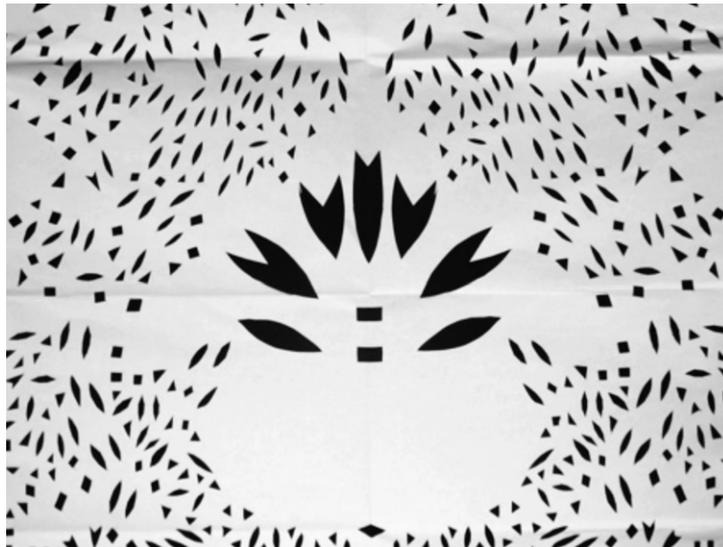
<写真48>紙注連形式（開いたところ）

③切り透かし形式

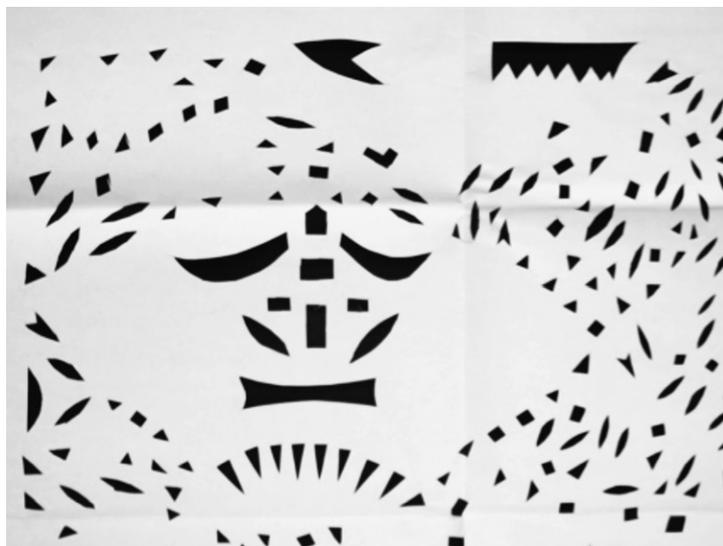
青麻神社では、以前までは白色の美濃紙を用いた「切り透かし形式」の「正月飾り」が奉製されていた。その全体像は以下で、その中にはさまざまな吉祥柄が切り込まれている。



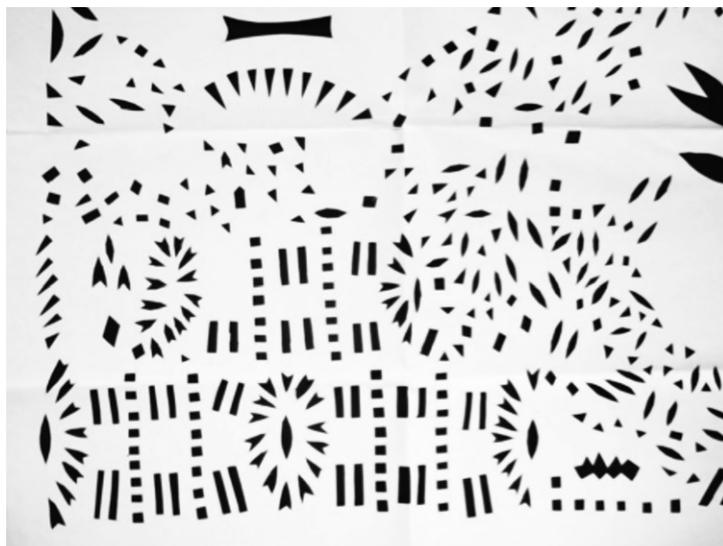
<写真49>青麻神社で奉製していた「切り透かし形式」のお飾り



<写真50>「巾着」(部分)



<写真51>「末広」の中に書かれた「金」(左上部)



<写真52>吉祥柄の「倭」「笹」「花吹雪」(左下部)

多賀神社（たがじんじゃ）

(1) 鎮座地：宮城県仙台市太白区富沢3-15-1

(2) 主祭神：伊弉諾尊

(3) 例祭日：5月1日

(4) 由緒：

大鷹宮とも言い、延喜式内当郡二座の一多加神社であると説く。(特選神名牒)。社伝によれば景行天皇40年日本武尊東征の砌りの創祀にして、雄略天皇2年圭田58束を奉り神礼祭式を行うたというが確証はない。伊達政宗仙台に居城を構えてから代々の藩主の尊崇篤く、重村は寛延年間社殿修復の事あり、又角田城主石川宗光は「多賀神社伊弉諾尊」と書いて献じ仙台藩の国学者安田光則は由緒記を石に刻み境内に建碑した。明治5年4月村社に列し、同42年大野田の春日神社及び宝龍神社を合祀。大正8年8月幣帛供進社に指定された。



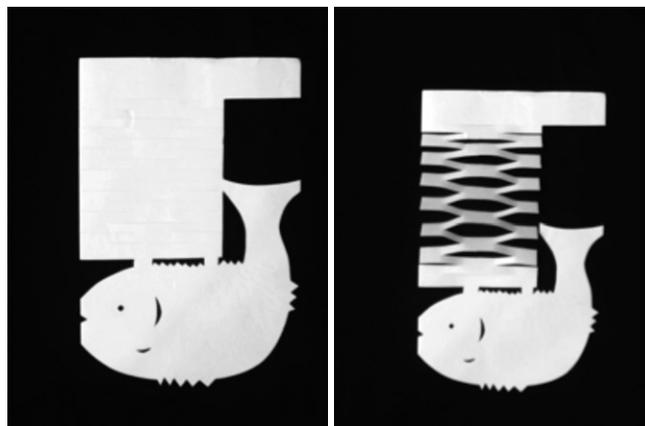
<写真53>多賀神社

(7) 社殿：本殿3.5坪、幣殿3坪、拝殿12坪、社務所63坪

(9) 境内地：700坪

(10) 正月飾り：

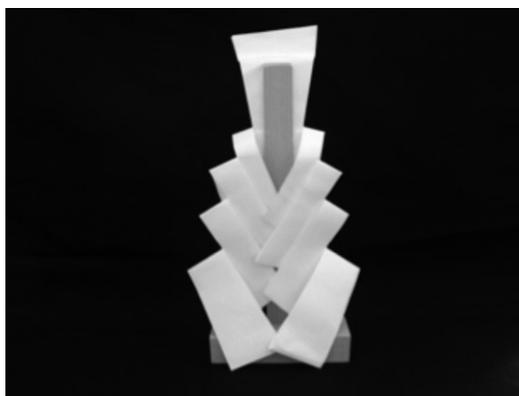
この神社では、「紙注連形式」「切り透かし形式」「幣束形式」のいずれも頒布している。以下には、「紙注連形式」と「幣束形式」のものを示す。



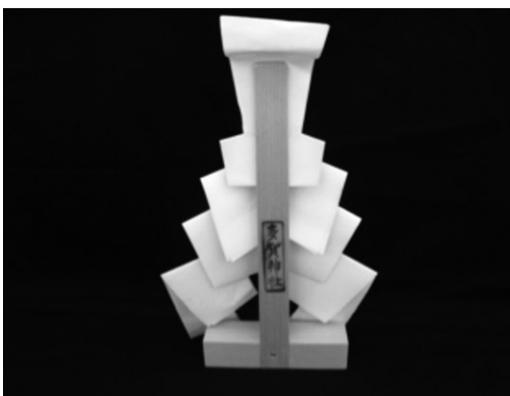
<写真54>「紙注連形式」お飾り：開く前（319mm×212mm）と後



<写真55>幣束



<写真56>幣束 (前から: 230mm×180mm)



<写真57>幣束 (後から)

中田神社（なかだじんじゃ）

(1) 鎮座地：宮城県仙台市太白区西中田1-20-12

(2) 主祭神：伊賀津智命

(3) 例祭日：4月29日

(4) 由 緒：

高倉天皇の承安元年（1171）気候不順にして五穀が稔らず諸人たちが困窮するを陸奥守藤原秀衡大い憂い、山城の国なる賀茂大神の御分霊を名取川の河上清水峠に勧請して鎮め祀り雷神社と称し五穀豊穡を祈願、靈験あらたかに豊作が続くが、その後、文治4年（1188）の夏、大洪水によりて社は名取川を流れ下り、柳生の里に着き給いしを、里人これより産土神と崇め奉った。その後、明治5年5月村社に列せられ、同40年3月幣帛供進社の指定を受けたが、明治22年4月の町村制発布により地区4ヶ村、旧前田村、旧柳生村、旧四郎丸村、旧袋原村が合併し中田村となったのにもない、旧各村に各々村社として鎮座していた神社は維持困難となり合祀することとなり、明治42年3月宮城県に神社合祀の申請認可を得て、旧柳生村村社 雷神社に、旧前田村村社 神明社・旧四郎丸村村社 神明社・旧袋原村村社 八坂神社を、更に旧前田村の無格社 老女宮・熊野神社を合祀し、中田村神社と称号して鎮座したが、柳生は村の西端に位置し、東にある袋原・四郎丸の村民氏子の参拝に不便をきたす事から、再度宮城県に神社遷座の申請認可を得て、明治43年5月8日現在地に遷座し当地区産土神として鎮座したものである。その後、地区の発展等にもない又当社の歴史的背景をも鑑み、平成9年3月に神社本庁並びに宮城県の認証を得て「中田神社」と社号を変更し今日に至っている。

(7) 社 殿：本殿1坪、幣殿4.5坪、拝殿7.5坪、神饌所6坪、社務所18坪

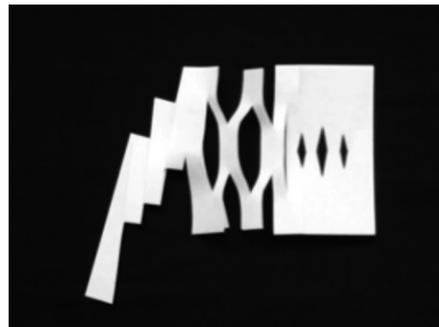
(9) 境内地：1228坪

(10) 正月飾り：

この神社では、「幣束形式」と「切り透かし形式」の「正月飾り」を頒布している。

①「幣束形式」

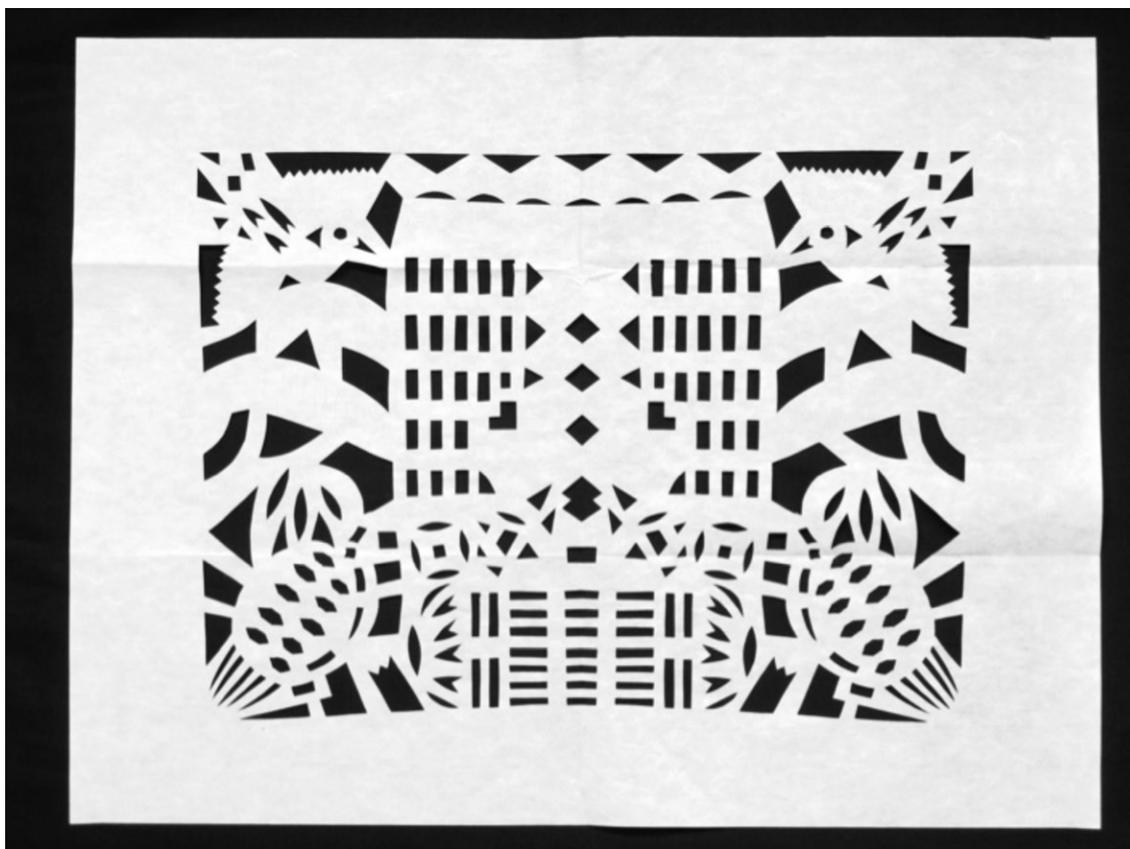
この幣束は、白の障子紙で奉製されている変化型の幣束に類型できる形態である。幣束の「鏡」の部分は斜線となり、「サガリ剣」をもった形を取っている。



<写真58>幣束

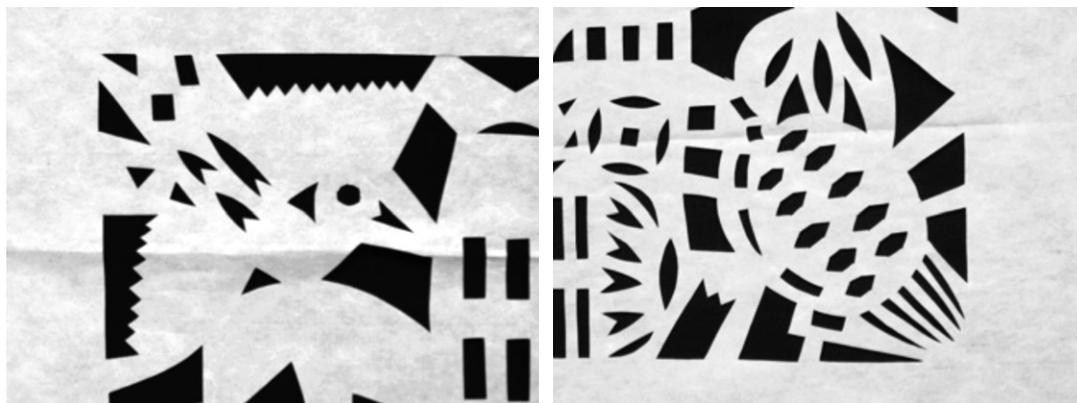
「切り透かし形式」のものには四種あり、それぞれメリハリのきいた綺麗な吉祥柄が切り刻まれている。

②「切り透かし形式」(中田a)

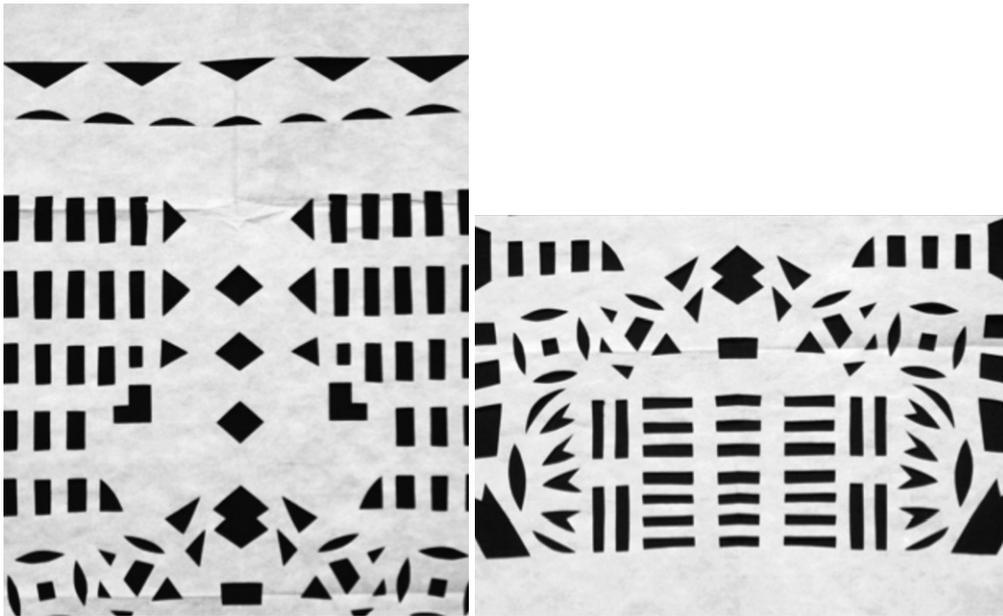


<写真59> 「切り透かし形式」(中田a) の全景

このお飾りは、白い美濃紙を一枚使用して奉製したもので、いくつかの吉祥柄が切り込まれている。例えば「鶴」(左右の上段)と「亀」(左右の下段)や、「幣束」「俵」そして「松竹梅」の絵柄が刻まれているのを見ることができる。



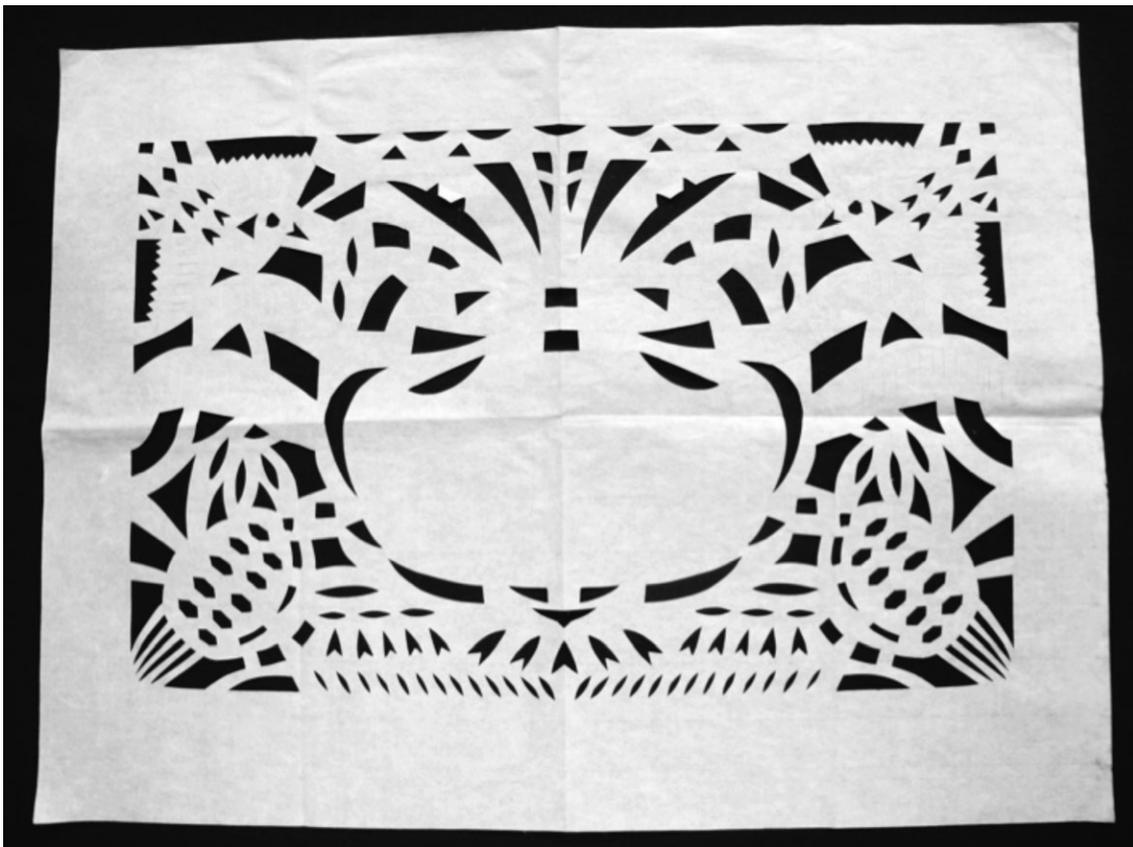
<写真60> 「切り透かし形式」(中田a) の部分 左は「鶴」(左上段)、右は「亀」(右下段)



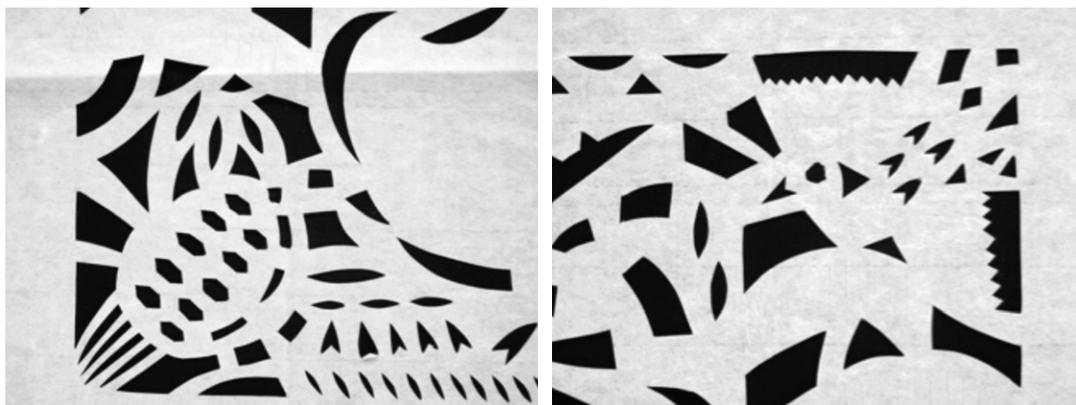
<写真61> 「切り透かし形式」(中田a)の部分 左:「御幣」(中央部) 右:「俵」(中央下部)

③ 「切り透かし形式」(中田b)

このお飾りは、白い美濃紙一枚に、吉祥柄である「燕」「鶴」「亀」などが切り込まれたものである。



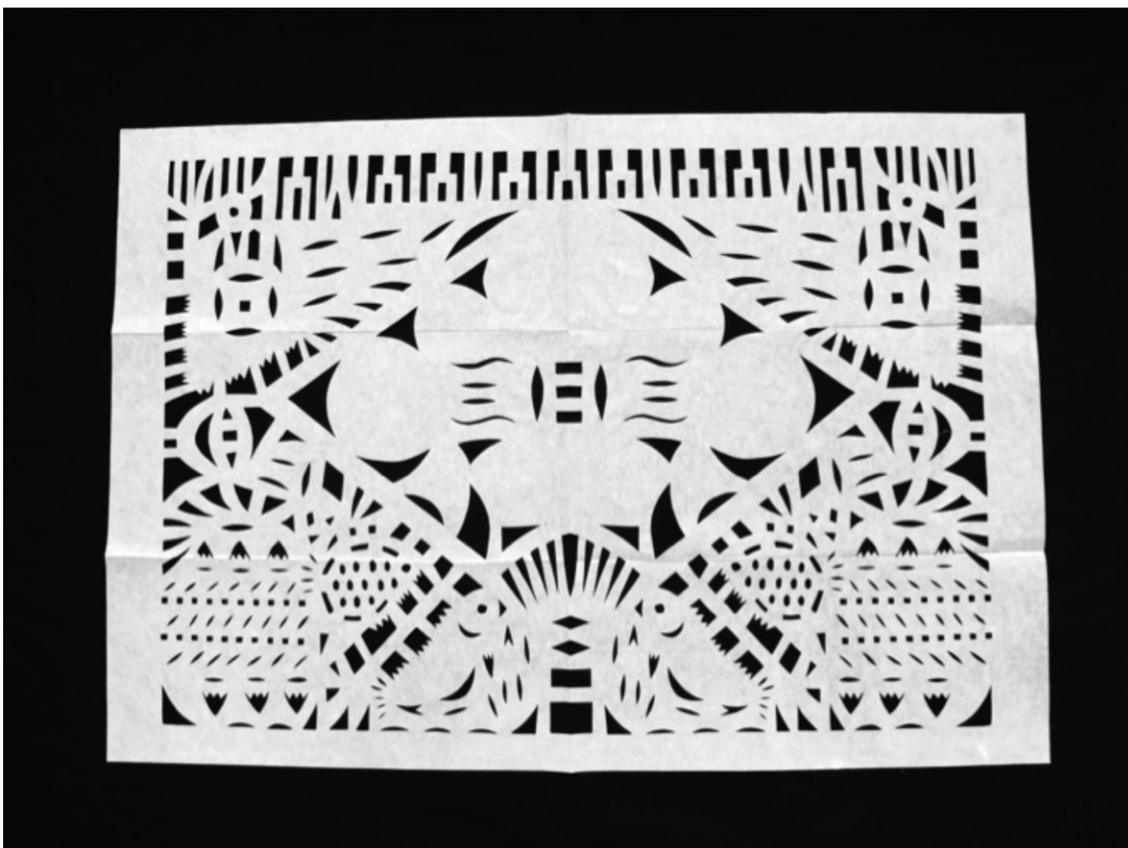
<写真62> 「切り透かし形式」(中田b)の全景 (593mm×449mm)



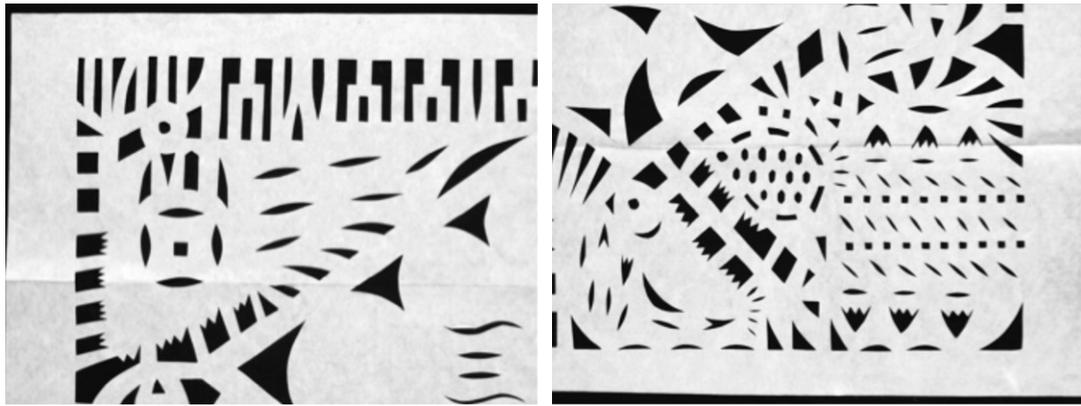
<写真63> 「切り透かし形式」(中田b) 左:「亀」(左下部) 右:「鶴」(右上部)

④ 「切り透かし形式」(中田c)

このお飾りもまた、白色の美濃紙一枚でできているが、そのデザインはまた異なっている。この中に含まれる吉祥柄には、「銭」「末広」「魚」「亀」「鶴」「巾着」「小槌」「紙垂」といったものが確認される。



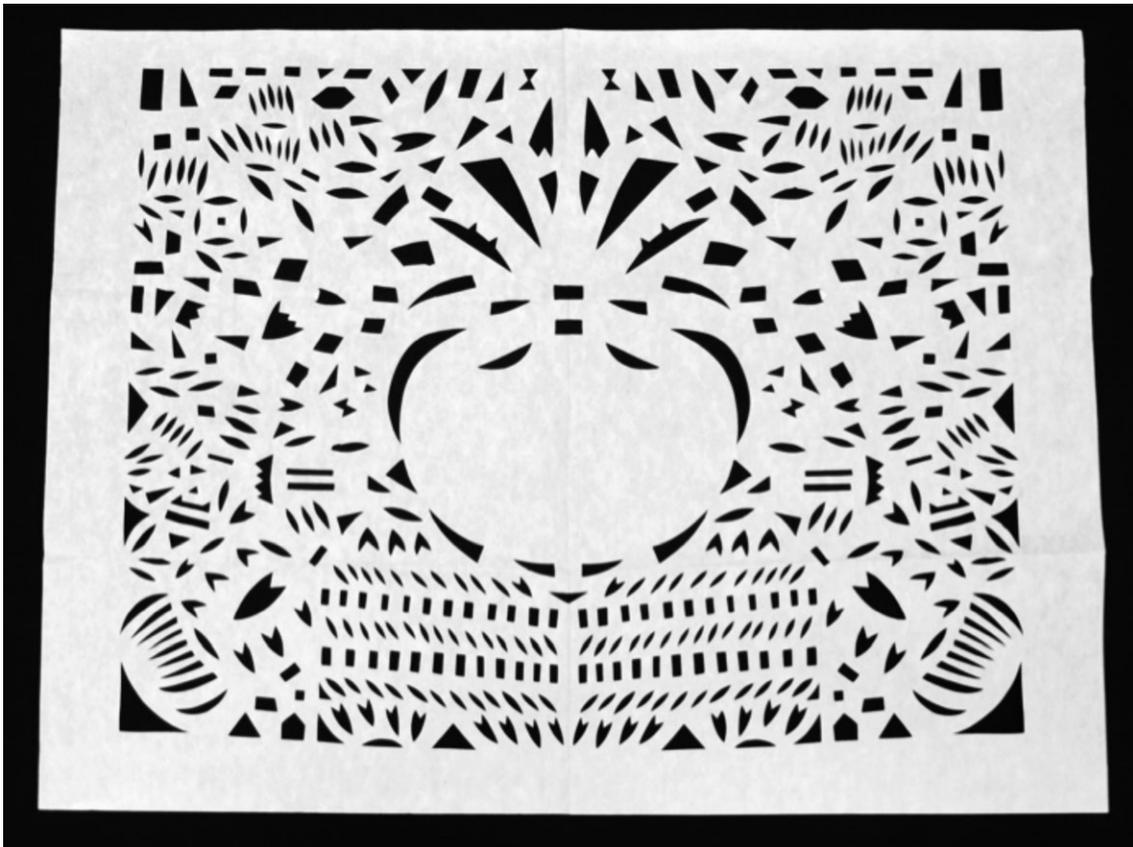
<写真64> 「切り透かし形式」(中田c) の全体像



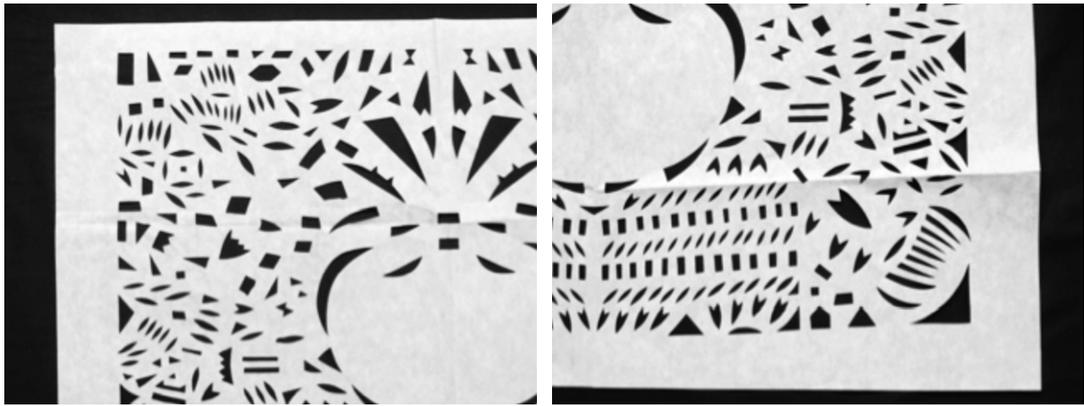
<写真65> 「銭」や「紙垂」（左上部）と「亀」や「魚」（右下部）

⑤ 「切り透かし形式」（中田d）

「御飾り」と呼ばれているこのお飾りは、全紙の倍の大きさの白色の美濃紙一枚でできている。そこに描かれたデザインは、「巾着」「俵」「銭」「燕」などの吉祥柄である。

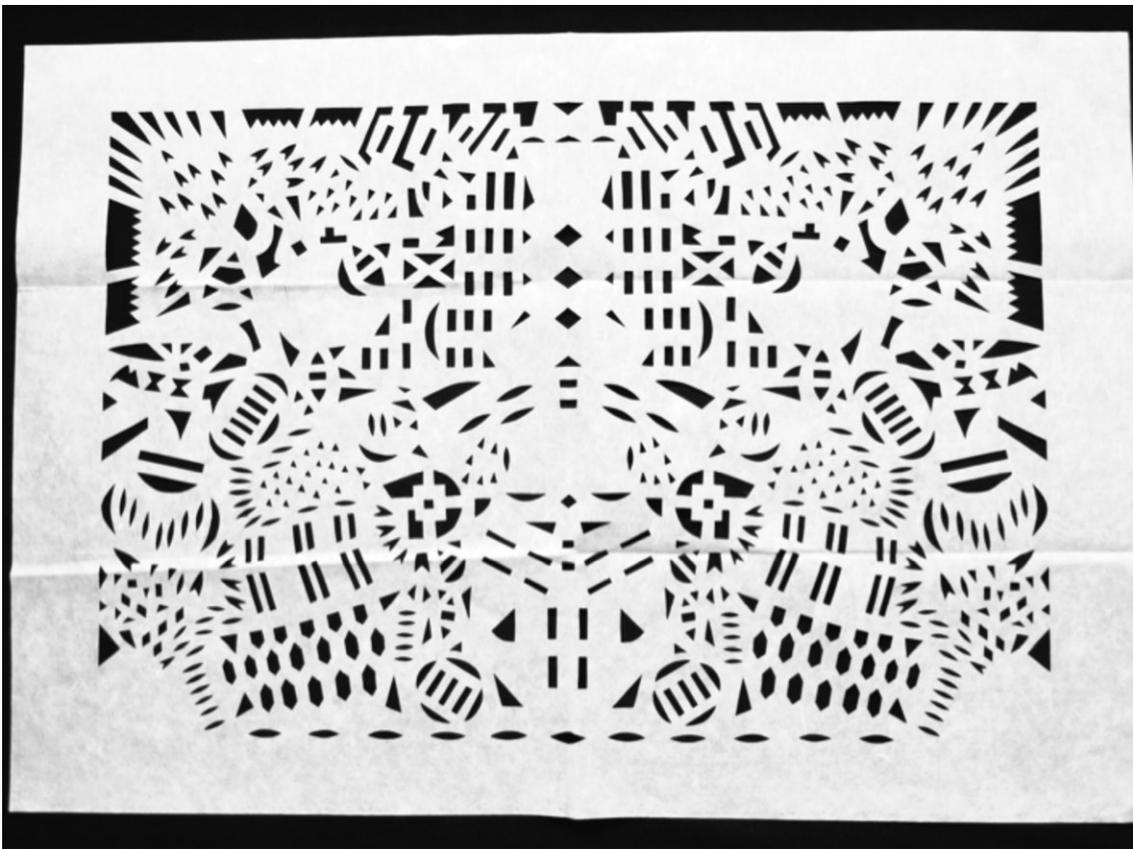


<写真66> 「切り透かし形式」（中田d）の全景



<写真67> 「巾着」「銭」「笹」「桜吹雪」俵」「燕」などの吉祥柄（左上部、右下部）

⑥ 「切り透かし形式」（中田e）



<写真68> 「切り透かし形式」（中田e）の全景

旅立稲荷神社（たびだちいなりじんじゃ）

(1) 鎮座地：宮城県仙台市若林区若林2-1-3

(2) 主祭神：保食神

(3) 例祭日：4月29日

(4) 由 緒：

この神社は、白河天皇の永保年間（1081～1083）の創祀といわれ、山城国伏見稲荷神社の御分霊を勧請し稲荷大明神と称する。神社合祀令により明治4年9月保食神社（うけもちじんじゃ）と改称、村社に列する。昭和34年9月旅立稲荷神社と名称を変更する。旅立明神と称することについて、藩祖伊達政宗公が青葉山に城を定め、初めて参勤の際、当時、下河原五軒茶屋といわれた赤壁楼にて休息し、この社に代参を以て道中安全を祈り、日を経て無事に帰着したので神恩に感謝し、直ちに神祇官に奏請して「正一位旅立大明神」を賜り、「旅立明神」の社号を奉ったと伝えられている。爾来、藩主参勤の際には赤壁楼より道中の安全を祈ったといわれている。

(6) 境内社：山神社

(7) 社 殿：本殿1坪、幣殿2.5坪、拝殿7.5坪

(9) 境内地：367.30坪

(10) 正月飾り：

ここでは「紙注連形式」や「切り透かし形式」の正月飾りを以前は奉製していたというが、現在は「幣束形式」のもののみを頒布している。



<写真69> 「へいそく」

生出森八幡神社（おいでもりはちまんじんじゃ）

(1) 鎮座地：宮城県仙台市太白区茂庭字中の瀬西31

(2) 主祭神：誉田別尊

(3) 例祭日：5月第4日曜日

(4) 由 緒：

後鳥羽天皇文治5年源頼朝東征の時創祀す。仙台藩士茂庭家元祖河村秀清厚樫山先登の賞として頼朝より、本州耶摩、名取両郡内の数ヶ村を賜ったので、この村に住む。よってこの社を茂庭城中の鎮守と崇め祭田を寄進する。仙台藩主綱村の世更めて祭田2石2斗の地を奉獻した。当時本社の末社に白旗・武内両社があり「白旗武内大明神」と称した。又生出森頂上の貴船神社は創建年代は明でないが、地主神であると伝える。(茂庭家伝、封内風土記) 明治5年4月村社に列し、同40年3月幣帛供進社に指定された。

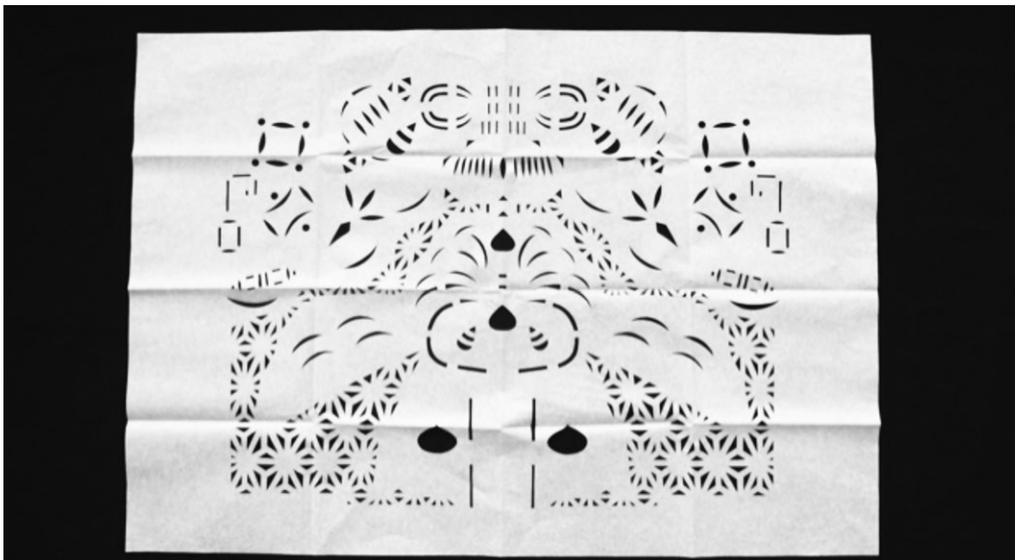
(6) 境内社：小牛田神社、十二社、山方神社、山神

(7) 社 殿：本社 本殿4坪、拝殿9坪、社務所10坪、里宮 本殿19坪、拝殿25坪

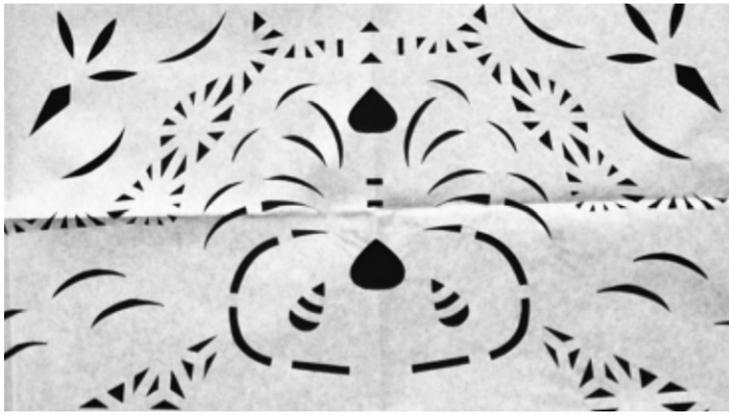
(9) 境内地：272坪

(10) 正月飾り：

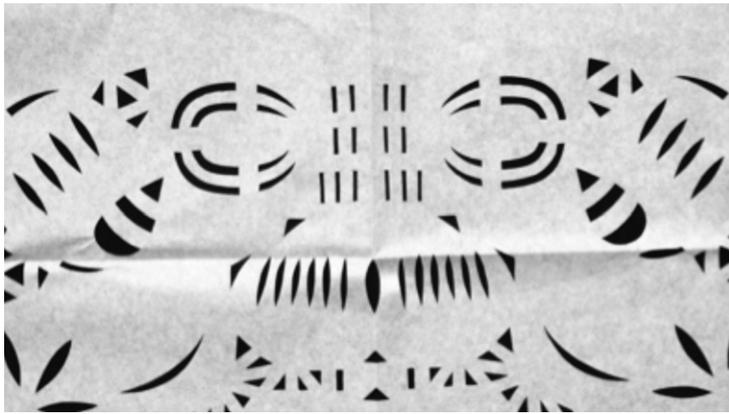
この神社の氏子は約1000戸といわれるが、「切り透かし形式」の正月飾りを受けるのは、35戸ほどである。さらに言えば、町区で頒布を受けるのは2戸のみである。



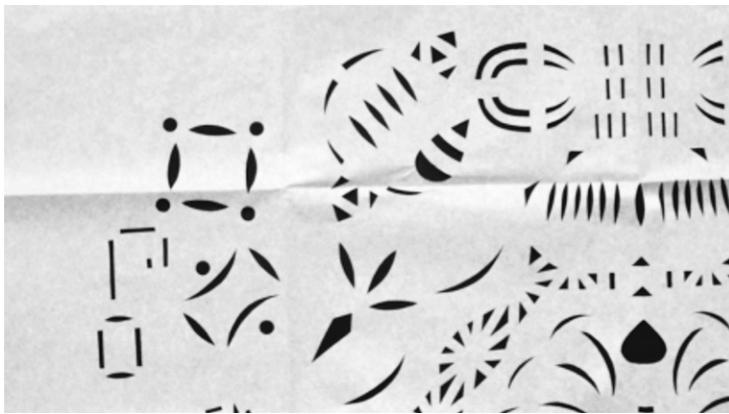
<写真70> 「切り透かし形式」の全景



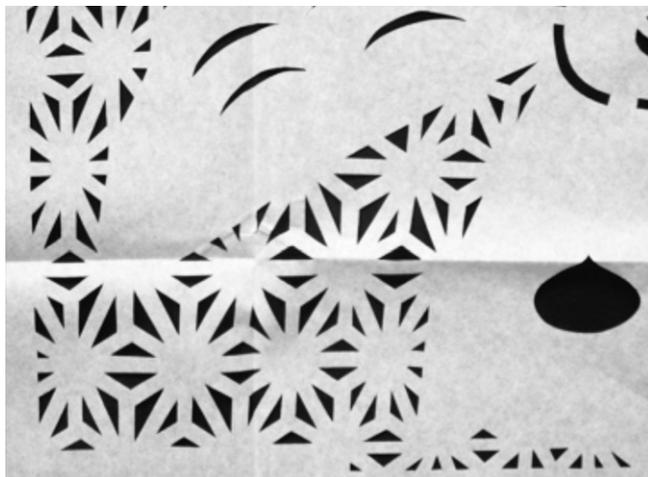
<写真71>三方の上に乗った燕



<写真72>中央上部



<写真73>左上部



<写真74>左下部

七郷神社（しちごうじんじゃ）

(1) 鎮座地：宮城県仙台市若林区荒井字押口56

(2) 主祭神：熊野加布呂岐櫛御食野命

(3) 例祭日：4月15日、9月敬老の日

(4) 由 緒：

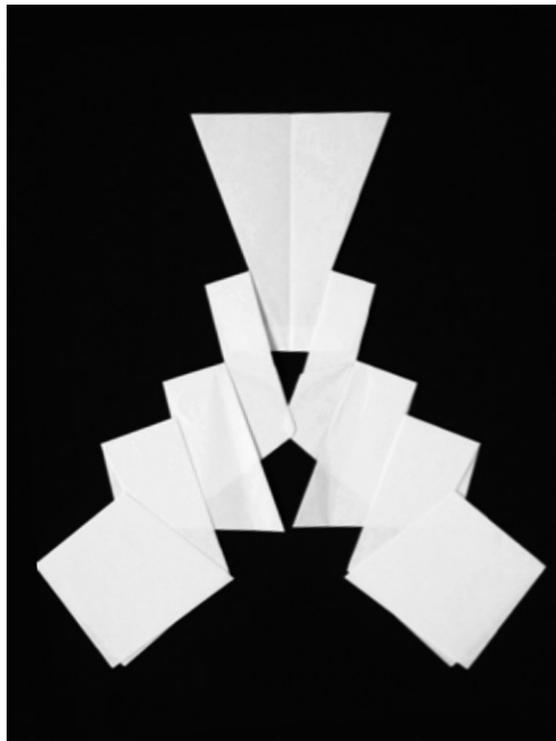
本神社の創立の由来不詳なるも、もと荒井字新屋敷西に鎮座し熊野権現と称す。明治5年6月村社に列し、同42年から同44年の間に後記神社を合併、44年5月幣帛供進社に指定され、同年7月現社号に改めた。これより先明治43年3月現在地に遷座する。合祀神社下記の如し。熊野神社（家中在家西）、穴蔵神社（字石川屋敷）、神明社（荒井）、春日神社（字藤田新田）、皇大神社（長喜城）、白山神社（伊在）、春日神社（六丁の目）、神明社（荒浜）、湊神社（荒浜）以上9社。

(7) 社 殿：本殿3坪、幣殿2坪、拝殿10坪、神楽殿6坪、社務所28坪

(9) 境内地：352.75坪

(10) 正月飾り：

ここでは「切り透かし形式」と「幣束形式」の二種の正月飾りを出している。「切り透かし形式」では五種頒布されているが、以下には「幣束形式」の実例を載せる。



<写真75>幣束

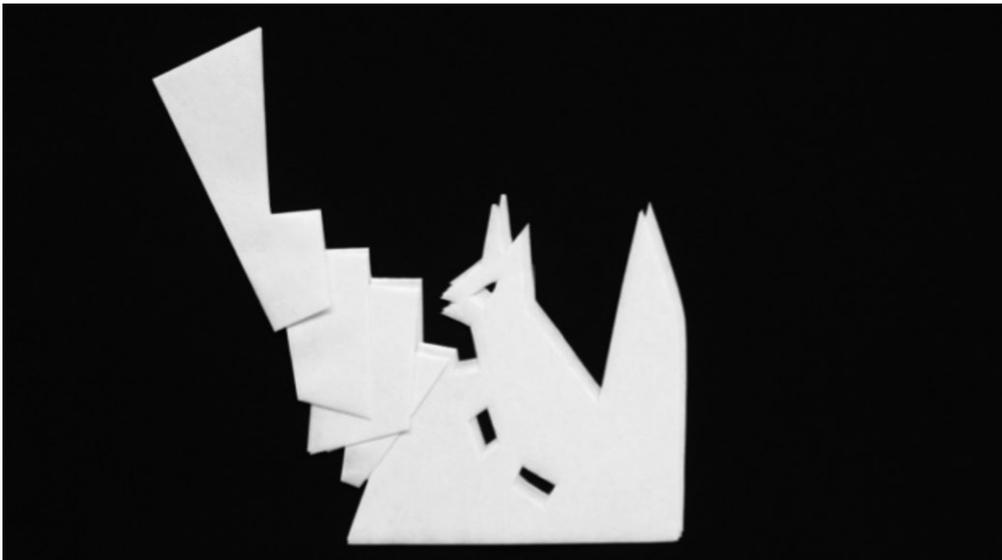
春日神社（かすがじんじゃ）

- (1) 鎮座地：宮城県仙台市青葉区春日町8-3
- (2) 主祭神：天兒屋根命・比売神・武甕槌命・経津主命
- (3) 例祭日：6月9日
- (4) 由 緒：

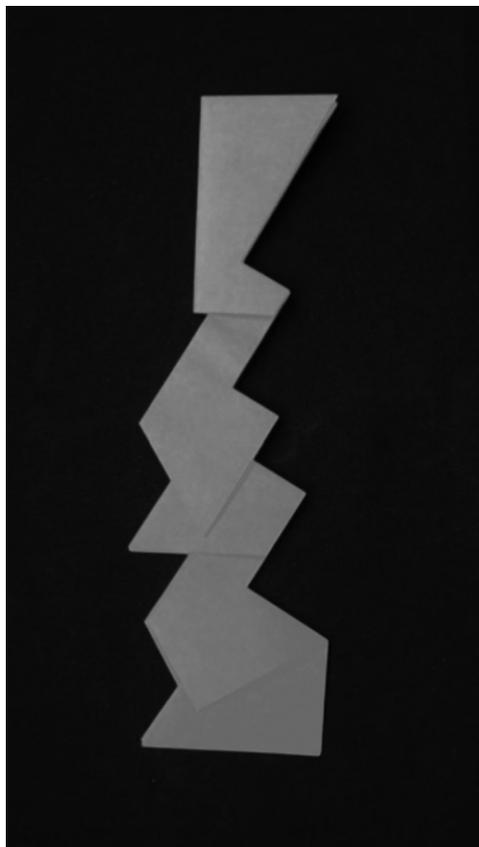
往古櫓丁柳清水の辺に御鎮座されたが、文治年中源義経奥州下向の節、この社に詣でし時柳に駒をつないだことから「駒つなぎの柳」といわれた。御神体は翁の面である。別当を青山照光院といい、立町1丁目にあった真言宗の寺院で定禅寺門戸である。後、現社の春日町（旧北材木町）に遷祀した。（御府内珍集記）安永5年4月17日火災に罹り全焼、同9年3月15日再建、昭和20年7月10日戦災にて全焼。同34年10月復興遷座して現在に至る。
- (6) 境内社：稲荷神社
- (7) 社 殿：本殿2坪、幣殿2坪、拝殿12坪（鉄筋コンクリート春日造）
- (9) 境内地：75坪
- (10) 正月飾り



<写真76>神社に表示された「お正月飾り」の頒布予定



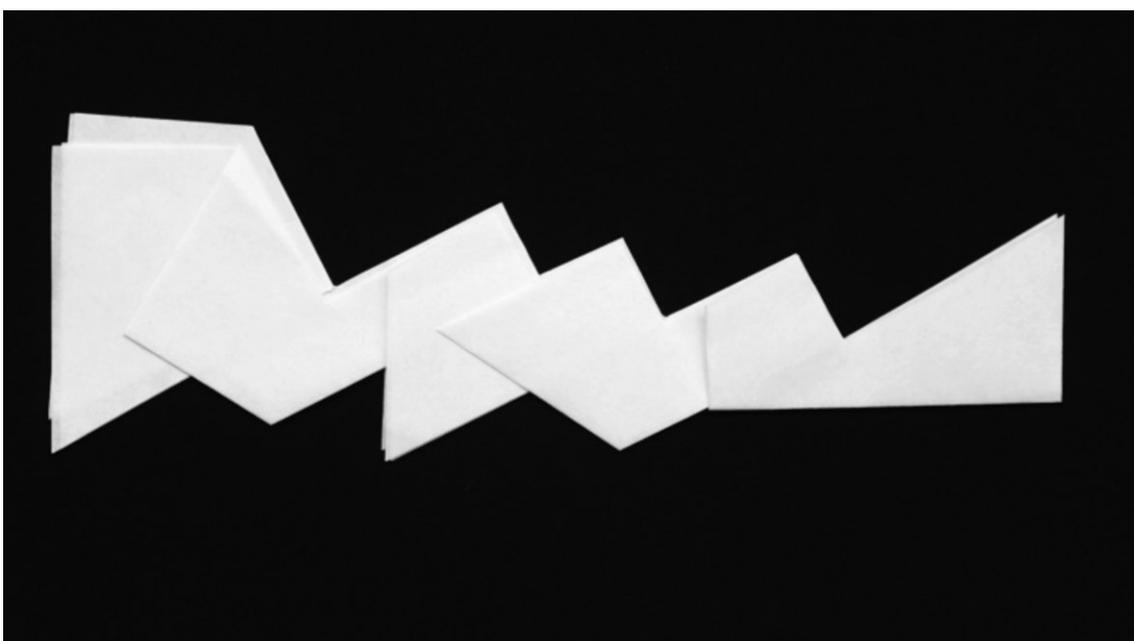
<写真77>変化型の稲荷の幣束



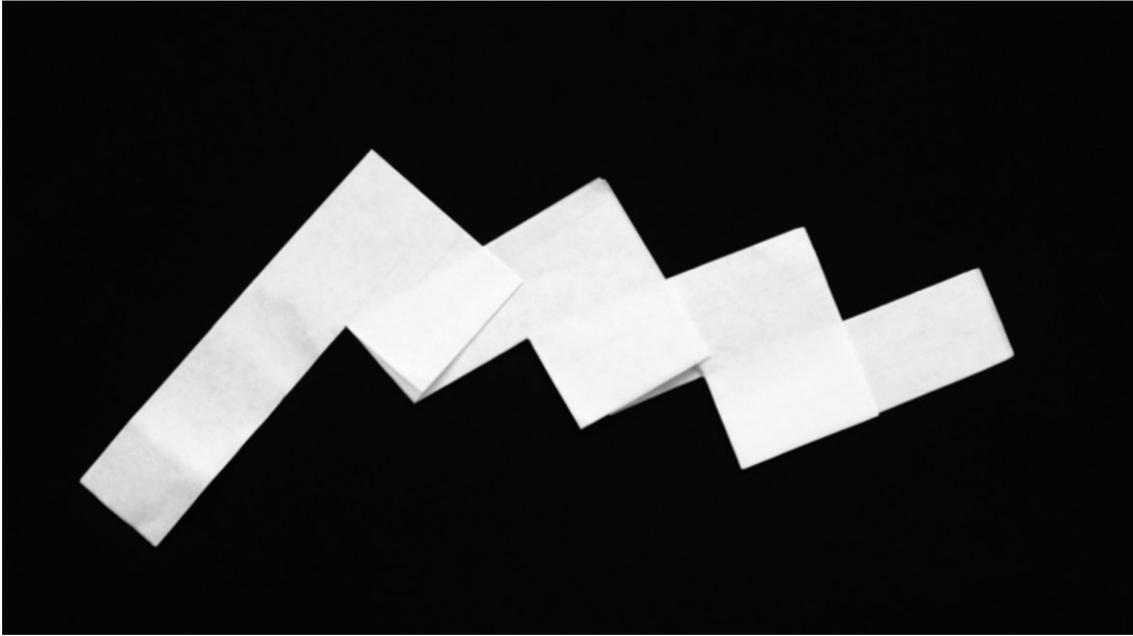
<写真78>変化型の稲荷の幣束



<写真79>変化型の稲荷の幣束



<写真80>変化型の稲荷の幣束



<写真81>変化型の稲荷の幣束

八幡神社（はちまんじんじゃ）

(1) 鎮座地：宮城県仙台市若林区沖野3-16-35

(2) 主祭神：応神天皇（第15代天皇誉田別命）

(3) 例祭日：春季例祭 4月15日、秋季例祭 9月15日

(4) 由 緒：

勧請年月日不詳なれど、中世（室町年中）、当時の名取郡北方三十三郷を領していた茂ヶ崎城城主栗野大膳が沖野に西館（沖野館）を築くにあたり館内に栗野氏の氏神（武運長久守護神）として八幡神（神祠八幡宮を奉斎）を勧請したと云う。其の後、天正19年（1591、室町）沖野館も戦火に罹り、近世・元禄3年（1690、江戸）沖野村の村民現在の地に社殿を造立し奉り御神体を厳肅に遷座され（「御神体飛ンデ火ノ玉トナリ今ノ地ニ遷ル ヨリテ茲ニ奉祠セリ」との口伝承あり）、爾来、沖野村の鎮守の守護神八幡宮として尊崇された。（社伝）。元禄3年（1690、江戸）奉造立八幡宮 元禄三庚午 法印宥範（当社棟札記録）。明治5年11月、村社に列格。大正4年11月、幣帛供進社に指定される。昭和11年、沖野字無尻橋（現沖野6丁目、横堀東地区）の神明社を合祀する。昭和27年、「宗教法人八幡神社」となる（包括団体は「宗教法人神社本庁」）。現代（現在）は、沖野鎮座の守護神八幡神社として信仰崇敬され、今日に至っている。

(6) 境内社：古峯神社

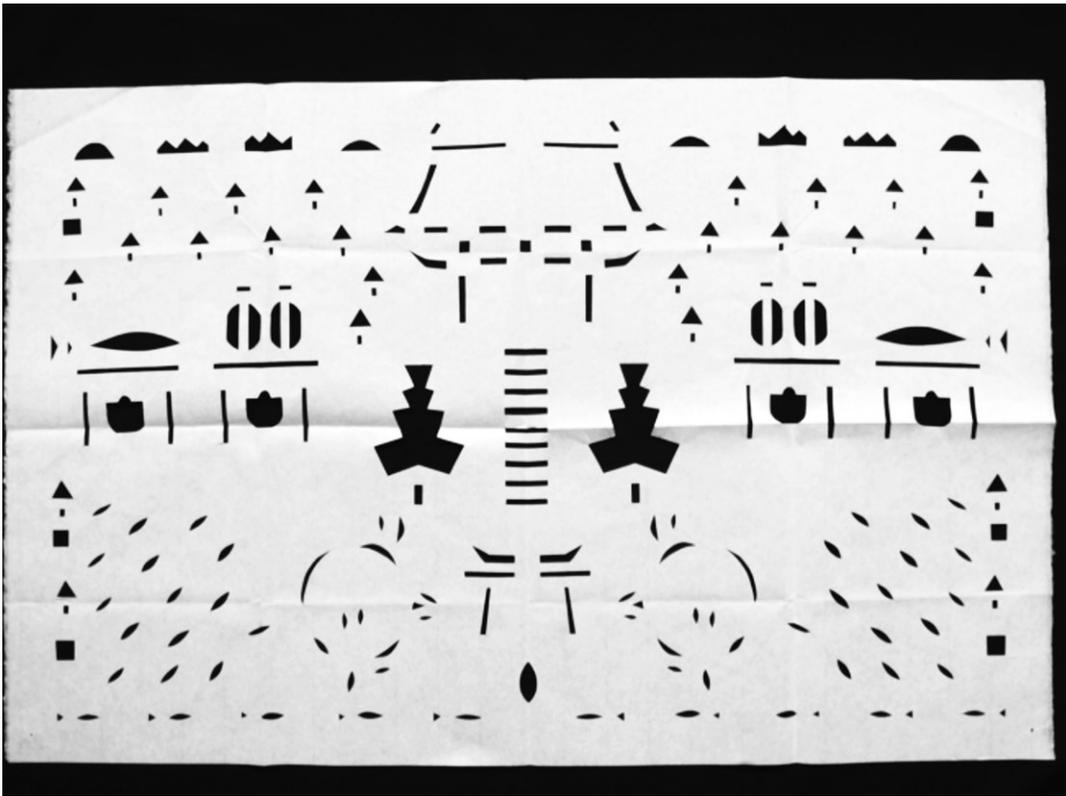
(7) 社 殿：本殿 1坪、幣殿2坪、拝殿3坪

(9) 境内地：581坪

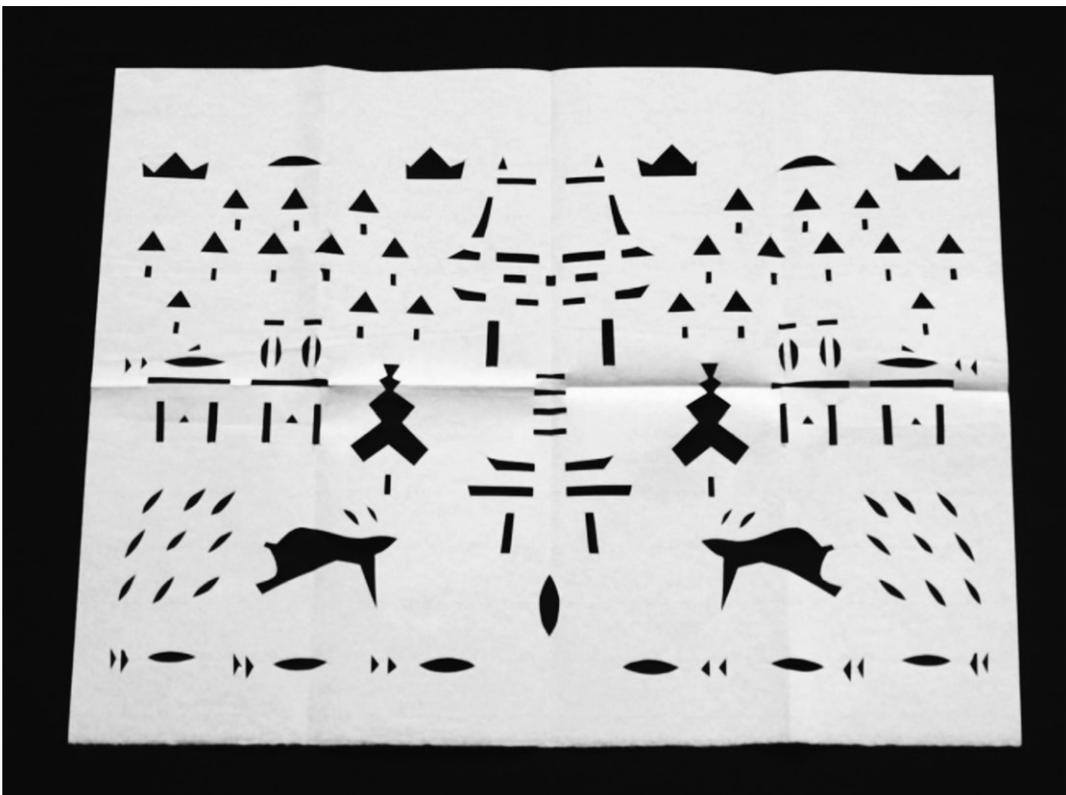
(10) 正月飾り：

沖野の八幡神社では、二種の「切り透かし形式」の「正月飾り」が奉製され、「お飾り」と呼ばれている。二種のモチーフはかなり似通っており、中央下部に鳥居があり、その先、階段を上って神社の建物に至る配置になっている。階段の両脇には幣束があり、その上段には三方に乗った神酒や魚などが描かれている。大・小の違いは、鳥居の脇の様子で、「大」の場合は樹木が生い茂った状態を表しているのに対して、「小」の場合は、角の生えた獣が描かれている点である。

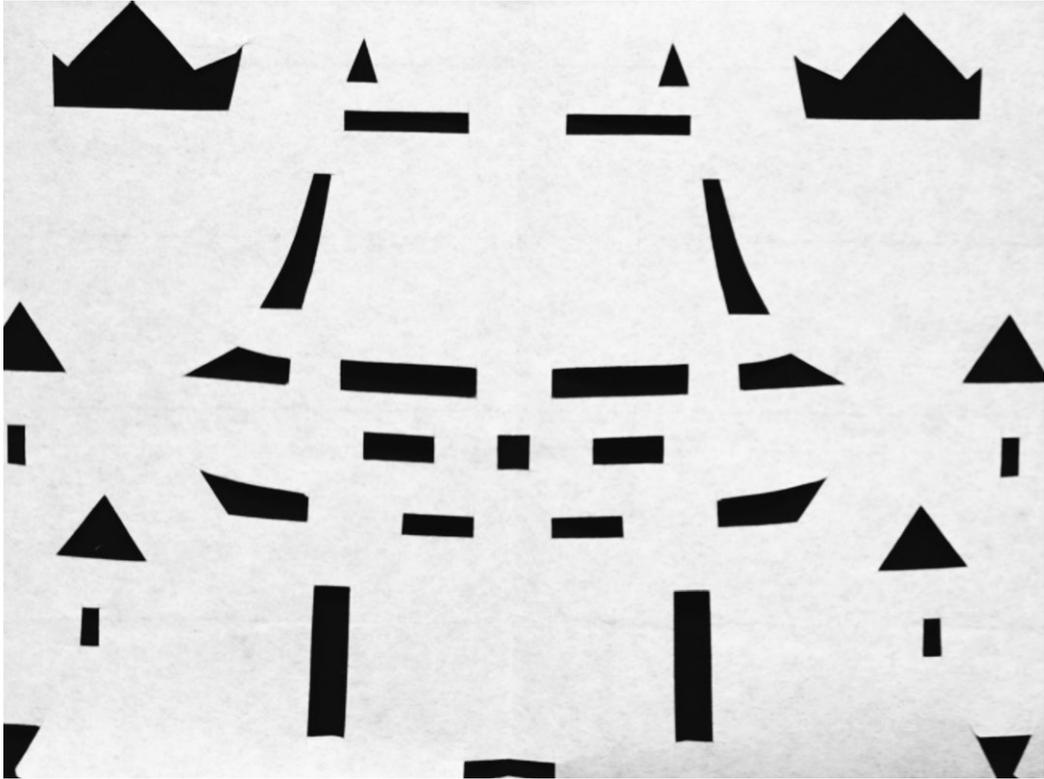
この「お飾り」を飾る際には、「紙注連形式」の魚の形をした紙垂形の切り紙を、同時に飾ることになる。



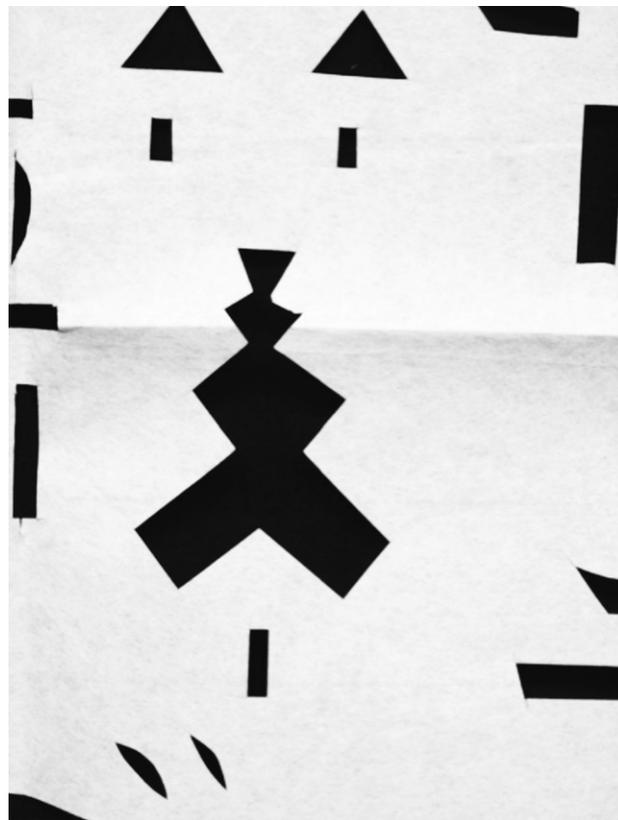
<写真82> 「お飾り」：大



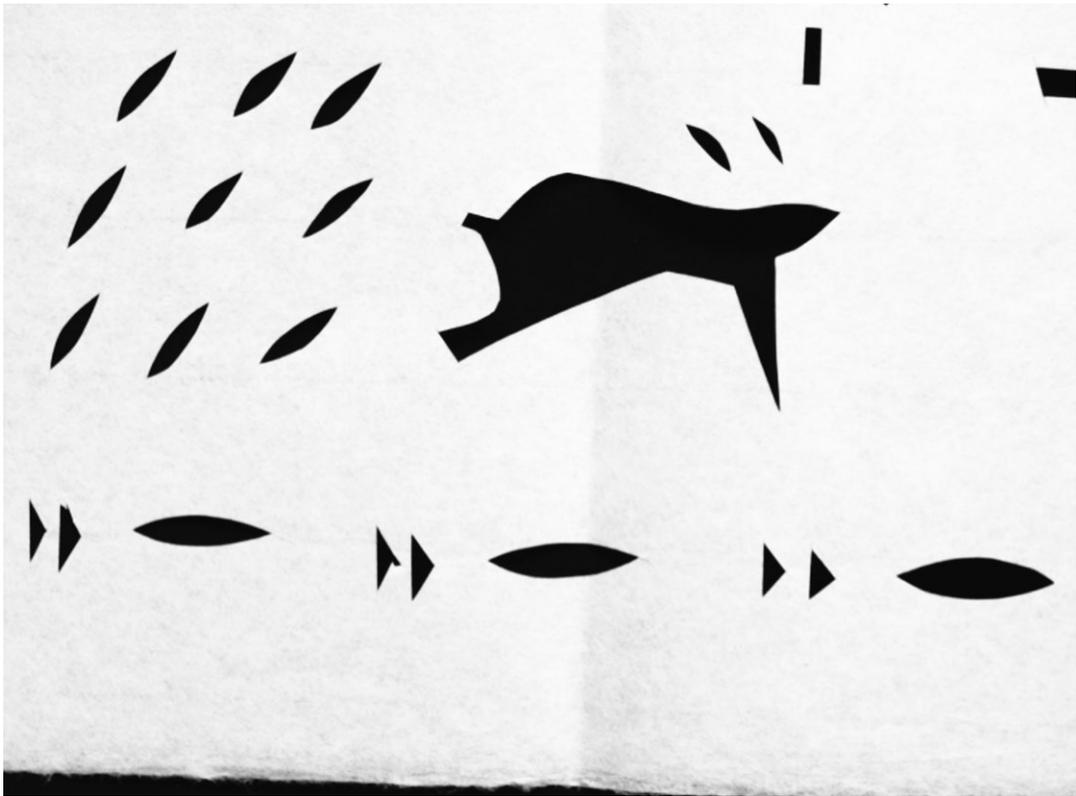
<写真83> 「お飾り」：小



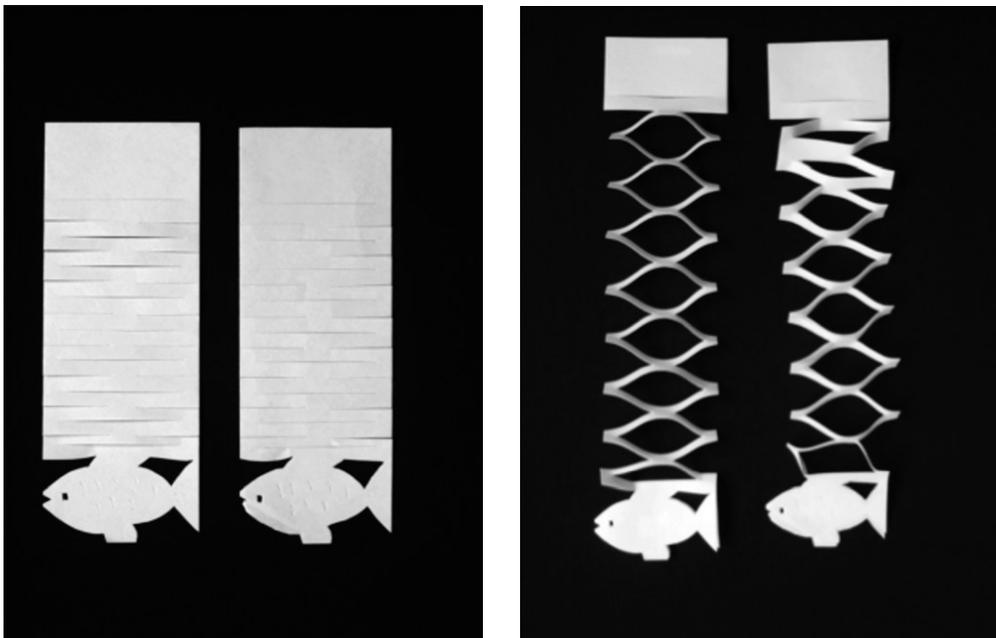
<写真84>「お飾り」中央の神社の建物



<写真85>階段脇にある「幣束」



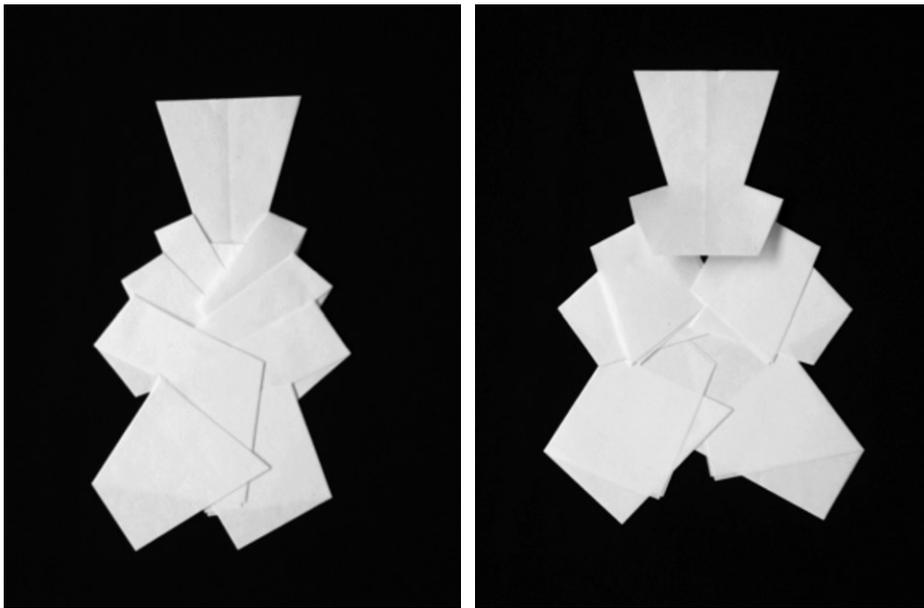
<写真86>ウサギ?



<写真87>「紙注連形式」

高砂神社（たかさごじんじゃ）

- (1) 鎮座地：宮城県仙台市宮城野区蒲生字町86-41
- (2) 主祭神：底綿津美神・中綿津美神・表綿津美神・伊邪那岐神・伊邪那美神
- (3) 例祭日：4月第2日曜日
- (4) 由 緒：
万治2年（1659年）江戸藩の米穀運輸のため塩釜村浦海より大代村を通り蒲生村まで堀割りの節、佐々木只太夫藩命をうけて土木の事に従事す。この地に至り泥地にて1日掘れば一夜にして埋もるという状態で困却し、成就の祈願をこの神に請うたところ、靈験により成就した。依って社殿を営んで神恩に奉謝した。その後、藩主某この地に来り地に来り地形が播州高砂浦に似ていることから社名を高砂神社と称し、地名を高砂といった。爾来本社は蒲生北方の鎮守として信仰された。明治5年1月村社に列する。近年に至り仙台新港の開設に伴い、現在の地に新殿を造営して遷し奉る。
- (7) 社 殿：本殿 入母屋1坪、幣殿2.25坪、拝殿8.75坪
- (9) 境内地：140坪
- (10) 正月飾り
「御幣」



<写真88>幣束の表と裏

福沢神社（ふくざわじんじゃ）

(1) 鎮座地：宮城県仙台市青葉区宮町4-9-12

(2) 主祭神：宇迦之御魂神

(3) 例祭日：9月25日

(4) 由 緒：

桓武天皇延暦7年（788、奈良）此の地に創祀し兎玉明神と称す。天曆3年（949、平安）京都総本宮の稲荷社祠官より正一位稲荷大明神安鎮の証を得て、社号を福沢稲荷明神と改める。安貞年間（1227～1228、鎌倉）平泉の和泉三郎忠衡（藤原秀衡の三男）乳母石塚小萩は、主家の女安養院を守り当地に留まり待ち来たる藤原家の護持仏十一面観音像（木像で後世小萩観音と称され仙岳院に現存行基作）並に菅原真実の真筆は当社内に安置されたが後伊達綱宗が城東天満宮を榴ヶ岡に遷宮した際、観音像は天神林に堂を建て遷座した。又福沢稲荷明神の宮守りした小萩の残した歌に「雨も降り風の吹くをもいとはねと今宵一夜は露無の里」と後世この世を露無の里といわれている。慶長年間（1596～1614、江戸）片倉景綱によって、神殿、拝殿を造営したが惜しくも祝融に罹り明治に至り再興する。

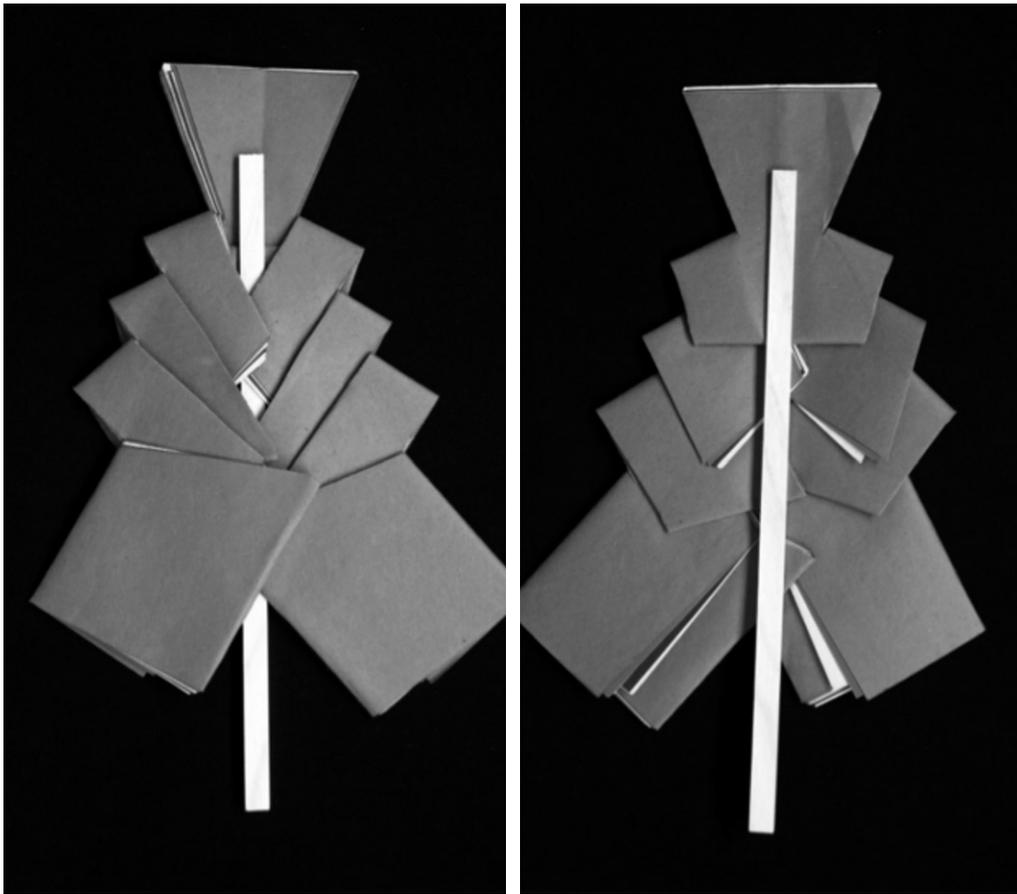
(6) 境内社：金蛇水神社（文政十、創建）、鶏神社（正保三、創建）、小萩明神（寛喜三、創建）、三山神社（元治元、創建）、山神社（弘化五、創建）

(7) 社 殿：本殿 流造3.7坪，幣殿3坪，拝殿24坪

(9) 境内地：290.75坪

(10) 正月飾り：

「切り透かし形式」には大飾りと小飾りの二種ありとの情報は入手したが、現物を見ることはできなかった。以下には、五色の「おへいそく」と白の「おへいそく」を掲げる。



<写真89>



<写真90> 「おへいそく」

稲船神社（いなふねじんじゃ）

(1) 鎮座地：宮城県仙台市宮城野区五輪1-14-27

(2) 主祭神：宇迦之魂神

(3) 例祭日：6月第1土、日曜日

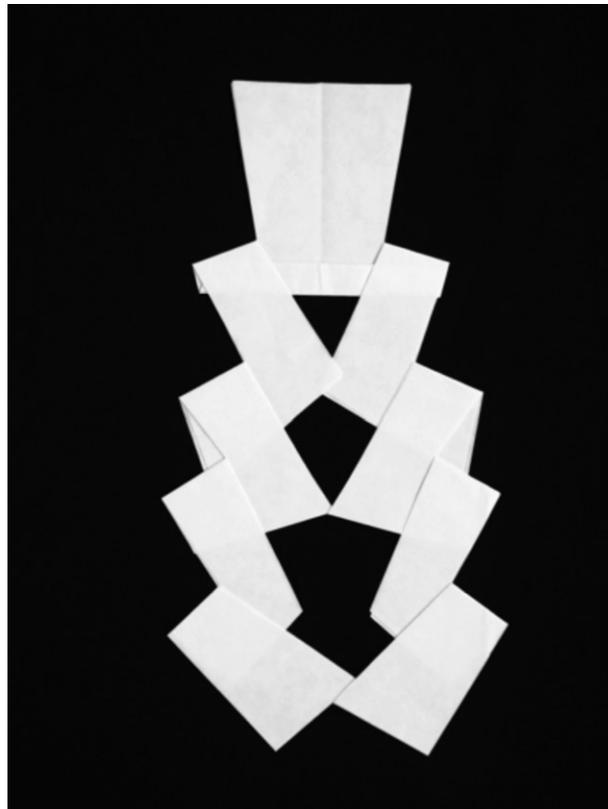
(4) 由 緒：

正徳5年3月、藩主伊達綱村公が、勸請すると伝える。天明2年7月、福壽山法林寺現住智教の代に、本山東陸奥柴田郡平邑白鳥宮より勸請。柴田郡から召し出された御足軽（総勢169人、16石取り）が、故郷の平邑の大高山神社の御祭神を祀ったものとも伝えられている。

(7) 社 殿：本殿 1.2坪、拝殿10坪

(9) 境内地：100坪

(10) 正月飾り：



<写真91> 「おへいそく」

八幡神社（はちまんじんじゃ 通称：坪沼八幡神社）

(1) 鎮座地：仙台市太白区坪沼字館前東70

(2) 主祭神：仲哀天皇・神功皇后・応神天皇・武内宿禰

(3) 例祭日：4月15日

(4) 由緒：

後冷泉天皇天喜4年陸奥の豪族阿部頼時乱を起し朝廷源頼義に命じて頼時を討しむ。頼義子義家と共に男山八幡宮に賊徒平定の祈願籠め祠官に請ふて神像を奉じて東征し各地に賊を戦滅す。乱平ぐに及んで坪沼の邑中央の丘に社殿を建立し神像を鎮座し奉り一族の将を根源館に居城せしめ地方鎮撫と共に代々神社に奉仕せしめたり。後数拾代世は戦国時代となり将兵の多くは帰農するに及んで村落の鎮守と仰ぎ天台宗赤石山圓通寺頼光院を別当とし毎年8月15日祭事の任に當らしむ。社伝云々。明治5年4月村社に列す。同44年5月幣帛供進社に指定された。

(7) 社殿：本殿 流造1坪、拝殿7.5坪



(9) 境内地：920坪

(10) 正月飾り：

・正月用袋の中

御札 神宮大麻・坪沼八幡神社

御神像 大国主神・宇迦御魂神・大年神・事代主神

奥津彦神奥津姫神

鳥居+（馬+烏帽子の人）×2

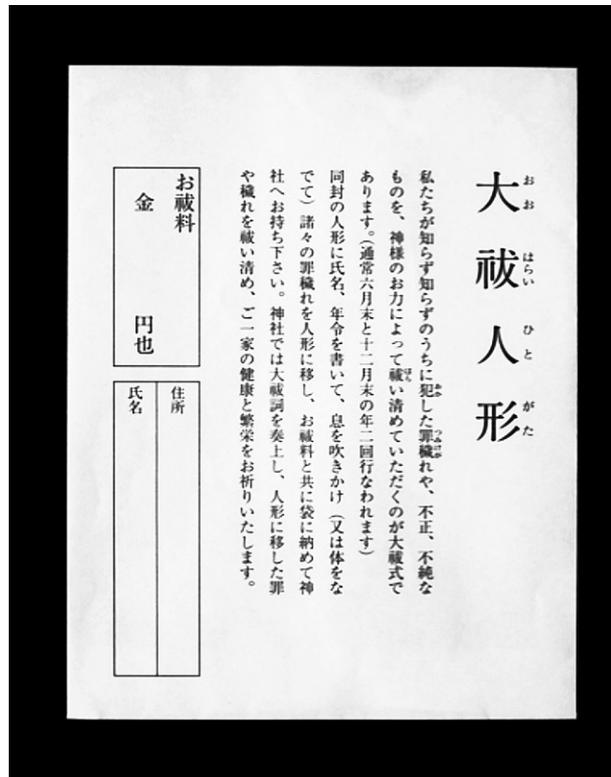
宮城県神社庁平成25年第62回神宮式年遷宮

拝み方

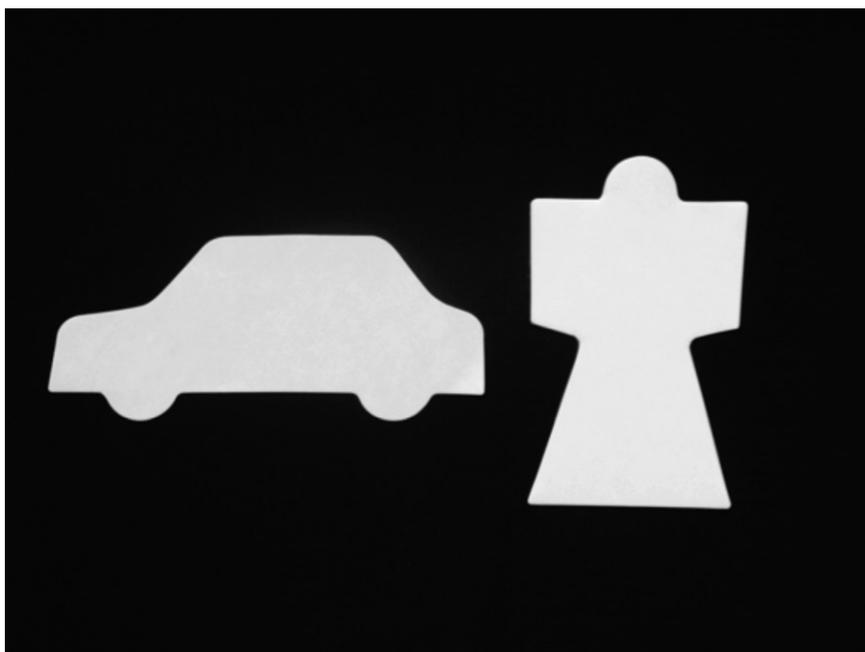
大祓のご案内

大祓人形 人形×5、車形×1

『坪沼八幡神社社報』



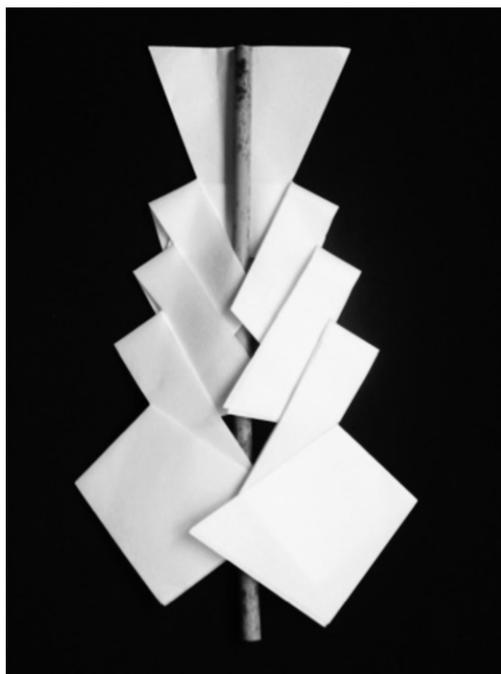
<写真92>大祓人形の案内



<写真93>人形と車形



<写真94>元旦に初詣を促すポスター



<写真95>「おへいそく」

二木神社（ふたきじんじゃ）

(1) 鎮座地：宮城県仙台市宮城野区田子3-2-40

(2) 主祭神：伊邪奈岐神・伊邪奈美神

(3) 例祭日：春季例大祭（4月第2日曜日）、秋季例大祭（10月第3日曜日）

(4) 由 緒：

田子地区の護り神として二木の里に鎮座する二木神社創建の詳細は不明なれど、古老たちの言い伝えによると源氏の棟梁頼朝が奥州平泉藤原氏遠征の途中、二本の杉の巨木に馬をつなぎ休息した際、この地を二木と呼ぶようにと置いて出陣したことにより当時（1189年）頃からこの地を二木と呼ぶようになったと伝えられる。宮城郡誌の記載によると、「元和2年（1616年）3月19日勧請（神仏がこの地に下られるのを願ったこと）ニシテ宝暦3年（1753年）9月19日再興サレ明治6年1月村社二列ス」とある。従ってその後の記録が追加されていないところから見ると、前社殿は238年前に建築され、当地に鎮座してこの地区の信仰を得ていたと考えられる。現在の社殿は、平成3年に本殿は改築、拝殿は新築したもので、本殿は伊勢神宮のみに伝わる「唯一神明造り」という建築様式であり、お産・魔除け・厄除け・方位除け・建築・旅行の神として崇敬されている。

(6) 境内社：見渡神社

(7) 社 殿：本殿5.2坪、拝殿10坪

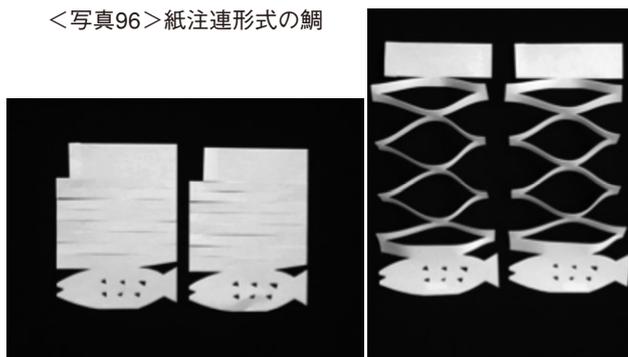
(9) 境内地：158坪

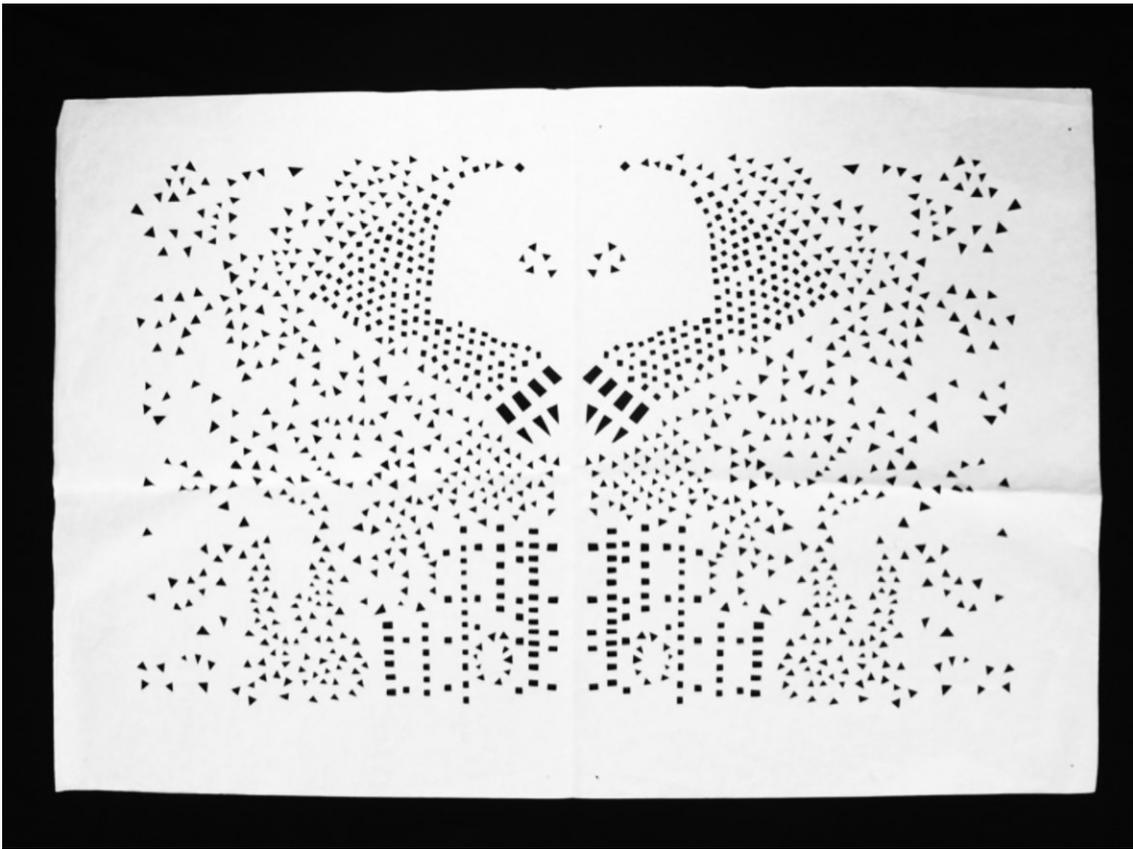
(10) 正月飾り：

二木神社では「紙注連形式」「切り透かし形式」「幣束形式」の全てが奉製されている。えん罪作られているものでは、「紙注連形式」が一種、「切り透かし形式」が四種、「幣束形式」は四種奉製されている。

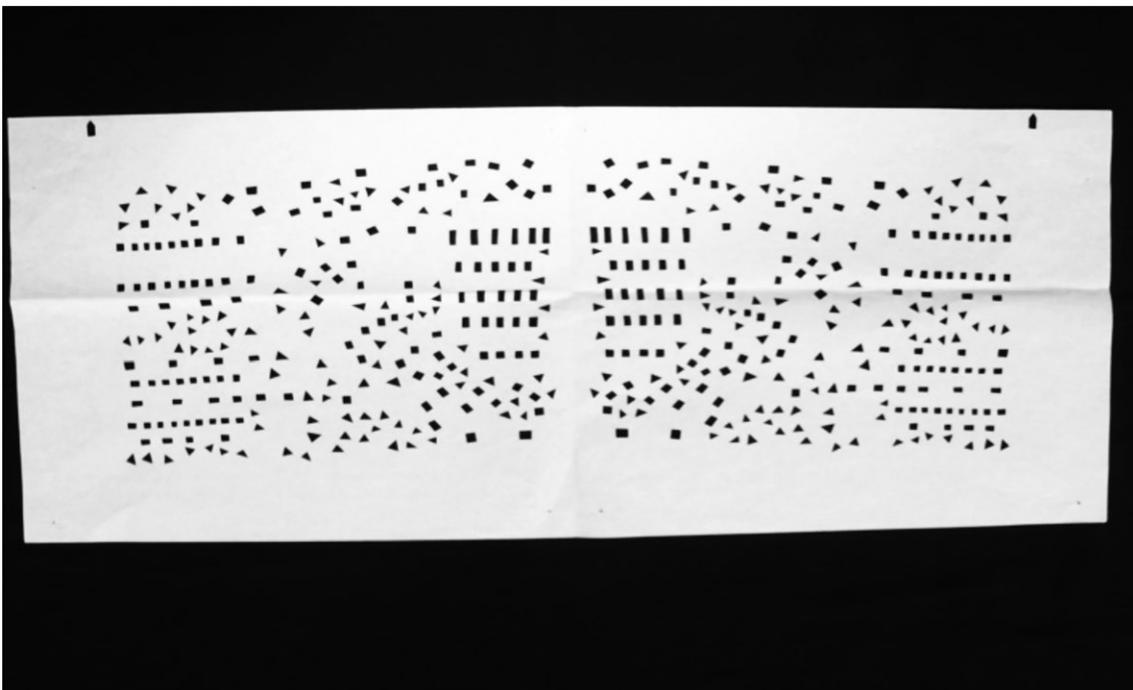
まず、「紙注連形式」は紙垂形の「鯛」である。

<写真96>紙注連形式の鯛

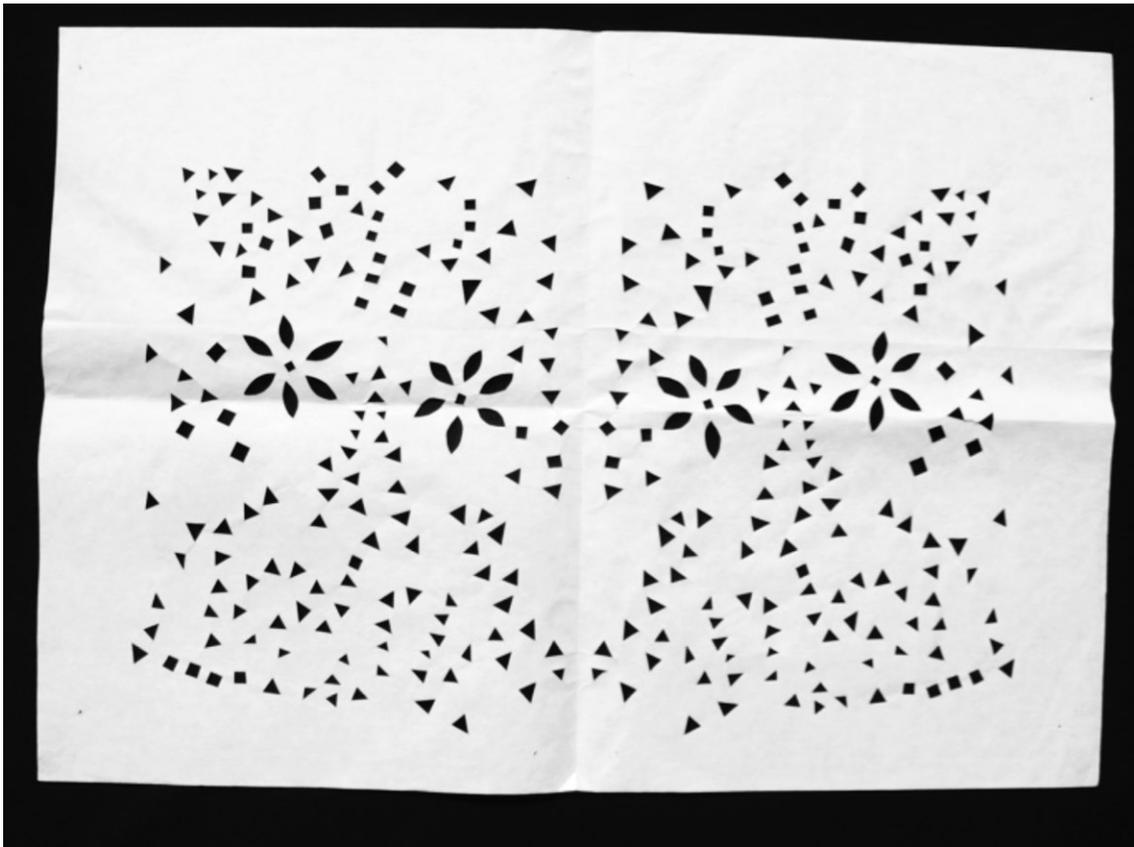




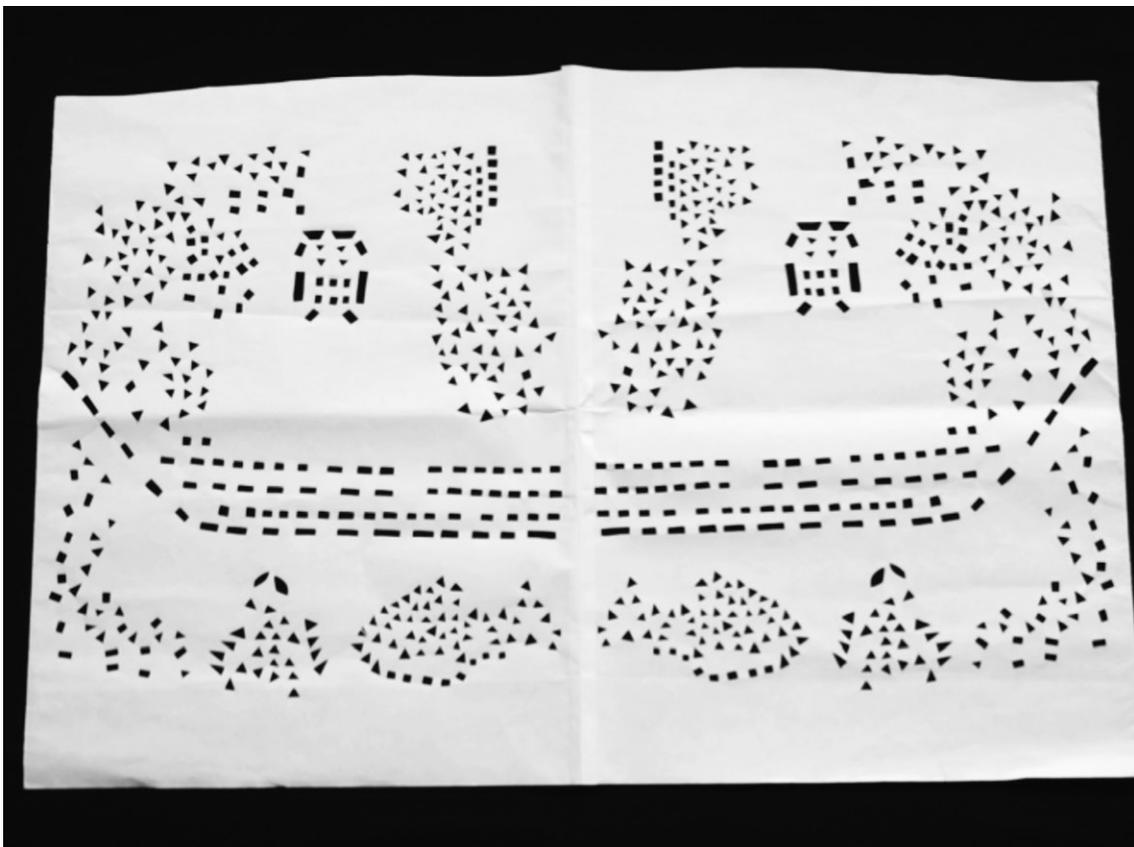
<写真97> 「切り透かし形式」の「末広」(957mm×647mm)



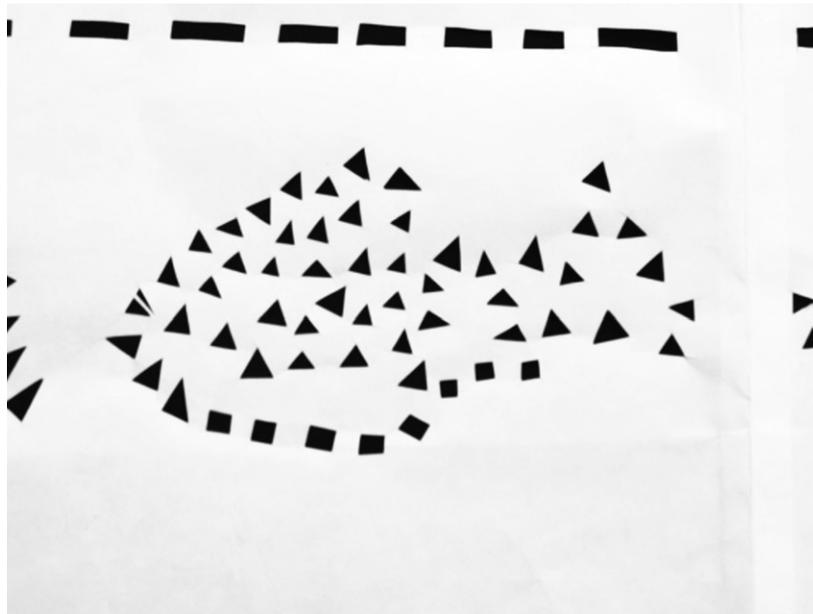
<写真98> 「切り透かし形式」の「田畑作」(950mm×450mm)



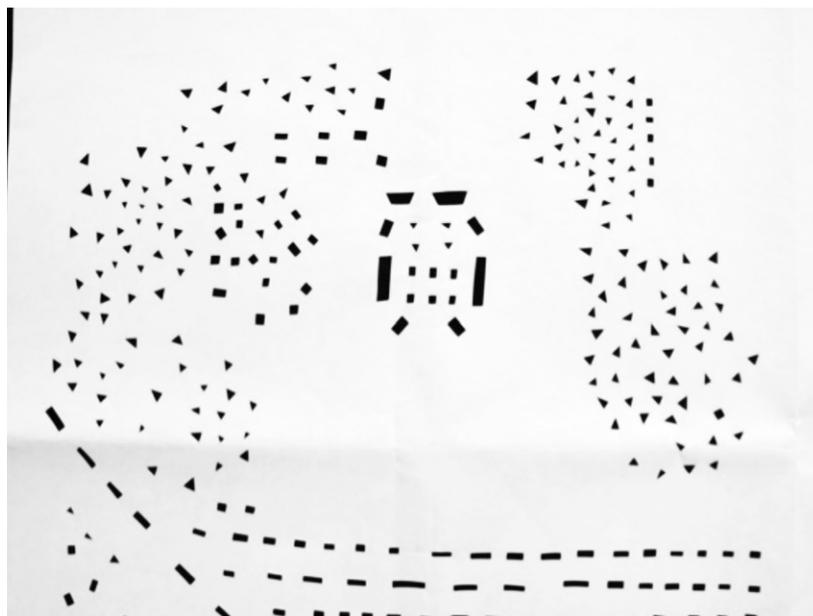
<写真99> 「切り透かし形式」の「稲の花」(630mm×449mm)



<写真100> 「切り透かし形式」の「宝船」(986mm×690mm)



<写真101> 「宝船」に描かれた「魚」



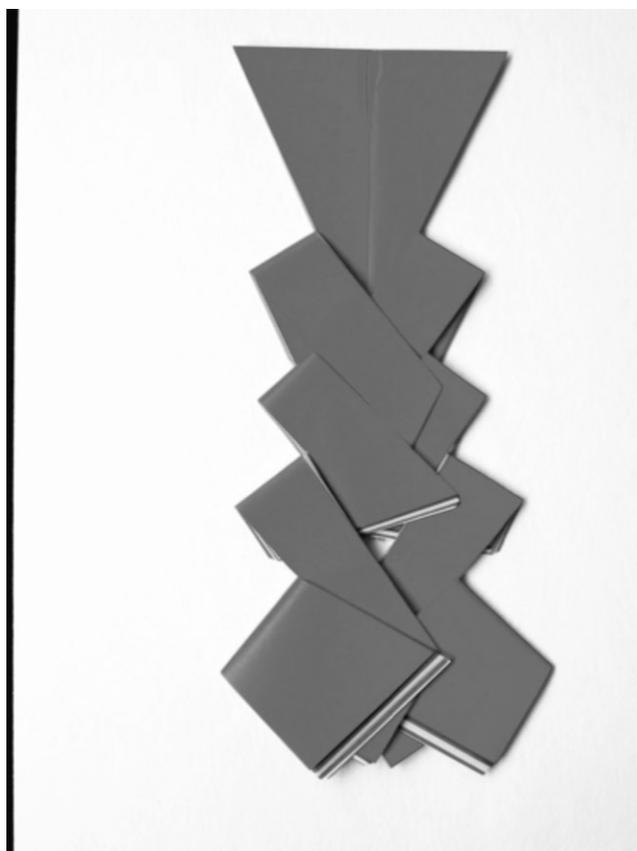
<写真102> 「宝船」に描かれた「宝」の文字

「切り透かし形式」の「末広」は「四枚継ぎ」とも言われ、中央上半分に広げた扇の図柄が切られている。細かい切り込みでドットを打ち込んで形を作っているが、その詳細は不明である。「田畑作」の場合も、題名から描かれている内容は十分に推測できるのであるが、図柄については、不明瞭である。「稲の花」についても、中央に稲の花が描かれているが、その他に関しては詳細不明である。最後の「宝船」は、今述べた三点に比べれば分かり易い。中央下に左右に長く船があり、その下に魚や蛸が泳いでいる。さらに船より上に「宝」の文字がデフォルメされながらもくっきりと浮かんでいる。この神社の「切り透かし形式」全体の特徴は、細かいドットで描かれ、図柄の詳細がわかりにくいということがあげられるが、「宝船」に関しては、かろうじてそのような抽象性からは外れている。

次に、「幣束形式」のものを見ていくことにしよう。この神社では「稻荷幣束」「五色幣束」「赤幣束」「白幣束」が頒布されている。



<写真103> 「稻荷幣束」



<写真104> 「五色幣束」



<写真105>「白幣束」

宇那禰神社（うなねじんじゃ）

(1) 鎮座地：宮城県仙台市青葉区芋沢字明神12

(2) 主祭神：桓武天皇

(3) 例祭日：春5月3日、秋旧暦9月19日

(4) 由 緒：

芋沢字明神に鎮座する宇那禰神社は、桓武天皇を祭祀しており、創祀年代は明らかではないが、封内風土記によれば、社殿造営の際に梁の上に古い棟札が3枚あり、その中の1枚は、藤原朝臣長沼伊勢守政継が、福德元年（福德という年号は公式にはないが、非公開の年号で西暦1490延徳2年にあたっている。）に建立したという棟札、その2は、藤原朝臣長沼式部少輔宗次が天文5年丙申（1536）に建立、その3は、藤原朝臣長沼郷六大膳宗家が永禄5年壬戌（1562）に建立したという棟札である。これ等の棟札によれば、本社は、中世足利時代からの古社で、施主の大壇那は、何れも郷六氏に関係あるものである。永禄年中『或は、天正18年（1590）とも、慶長14年（1609）とも』まで国分郷六村（今の愛子二軒在家）国分氏の重臣郷六大膳孫九郎宗治の氏神として尊宗され、この年今の地に御遷座されたのである。本社の別当寺は、当地の本山派修験光徳山寿命院であった。その後本社が村社に列格したのは、明治5年3月19日で、村内の神社を合祀したのは、明治43年7月23日である。尚、境内に樹令約400年の杉の御神木がある。

(7) 社 殿：本殿 1.5坪、拝殿 7.5坪

(9) 境内地：862.68坪

(10) 正月飾り：

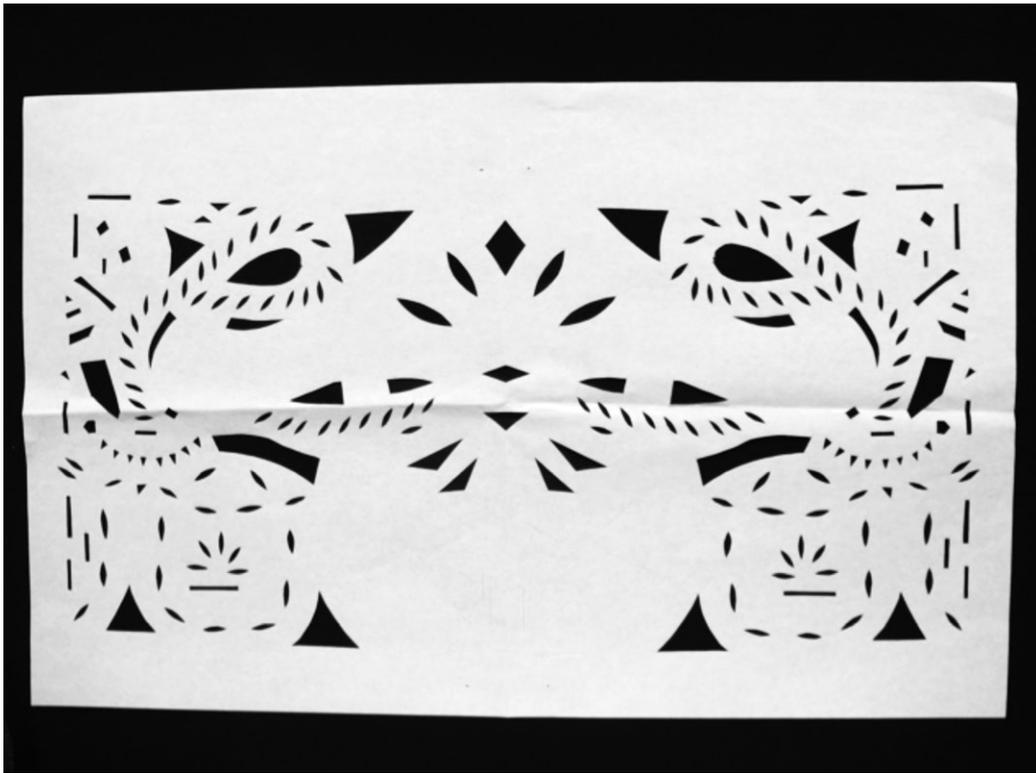
この神社では「紙注連形式」「切り透かし形式」「幣束形式」の三種の「正月飾り」が奉製されている。

①「切り透かし形式」

まず「切り透かし形式」は二枚飾り、四枚飾り、六枚飾り、八枚飾りの四種見られる。以前までは半紙を貼り合わせることで大きな「正月飾り」を作っていたため、ここで挙げられる枚数は、つなぎ合わせた半紙の数を示している。但し現在は、貼り合わせる手間を省く意味から、半紙ではなく美濃紙を使って奉製している。

「二枚飾り」

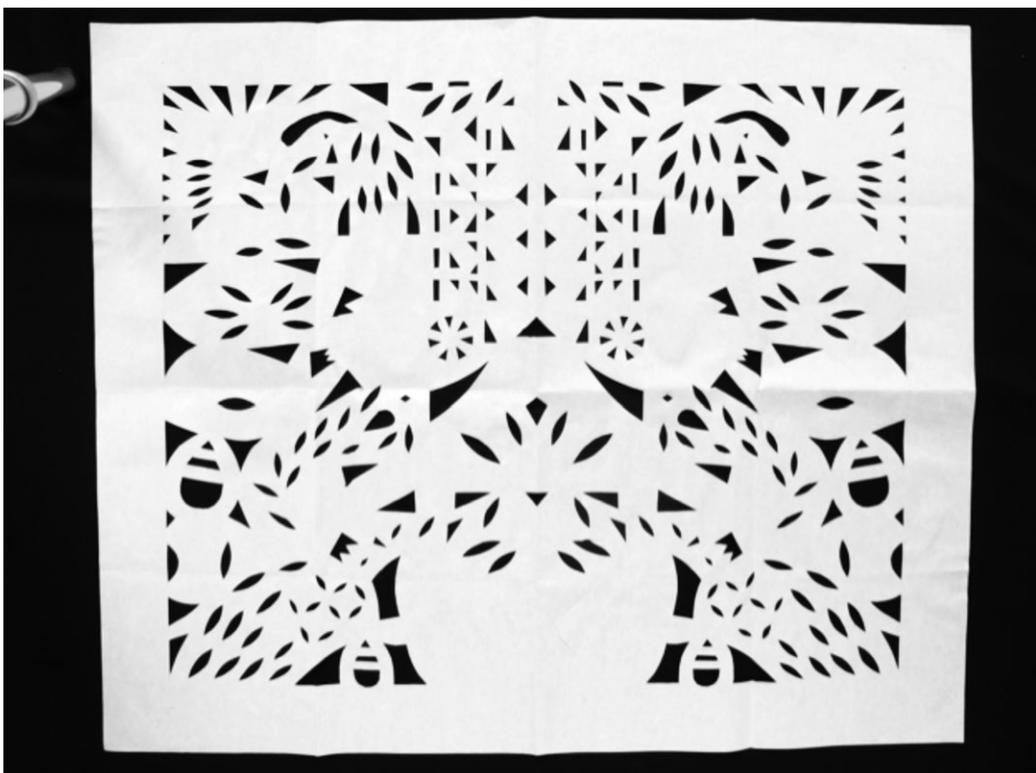
横605mm、縦387mmの白い美濃紙で奉製されたお飾りである。中央部に葉のついた蕪が描かれている。蕪の上部から蕪の葉の部分にかけて蛇行しているのは注連縄である。上部の左右には水器、下部の左右には米俵が描かれている。



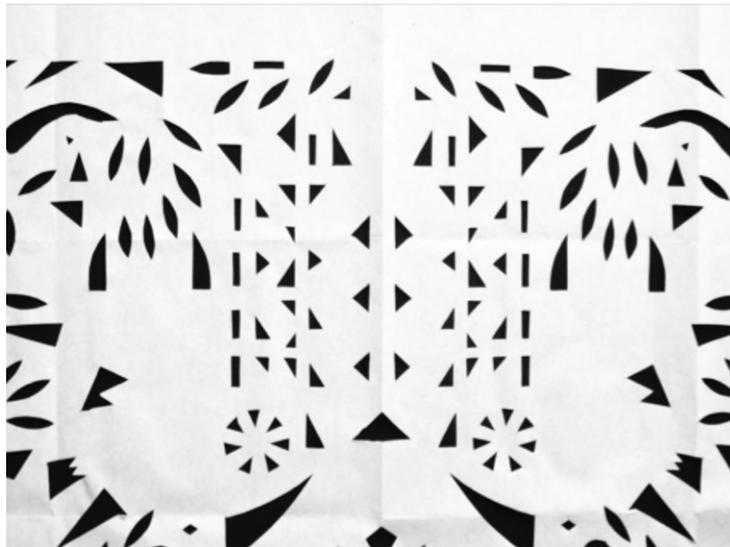
<写真106>二枚飾り (605mm×387mm)

「四枚飾り」

中央下部に葉のついた蕪があり、その上に幣束が乗っている。幣束の回りには注連縄と紙垂がある。また左右の上部には鶴、下部には亀が描かれている。



<写真107>「四枚飾り」 (766mm×622mm)



<写真108>「四枚飾り」中央部の御幣

「六枚飾り」

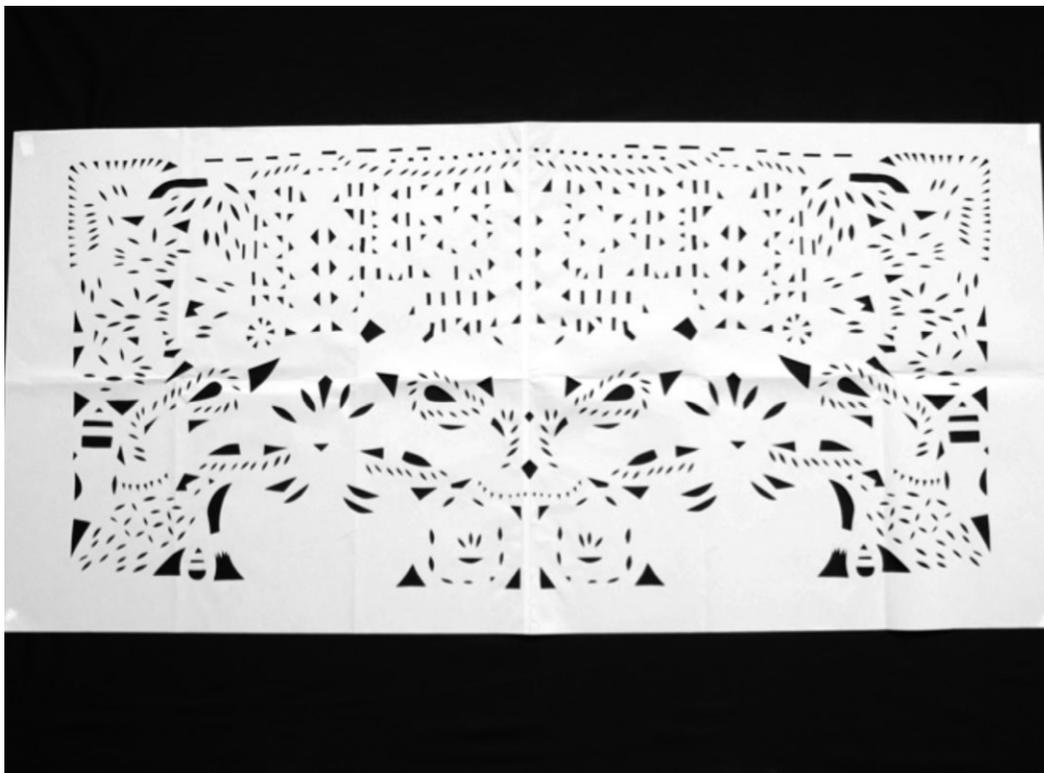
上部には紙垂の下がる注連縄が下がり、中央には野菜の乗った三方、その両側には三重ねの餅が乗った三方が配されている。中央の三方の下部には、小判があり、三方同士の間には「田」の字が隠れているともいわれる。また画面左右対称に、上から蕪、鮎、米俵といった吉祥柄が描かれている。



<写真109>六枚飾り (1190mm×606mm)

「八枚飾り」

全体は左右対称の模様で出来ているが、まず上部にはゴボウ締めがある。上半分の中央部とその左右に幣束があり、それぞれの幣束の下に、中央は注連縄で作ったお飾りが米俵に乗ってあり、左右には蕪がある。これらお飾りや蕪は、注連縄でもってまとめられている。左右の下部には亀がいるため、左右の上部に鶴がいる可能性が高いが確認は取れていない。



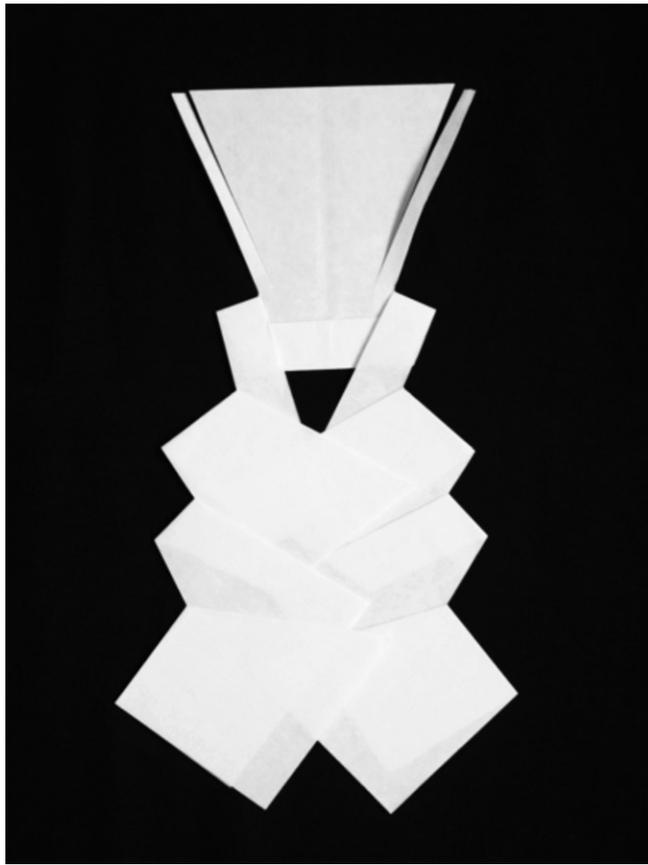
<写真110>八枚飾り (1282mm×620mm)

②「幣束形式」

この神社で出している幣束には、白色の幣束、五色の幣束、白色の釜神、五色の釜神、水神の幣束、枳の幣束、マンガンの幣束、俵の幣束、稻荷の幣束などがある。



<写真111>宇那禰神社で奉製している幣束



<写真112>水神の幣束



<写真113>柁の幣束



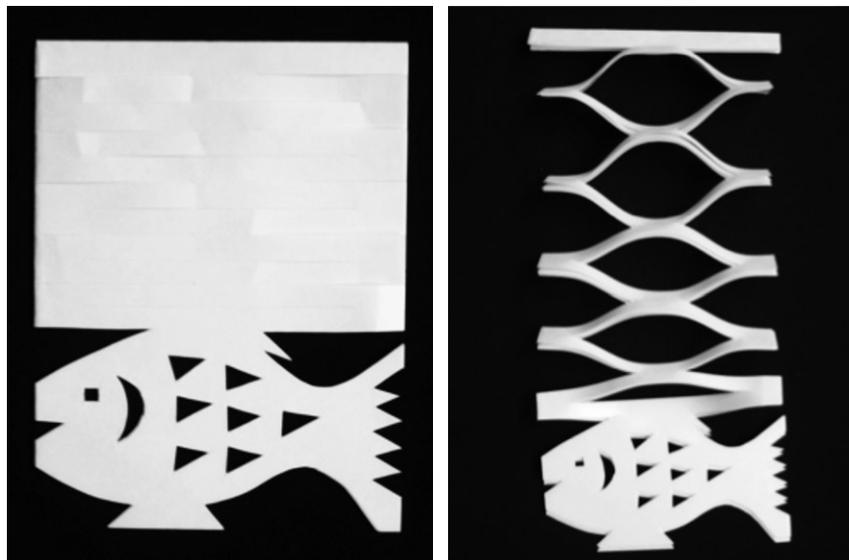
<写真114>マンガンの幣束



<写真115>稲荷の幣束

「紙紙垂形式」

先に挙げた「切り透かし形式」の「正月飾り」と一組にして飾るお飾りである。ここに切られている魚は「鮎」とされている。



<写真116>紙注連形式

諏訪神社（すわじんじゃ）

(1) 鎮座地：宮城県仙台市青葉区上愛子字宮下40

(2) 主祭神：建御名方神

(3) 例祭日：4月29日

(4) 由緒：

当社は元、国分荘三十三ヶ村の総鎮守国分一宮である。延暦年中（782～805、平安）氏子一統山神と称して崇め奉る。文治5年（1189、鎌倉）源頼朝泰衡を討伐の為発向の時戦勝を祈りその報賽の為伊沢四郎家景を以て社殿を建立（拝殿長床）せしめ諏訪社と改称し、新に十五末社を建立したので、当山はすこぶる荘麗を極めた。これより先、信濃国佐久郡の住人源房治の後裔佐久太郎房義、佐久次郎治義の二人頼朝に従って来て社務を掌ったといわれる。康正3年国分下野守宗治、郷六九郎再興、此の時西山なる御殿城より現今の地に移し奉る。永禄2年国分能登守宗政、同丹後守宗元、次、息刑部左衛門綱元、郷六讃岐守政次、息惣左衛門政友社殿を再築して神馬一頭を寄進した。慶長3年国分家没落、郷六惣左衛門故有りて山岸修理助、堀江長門守、同但馬守施主となり12月1日遷宮、祢宜伊勢守治清、其子中将奉仕。元和9年藤原朝臣政宗再建、宮本坊奉仕。寛永11年12月晦日の夜宮野長永夢に和歌一首を得た。即ち「世を長く保つ心は政宗の世界しつかに住吉の松。」と。此の時茂庭了庵綱元の室下愛子に在り、綱元はこの和歌を政宗公に奉聞したところ政宗大いに喜び、金3両を奉納し諏訪夢想大明神と贈号、額面を掲げ奉った。翌12年の政宗の造営は造営代官茂庭了庵綱元、奉行猪狩八右衛門元次であった。此の時本殿長床石階を修造して輪奐の美を極めた。現在の社殿がそれである。寛文3年再営の際は願主茂庭周防定元でこの歳は伊達家に原田の難があった為、国分、名取、亘理、伊具、宇田、柴田、刈田、志田、遠田、加美、桃生、牡鹿、栗原、登米、玉造、磐井、胆沢、江刺、気仙の各郡より広く浄財を募った。貞享2年6月伊達綱村は鳥居を奉献している等藩主領主の武門をはじめ一般の尊崇厚く大いに榮え、今日に及んだ。明治7年8月村社に列せられ、同40年4月供進社に指定された。筒粥の神事、その起源は文治年中と伝えられ、1月14日の深夜から暁にかけて行われる。筒粥を神前に煮、当年の五穀野菜の豊凶を卜定する神事である。現在の社殿の主要な部分は、寛永12年（1635）政宗の代から宝永2年（1705）の間に幾多の困難の末成ったものと思われ、覆屋で保護されているからほとんど腐蝕することなく保存されている。本殿は三間社流造、こけら葺、桁行15.3尺、梁間9.1尺三間の向拝と浜床をつけ、中宮・左宮・右宮に分れている三社造で、彫刻も江戸中期の堅実な手法で施され、社殿と長床だけの古い形式の美事な建物で昭和38年7月本殿と12枚の棟札を含めて県の重要文化財に指定された。

(5) 合祀社：大字作並鎮座の八幡、大伊勢澤の山、稲荷、葉山、薬師、各神社を明治四十二年五月に、大字熊ヶ根の塩流山、熊野、関所の各社を翌四十三年五月に合祀した。

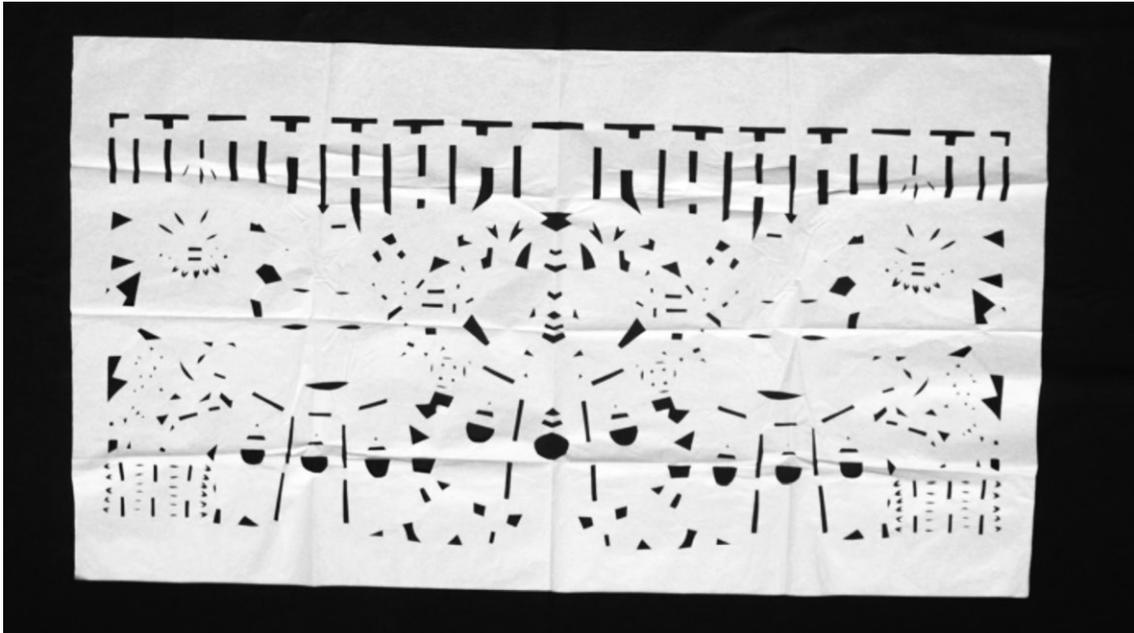
(6) 境内社：八幡神社、塩流神社

(8) 宝物：鰐口 茂庭綱元奉納、甲冑 伊東七十郎着用、扁額 「国分一宮諏訪神社」、獅子 天明八年奉納、和銃二十丁、剣 二十振、手鎗 五本

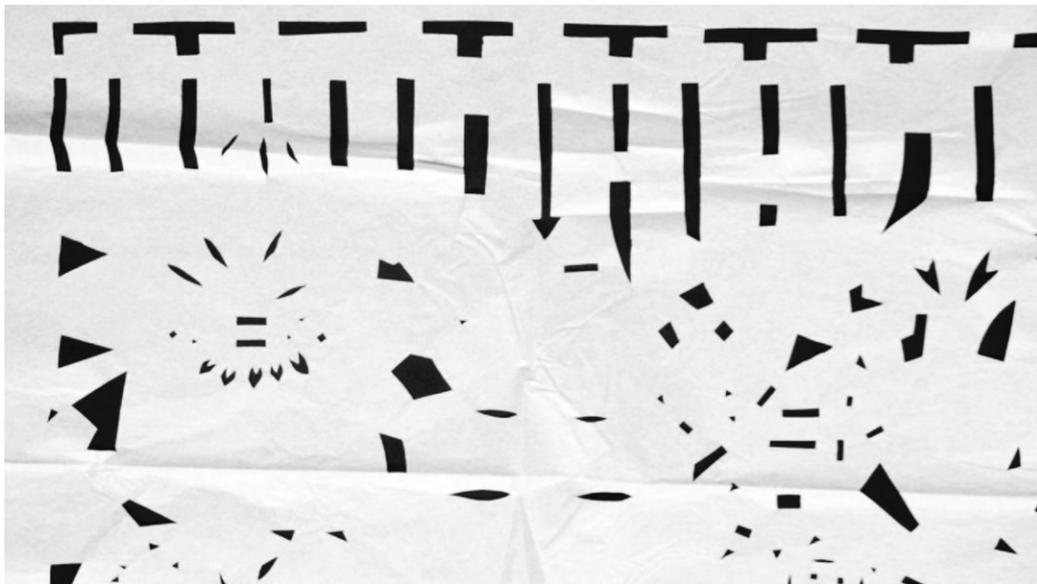
(9) 境内地：692.25坪

(10) 正月飾り：

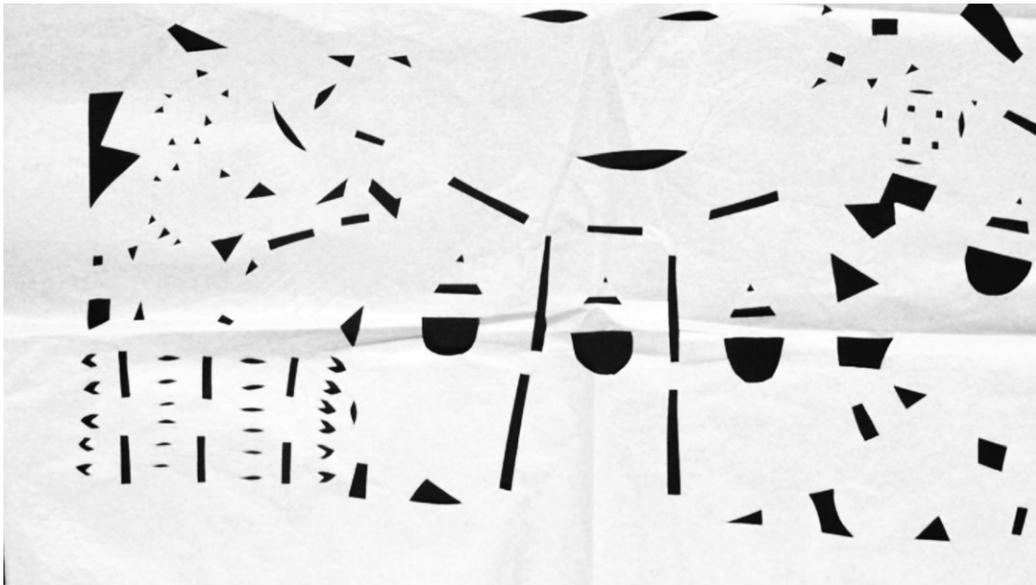
「諏訪神社」の「切り透かし形式」には大・中・小の三種がある。「お飾り：大」については、上部に紙垂が下がり、三方が三台並んでいる。両側の三方には「三重ね餅」が乗り、「俵」「松葉」などが描かれている。



<写真117> 「お飾り」大 1098mm×624mm

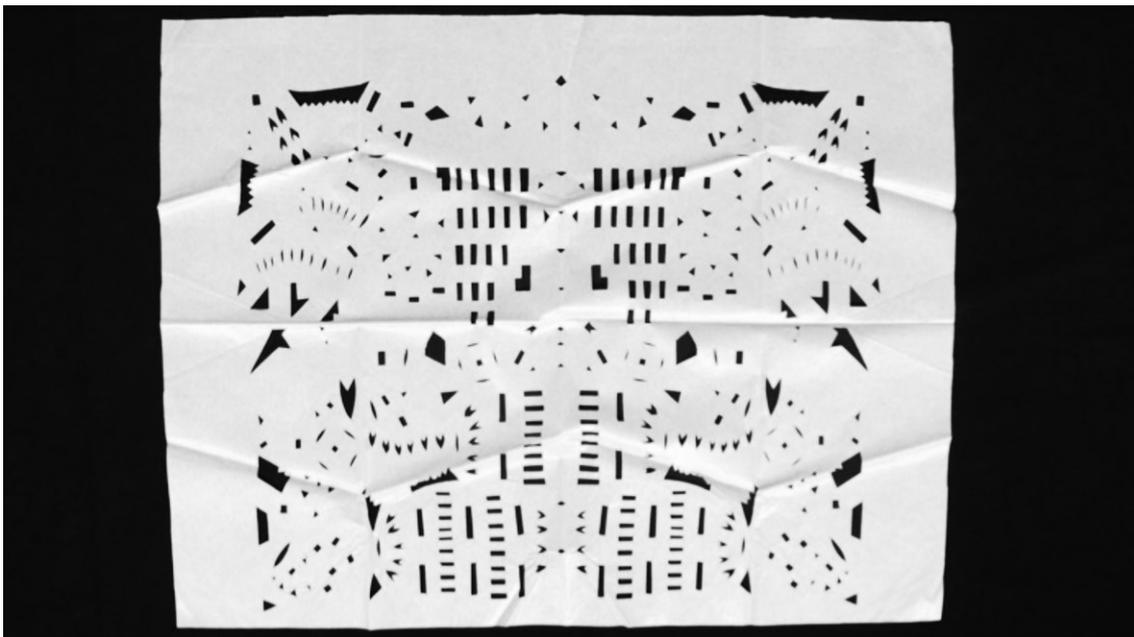


<写真118> 紙垂 (左上部)

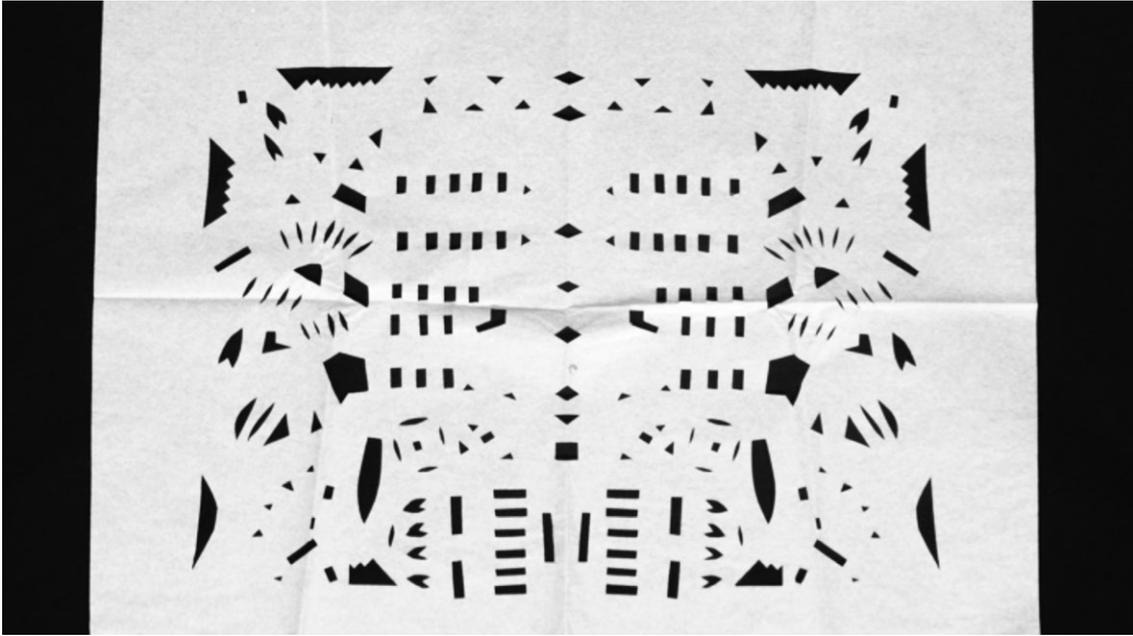


<写真119>三方と米俵、古銭など（左下部）

「お飾り：中」は「俵」に乗った御幣が中心に立ち、周りには古銭や松葉などが配されている。デザインとして見た場合、「大」よりも少し具象性が低く、何をデザインしたかがわかりにくくなっている。



<写真120>「お飾り」中（684mm×535mm）



<写真121> 「お飾り」小 (551mm×395mm)

小倉神社（おぐらじんじゃ）

(1) 鎮座地：宮城県仙台市青葉区大倉字宮前1

(2) 主祭神：天照皇大神・大己貴神・少名彦神

(3) 例祭日：4月29日、11月3日

(4) 由 緒：

平家の一族であった筑後守貞能が、奥州に來り、跡を宮城都大倉の山蔭に留められた。かの山城国乙訓郡に鎮座まします式内社小倉神社は、平家一族が尊崇したあらたかな神社であったので、この地大倉に隠棲されるや、ここに同社の分霊を勧請して厚く祀ったと伝えられているが、その時代年月日は明らかでない。その後、天正年間に当地の豪族大倉蔵人信成なる者が、武運を祈願して社殿を改造築して篤く祀ったという。天正19年（1591）に大倉家十三代の重忠が佐沼の役に戦死し、大倉家が衰亡するまで本社を篤く尊崇していたものと見られる。明治8年3月村社列格。大正元年9月、字注連沢の神明社をはじめ、字宮村の水分神社、字横川の白鬚山神社、字真川の船形山神社と合併した。

(7) 社 殿：本殿5坪（間口2間半、奥行2間）、拝殿 19.5坪

(9) 境内地：400坪

(10) 正月飾り

大倉ダムの手前に位置する小倉神社は、近世には本山派修験の家系で大学院と称していた。現宮司で14世といわれ、地元では近世以来の「法印さん」の呼称で通じている。1984年以来、氏子などが一番多く集まる11月3日の秋の大祭の際に「正月飾り」の頒布も行うことになっている。

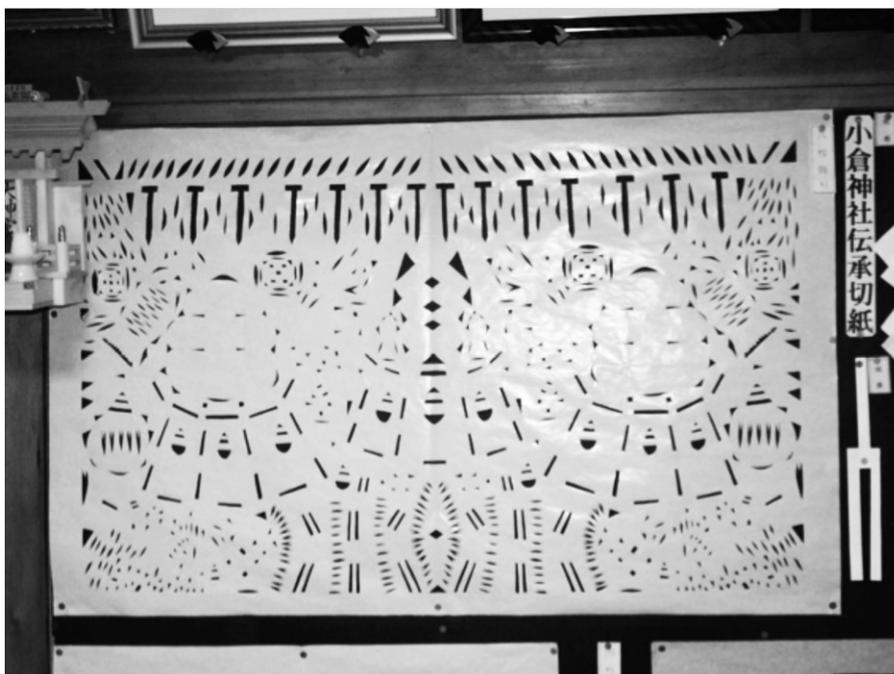
「正月飾り」は、それぞれの家の要望などによって頒布する内容が異なるが、神社で奉製しているものとしては、以下のようなものがある。

- ・お飾り 八枚飾り
六枚飾り
四枚飾り：新旧に種あり、新しいものは現宮司が考案した。
二枚飾り：近年の部屋の大きさに応じて2007年から奉製するようになった。
- ・鮒幣束 「口すう鮒」とも呼ぶ。上記の「お飾り」とともに飾る。
- ・祓い幣束
- ・白幣束
- ・紙垂
- ・略紙垂
- ・梵天 大倉日向の二戸の氏子のみ。



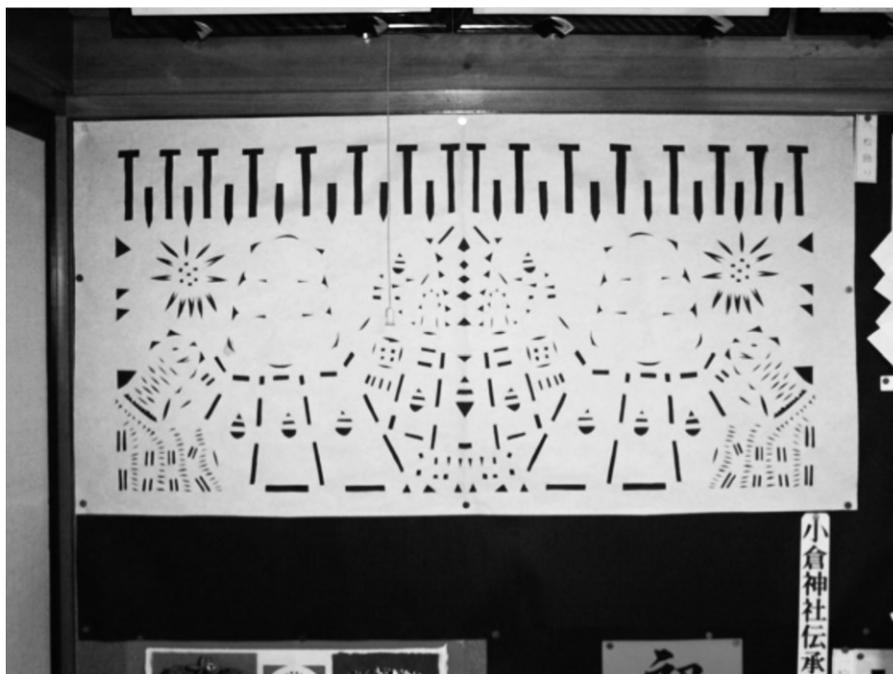
<写真122>小倉神社内に飾られている奉製している正月飾り

「八枚飾り」は、上部には注連縄が渡され、そこに紙垂が付けられている。中央には三つの三方がおかれているが、中央のものには「ご弊」、両側のものには「三重ね餅」が乗せられている。紙垂の下、三重ね餅のラインには、小銭が四個並んでいる。中央下部には「米俵」が二つ並び、両側下部には「田圃」が描かれている。左右の端の上下には「笹」があり、両側中央部には魚と亀が描かれている。



<写真123>八枚飾り

「六枚飾り」の図柄もまた、上部に紙垂が並べられている。このお飾りにも三方が描かれており、中央には「御幣」、両側には「三重ね餅」という同じモチーフで描かれており、その他に「松の葉」「魚」「田圃」などが「八枚飾り」とは多少異なった形に描かれている。



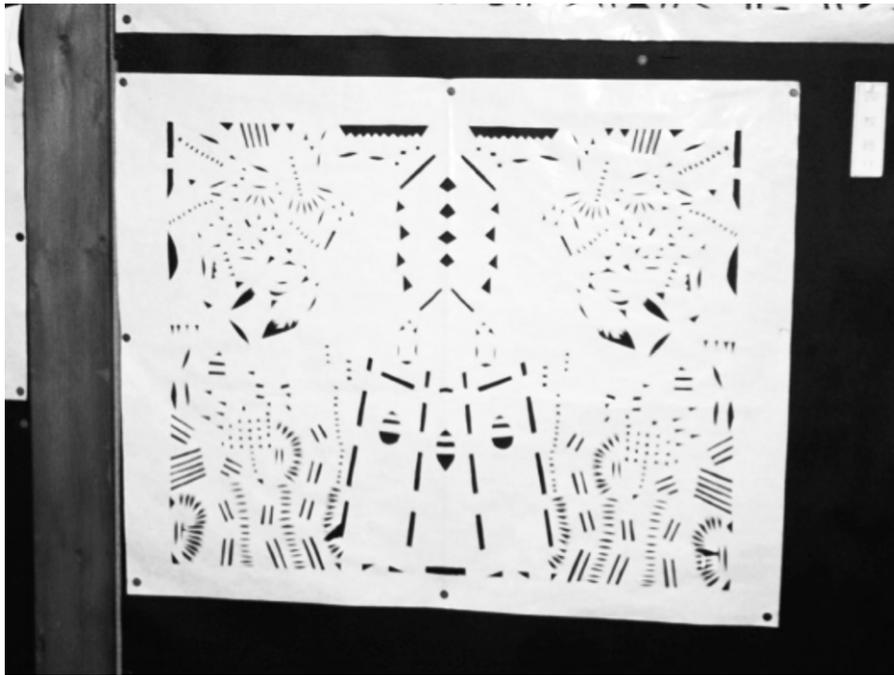
<写真124>六枚飾り

この神社の「四枚飾り」には新旧二種確認される。どちらも中央に三方が一台置かれているが、古いタイプでは、三方に乗るのは「蕪」で、上部左右は「笹」、上部中央は「ゴボウジメ」、それらの下には「魚」「松葉」「田圃」が描かれている。

これに対して新しいタイプは、現宮司が考案したもので、三方の上に乗っていた「蕪」を、「御幣」に改めた。

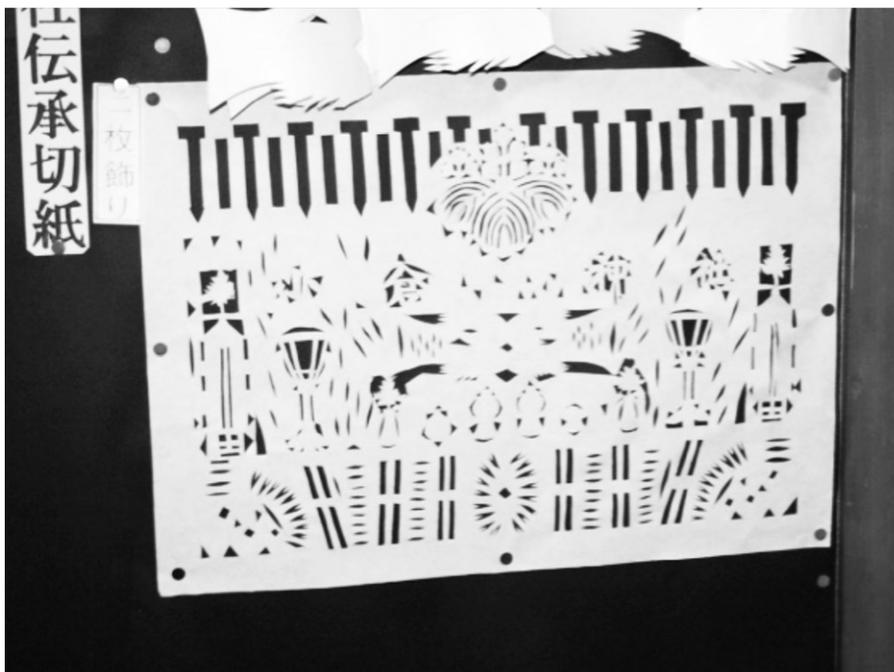


<写真125>四枚飾り：旧



<写真126>四枚飾り：新

「二枚飾り」というのは従来は作っていなかったが、近年の新しい家に「正月飾り」を飾る際、大きさに限界が出て上手く張れない場合も散見されるようになってきた。そのため2007年から小さいタイプを創設して頒布するようになった。このお飾りには「小倉神社」という文字が入っており、全体のモチーフはこれまで使ってきた「お飾り」とは大きく変化している。このように、新しい発想に立った、新しい「正月飾り」が生まれ出ている点に留意することは、「伝統」といわれてきた文化形成の実態をニュートラルに見ていく上で看過できないことである。



<写真127>二枚飾り



<写真128> 「口吸う鯛」や「幣束」

熊野神社（くまのじんじゃ）

- (1) 鎮座地：宮城県仙台市泉区実沢字熊野山17
- (2) 主祭神：神祖熊野大神櫛御気野命
- (3) 例祭日：10月第2日曜日（10月9日）本例祭日

(4) 由 緒：

伊達家臣、八乙女淡路守の氏神として、実沢八乙女の館内に鎮座していたものを、後水尾帝の元和元年（1614）に現在の地に社殿を造営し、実沢地域の守護神としてお祀りしたものである。明治5年6月に村社に列せられた。明42年11月村内の須賀、葉山、神明、道祖、諏訪、軻遇突智の各社を合祀した。

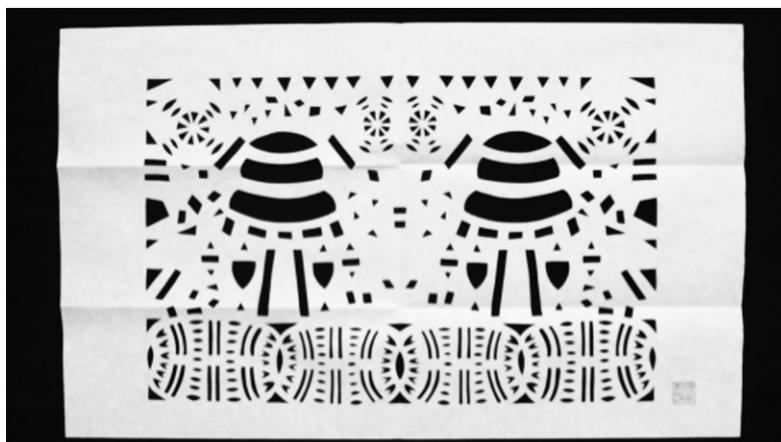
(7) 社 殿：本殿 流造3坪

(10) 正月飾り：

兼務社である以下の神社に対しては、全て「幣束形式」は頒布し、さらに宇佐八幡神社と鷺倉神社そして賀茂神社については「切り透かし形式」も頒布している。

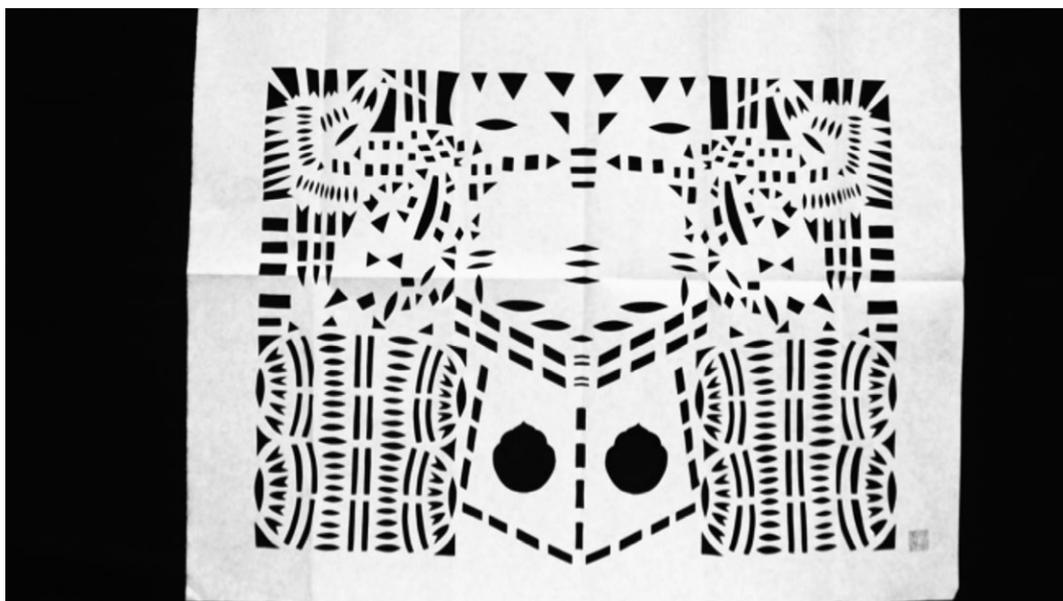
宇佐八幡神社	泉区根白石館下
八幡神社	泉区朴沢字八幡下
鷺倉神社	泉区福岡字小山
貴布禰神社	泉区小角字明神
住吉神社	泉区西田中字下田中
賀茂神社	泉区古内字糺

熊野神社では、「切り透かし形式」のお飾りを大小二種頒布している。「小のお飾り」には、三方が二つ並んでおり、三重ね餅が乗っているものと考えられる。上段には「注連縄」が貼られ、下段には俵が並んでいる。



<写真129>お飾り：小（623mm×384mm）

これに対して「大のお飾り」は、中央に三方に乗った燕が描かれている。下半分の両側には「俵」が並んでおり、左右の最上部には鳥が内側を向いているのが分かる。官司によるとこの鳥は、「鳳凰」であるという。



<写真130>お飾り：大 (770mm×619mm)

第4章 まとめ

今回の調査では、仙台市内で盛んに見られる「正月飾り」の実態について、神社の側の資料を中心に把握することを心がけてきた。これまで見てきた成果から分かることを以下にまとめると共に、今回の調査の中でやり残した問題について整理することにしよう。その際の基本的な資料として、まず最初に第2章で扱った神社に対するアンケート調査の結果を<表3>に示す。

<表3>仙台市内神社の「正月飾り」奉製状況概観

	紙注連形式	切り透かし形式	幣束形式
現在奉製中	11	23	64
以前奉製	3	6	2
奉製記録無し	43	37	9
無回答	35	26	17

- ・まず神社に対するアンケート調査の結果からは、現在奉製中の「正月飾り」の種別としては「幣束形式」が圧倒的に多く、奉製されているものの内の65.3%を占めていることが明らかになる。見てきたように幣束にはさまざまな変化型も見られるが、正月以外であっても基本型の幣束は多くの神社が奉製している。それを正月に際しても頒布していると考えれば、これが多くなるのは当然と考えられる。
- ・「以前奉製」を見ると「切り透かし形式」の割合が高く、総計11件の内の54.5%にあたる6件を占めている。事例数が少ない点に不安は残るが、記憶に残る限りの仙台市の以前の「正月飾り」には、現在見られるよりも「切り透かし形式」のものが多く確認されたものと推定される。確かに、「切り透かし形式」を奉製する際の手間を勘案すると、そのような選択が行われてきたことは十分考えられよう。
- ・また「奉製記録無し」の最多は「紙注連形式」となっているが、そもそも「現在奉製中」の中でも「紙注連形式」は11.2%しか占めていない。この点を考え併せてみるなら、仙台地域が、宮城県北の気仙沼地域などとは異なって、「紙注連形式」の「正月飾り」が余り用いられていない地域であることを裏書きするデータとして読むことができよう。このような形態採用の相違が生じてきた背後にはさまざまな要因が想定できるものと思われ、詳細な調査が待たれることになる。
- ・非常に単純化するなら、仙台市内は「幣束形式」の「正月飾り」採用地帯ということができ、そこに多少の「切り透かし形式」とそれより少ない「紙注連形式」が加わって形成されているということができよう。そのような理解をすると今後の課題として、後二者が幣束中心の仙台地方にどのような分布で入り込んでいるのか、ということが課題となってこよう。かかる重なり具合を見ていく際には、単なる地域性のみならず、関わりをもった神社相互の関係にも眼を配らなければなるまい。それは時には神職の個人的友人関係などにも留意した調査が必要になるものと思われるが、そのような視点は、離れた地域の「切り透かし形式」のお飾りのデザインが酷似している事実を見る時に再認識させられる。
- ・一つの神社における「正月飾り」奉製の歴史的展開に注目してみるなら、歴代の宮司の取り組みの違いが反映されて、奉製している「正月飾り」の種類や大きさなどに変化が見られることが明らかになる。この点は、今回の調査の中で宮城県神社庁に保管してある、以前収集した「正月飾り」を今回入手した「正月飾り」と比較することで明らかになった。しかし資料を検討していく中で、そのような変化の最大の理由を神職の考え方の違いにのみ帰してしまうことはある程度まで妥当と思

われるが、近年の日本における正月に対する人々の考え方や、さらには大きな社会変動の波による社会生活のあり方の変化などの影響力にも十分留意すべきものと思われる。そのきっかけは、人々はその住居を現代的・西洋的な新しい家屋に替えたことにより、そもそも「正月飾り」を従来のように設置する“場”を採ることができないなどといった、「正月飾り」にとってはその存亡の危機とも言えるような問題が発生している“事実”である。こうした変化を意識しながら調査に当たる中、かかる変化に敏感に対応している神社がいくつもあることを知ったことは収穫である。そのような例では、以前まで奉製してきた大きさは異なった小型サイズの「正月飾り」を新たに創製するなどして、人々のニーズに応えるべくきめ細かな工夫をしていることが明らかになったのである。このような事例を見てくると、「正月飾り」に見られる変化も、単に神職の「代」の違いに留意するのみならず、たとえ同じ一人の神職にあっても、時期によってさまざまな変化をしている可能性がある点を見逃すことができないことが明らかになる。つまり「正月飾り」という仙台地方の伝統的習俗を見る時の視点に、「伝統」の文字に縛られたスタティックな見方をすることを批判的に見直し、ダイナミズムの中で営まれている現実の信仰現象のありのままの姿に眼を向けることが求められているのである。

文献一覧

*以下に挙げた文献は、本報告作成のために使用した文献のみならず、仙台の「正月飾り」に言及し
てあるものを中心にとりあげた。作成に当たっては、仙台市文化財課の協力を得た。

- 秋保町史編纂委員会編 1976『秋保町史』
伊藤優 1995「仙台地方の正月行事・調査報告1」『仙台市歴史民俗資料館調査報告書』14
伊藤優 1996「下飯田の祭と年中行事」『仙台市歴史民俗資料館調査報告書』15
伊藤優 1997「仙台地方の正月飾りと伝承切紙」『仙台市歴史民俗資料館調査報告書』10
伊藤優 1997「伝承切り紙の頒布について—仙台市若林区八幡神社の事例から—」『東北民俗学研究』第5号
伊藤優 1998「伝承切紙の形態」『仙台市歴史民俗資料館調査報告書』17
泉市史編纂委員会編 1986『泉市史』下
燕石齋薄墨 1859『仙府年中往来』
河原町一丁目街づくり委員会編 1982『まち 河原町—その歴史と町なみ—』
熊谷清司 1981『日本の伝承切紙』文化出版局
佐々田弥生 2002「農家の年中行事」『仙台市歴史民俗資料館調査報告書』20
佐々田弥生 2003「仙台地方の年中行事」『仙台市歴史民俗資料館調査報告書』21
佐々田弥生 2003「仙台地方の祭礼と年中行事」佐藤雅也 『仙台市歴史民俗資料館調査報告書』21
佐藤雅也 1991「仙台地方の山村地域における正月・小正月行事」『仙台市歴史民俗資料館調査報告書』10
佐藤雅也・伊藤優 1997「仙台地方の正月飾りと伝承切紙」『足元からみる民俗(6)』(調査報告書第16集) 仙台市歴史民俗資料館
佐藤雅也 1998「仙台地方の正月飾りと伝承切紙」『民具研究』118号
佐藤雅也 2003「きりこやご弊のある風景—結城家・石田家の正月飾り—」宮城の正月飾り刊行会編『祈りのかたち—宮城の正月飾り—』日貿出版社
佐藤雅也 2004「仙台地方の正月儀礼—正月迎えの切紙を中心に—」『研究紀要』東北芸術工科大学東北文化研究センター編
札幌大学社会学演習研究部編 1973『宮城県宮城町芋沢実態調査報告書』
仙台市歴史民俗資料館編 1980『仙台市坪沼の民俗』
仙台市歴史民俗資料館編 1981『仙台市荒浜の民俗』
仙台市歴史民俗資料館編 1982『榴岡と宮城野の民俗』
仙台市歴史民俗資料館編 1983『河原町と南材木町周辺の民俗』
仙台市歴史民俗資料館編 1984『八幡町とその周辺の民俗』
仙台市歴史民俗資料館編 1985『堤町周辺の民俗』
仙台市歴史民俗資料館編 1986『仙台山のくらし海のくらし—坪沼と荒浜—』
仙台市歴史民俗資料館編 1986『御譜代町の生業 職人と商人』上
仙台市歴史民俗資料館編 1987『御譜代町の生業 職人と商人』下
仙台市歴史民俗資料館編 1988『広瀬川流域の民俗 中間報告』
仙台市歴史民俗資料館編 1988『宮城町のくらし—流木の里を訪ねて—』
仙台市歴史民俗資料館編 1989『広瀬川流域の民俗 中間報告』
仙台市歴史民俗資料館編 1990『広瀬川流域の民俗』
仙台市歴史民俗資料館編 1995『祝いの日々—仙台地方の年中行事—』
仙台市歴史民俗資料館編 2003『祭礼と年中行事』
仙台市歴史民俗資料館編 『吉祥大吉—仙台地方の伝承切紙—』
伊達おとも 1936「仙台の昔の正月」『河北新報』(1936.1.4~1.6)
堤町まちがたり編集委員会編 1992『堤町まちがたり』
東北学院大学民俗学研究会編 1996『泉ヶ岳周辺の民俗』
中田の歴史編集委員会編 1991『中田の歴史』
七北田村誌編纂委員会編 1953『七北田村誌』
二世十辺舎一九 1849『仙台年中行事大意』
文化庁編 1972『日本民俗地図』1
文化庁編 1978『日本民俗地図』2
三原良吉 1947「二口谷の正月」『仙台郷土研究』16-2
三原良吉 1952「仙台民俗誌—歳時—」『仙台市史』6 別-4
三原良吉 1983『二口谷の民俗』
宮城郡教育会編 1928『宮城郡誌』
宮城県教育委員会編 1977『宮城県民俗分布図—緊急民俗資料分布調査報告書—』
宮城県教育委員会編 1996『宮城の民俗』
宮城県教育委員会 2000『宮城県の祭り・行事』
宮城県教育会編 1931-5『郷土の伝承』

宮城県史編纂委員会編 1960『宮城県史』20
宮城県神社長編 1972『宮城県神社さきこ写真集』
宮城県神社庁編 1972『「さきこ」写真集』, 宮城県神社庁
宮城町誌改訂編纂委員会編 1988『宮城町誌』
宮城町誌改訂編纂委員会編 1989『宮城町誌』続編
宮城の正月飾り刊行会編 2003『祈りのかたち—宮城の正月飾り—』 日貿出版社

——1850『仙台年中行事絵巻』
——1925『仙台昔話電狸翁夜話』

仙台市文化財調査報告書第375集

**仙台旧城下町に所在する
民俗文化財調査報告書⑤**

仙台の正月飾り

2010年3月

発行 仙台市教育委員会
仙台市青葉区国分町三丁目7-1
文化財課 TEL 022 (214) 8892

印刷 株式会社 東北プリント
仙台市青葉区立町24-24
TEL 022 (263) 1166
